

E · D · E · N



## 1, 依 頼

その雨は突然だった。どんよりとした空模様だなと空を見上げていると、目の前を一筋の何か  
が落下し、三階下のアスファルトに黒いシミを作る。一つ、また一つとそれが続き、やがてそれ  
は出来の悪いアダルトビデオのように視界に薄いモザイクをかけた。ビルの前の辻でいつものよ  
うに話しこんでいる老人たちはわあわあと何かを言いながら、最後まで手を振ってそれぞれの場  
所に帰っていく。

ふと辻の逆側を見ると、灰色の町並みに映える薄いピンク色の服を着た女性がこちらに向かっ  
て走ってくる姿が見える。傘を持っておらず、左脇に買い物袋を抱え、右手を頭上にかざして雨  
を防ごうとしているようだが、その効果はドラマや映画を見てもわかる通り、ほぼ皆無である。

私は傘を持つと部屋を出て、一階へと続く階段を降りる。このビルは四階建てのためエレベ  
ータはない。階段を駆け下りるのは私の趣味ではないし、いつもの歩調で降り、ビルの外に出て傘  
を開くとちょうど女性がビルの前に着くところだった。

「おかえり。窓から斉藤さんが走ってくるのが見えたから、迎えに来たよ」

彼女はそこでにっこりと笑ってお礼を言うだろう、と私は思っていたのだが、予想とは裏腹に  
、僅かに頬を膨らませると、私を押しつけてビルの中に入った。私も傘をたたみその後続く。

「窓から見ていたなら、もっと先まで迎えに来てくれれば良いじゃないですか。どうせいつも  
のペースでゆーっくり階段降りていたんでしょ」

「ご名答。だんだん助手らしくなってきたじゃないか」

「嬉しくもなんともない言葉ですね」

私は階段を駆け下りる以上に階段を昇ることが趣味ではない。いつもならやはりのんびり昇るところであるが、彼女の気持ちも考えて歩調を合わせる。抱えていた荷物を受け取り、部屋に戻る。彼女はすぐに私の居住スペースにある洗面所からタオルを出して髪を叩くように拭き始めた。

「エセフェミニスト所長のせいで結構濡れちゃいましたよ。今日は久しぶりにお客さんが来られるから結構気合い入れてきたのに」

元々激怒していたというわけではなさそうだが、彼女の様子を見るからに最初の膨れっ面モードは解除されつつあるようだ。ここまで来ればもう一息である。戸棚から自分と彼女のカップを取り出し、ポットのコーヒーを注ぎ彼女に渡す。

「いや、今の状態でも十分魅力的であると思うよ。それに依頼人も女性だ。あまり決まりすぎているとヘンな警戒心を持たれるかもしれない。合コンでそういう経験、ない？」

「私、合コン行ったことありませんから」

「あそう」

全くもって女性との会話というものは難しい。こんな日常会話でも駆け引きが必要なのだから。次は一拍置くところである。私は彼女が買って来た袋の中身を確認した。クリーム入りのスポンジケーキが四つと、普段私たちが飲んでいるインスタントコーヒーより見た目は高級そうなコーヒーが入っている。

「あ、ダメですよそれ。今日のお客さんに出すんですから」

「それにしたって四つは多いじゃないか。インスタントコーヒーも十袋入りだ。依頼人に二つ、私たちも美味しいコーヒーで一つずつ、という計算。どうだ、当りだろう？」

彼女がちらりとこちらを見ただけで何も言わないことを確認し、私はいまカップに入れたコーヒーをポットに戻す。

「せっかく斉藤さんが買ってきてくれたんだ。美味しいうちに食べようじゃないか。コーヒーも私が淹れよう。君は座って休んでいたまえ」

「調子良いですね。まあ本当に久々の依頼ですし、前祝ということで食べちゃいますか」

と、ここで私のシナリオは完成したことになる。いまや彼女はすっかりいつも通りのキュートな女性となり、私も美味しいコーヒーとケーキで煙草を楽しむことが出来る。彼女の言う通り、今日は久々の依頼人も来る。朝の占いはチェックしていないし、そもそも信じてもないのだが、私の誕生月の今日の運勢は一位であること間違いなしだろう。

早速新しいコーヒーを淹れなおして、私たちは昼食前の優雅なひと時を応接用のソファで向かい合って楽しんだ。

□

「依頼人の女性、どんな人ですかねえ」

小さなスポンジケーキを小さく口に含みながら彼女は言う。彼女にとっては自然なことなのだろうが、計算された仕草だとすれば彼女はまさに策士である。

「まあ会ってみればわかるよ。十三時だっけ？ ヒアリングシート、出来てる？」

「はい、ちょっと待って下さい」

自席に戻り一枚の紙を持ってくる。依頼の電話を受けたのは彼女なので、用件は全て彼女が整理していた。

「婚約者の素行調査、ですね。依頼者の名前は高清水冴子。声の感じからして、私と同年くらいだと思われます」

「へえ、斉藤さんと同じくらいかあ。調査料のことは話してあるんだよね？ 払えるのかな、若い女性が」

「あー、それってなんか若い女性に対する差別発言じゃないです？ 若い女はお金持ってない、みたいな」

「私の周りで若い女性と言ったら斉藤さんくらいしかいないからね。つい比較してしまう。君を見ている限りお金がありそうには見えない」

「そうですか。じゃあ賃上げ交渉でスト起こしますよ、いいんですね」

「……前言を撤回しよう。まあとにかく、会ってみればわかるということだよ。美人だと良いね」

「サイテー、フケツー」

と、漫才のような会話をしていると事務所のチャイムが鳴った。会話をやめて顔を見合わせる。ちらりと時計を見ると午前十時半。依頼人が来るには少し早い。立ち上がろうとする彼女を制し、入口へ向かう。その日暮らしのこの商売。一日に二人も客が来るということは、悪いことの前兆に違いない。占いは最下位だったかもしれないと思い直す。

「はい」

ドアを開けるとそこには見知った顔がいた。気分が一気に重くなる。

「ああ、やはり予想は的中だ。今日は厄日だろう」

「相も変わらず失礼な男だな、お前は」

そこに立っていたのはかつての同僚だった男、田中だ。この男が来るとろくなことにはならないというのが経験上の結論だ。

「帰ってくれ。今日は別の依頼人とのアポがあって立て込んでいる。平日のこんな時間からこんなところをプラプラしている国家公務員の相手をしている暇はない」

「よく言うよ、道楽で探偵やってるやつがさ。あ、かおりちゃんこんにちは。まだ西崎の助手やっていたんだね。かわいそうに」

「こんにちは。労働は尊いですから。それに私がいなくなったら所長、路頭に迷うと思って」

さてここで、読者諸君も気になっているであろう私たちの紹介をしよう。

私の名前は西崎慎介。調査業、世間一般的に言う、「探偵」である。今は社会の片隅で息を潜むように生きているが、もとは某行政機関の諜報員である。あちらこちらに張り巡らされている策謀と、人を蹴落とすことしか考えていない人間と接することに耐えられなくなり、今に至る。

傘を忘れて外出していたのが助手の斉藤かおり。僅かに茶色いセミロングヘアでくりっとした

眼がチャームポイントだと自分で言っているが実際はどうであろう。だがしかし、世間一般的に見て彼女が魅力的であることは間違いないだろう。恋人がいないというのも、彼女の年齢から考えると不思議な話である。一説では私に好意を抱いているのではないかという話もあるが、その説を唱えているのはものすごく暇なときに現れる、私の中のもう一人の私であるため、根拠は全くない。

そして当事務所の疫病神であろう来訪者は田中。私の諜報員時代の同僚である。下の名前は知らない。恐らく彼も、私の下の名前は知らないだろう。訊かれもしなかったし、訊きもしなかった。そういう世界にいたのである。私が辞めたあとすぐに、他の部署に移動になったらしいが、今はどこにいるのかは知らない。

「その通り。ホント、かおりちゃんみたいな人ばかりだったら、こんな寂れた事務所に来る必要はなかったんだけどなあ」

田中はそう言うと、私の横をすらりと抜けて中に入る。応接ソファに腰を下ろすとすぐに煙草に火をつけた。デスクの上を見ると、ヒアリングシートは既に片付けられている。こういうときの彼女の対応を私は比較的高く評価している。状況を判断して対応する能力。決して彼女の顔が良いとか、スタイルが良いというだけで雇っているわけではないのだ。

「うちの事務所じゃ公務員の自己啓発セミナーは請け負っていないぞ。他をあたった方が良い」  
私も田中の向かいに座り、煙草に火をつける。タイミング良く彼女がコーヒーを三人分用意して、私の横に座った。

「そんなことは考えていないさ。お前が講演なんぞするとみんな仕事をしなくなる」

田中はそう言いながら、ポケットからメモ帳を取り出すと、「この事務所、盗聴は？」と書く。物騒な話だ。私はこういう世界にさよならしたはずなのに、世界の方が手を放してくれない。「過去にそういう形跡はない。私は年がら年中ここにいるが、不審な人物の出入りも考えられない。斉藤さん、心当たりは？」

「ないと思います。所長がいないときは私がずっとここにいますから」

「オーケーだ。まあ少し聞いてもらいたい話がある。あ、かおりちゃん、コーヒーいただきます」

コーヒーを一口飲み、田中は大きく息を吐き出した。僅かだが緊張していた何かがとけたようだ。全くもって、嫌な予感しかしない。何故友人と話をするだけでこのようになるのか。話の内容がそれだけデリケートというのが答えだ。

「聞くだけだ。協力する約束は出来ない。その場合、口を閉じて、今まで通り息を潜めて生きていだけだ。彼女も同じで、俺らは何も聞かなかつた、知らなかつた、だ。そういう話だろう？」

田中」

「相変わらずせっかちなところはいただけないが、上出来だよ西崎」

私は小さく舌打ちをする。一友人の前に、食えない男なのだ、この田中という男は。

「まず西崎、お前、"楽園都市-E・D・E・N-"って知っているか？ かおりちゃんは知っているかな？」

私はまったく聞いたことのない名前だったが彼女はそれが当然というように頷く。

「やっぱりお前は知らないか。このエデンってのは、政府が新たな余暇として提唱している、ネット上の仮想都市の名前だ。そういう存在があるということくらいはニュースか何かで聞いたことはあるだろう？」

私はニュースも新聞も見ない、と答えようと思ったが、その仮想都市というのはそんな私でも聞いたことがある。インターネットでゲームをしたり、バカンスを疑似体験したり、また実際に買い物をしたり、立体の世界地図が圧縮されたような場所らしい。

「まあ、軽くはな。私には縁のないものだと認識している」

「確かにこのご時世にパソコンもロクに使えない、ドがつくアナログ人間のお前には縁がない代物だろう。だが先日出された世論調査の統計によると国民の約八割が、なんらかの形でエデンを利用したことがある、と回答している。つまりお前は、これまたドがつくマイノリティということにもなる。」

「田中さん、所長にパソコンとかネットとか言ったって通じませんよ。それは私の管轄です」

「黙って聞いていれば、なんて失礼な発言が飛び交っているのだろうか」

ずい、と胸を張る彼女を左手で制すと、私は煙草に火をつけてあらためて田中を見つめた。

「で、それがどうした？ 前置きは良いから早く本題を話せ。こちらら政経の授業は大嫌いだったんだ」

「ふむ」、と田中も煙草に火をつける。彼女は立ち上がり、換気扇のスイッチを入れた。

「まずは今の俺の所属だが、表向きは総務省ということになっているが、実際はある官僚直属の諜報員をやっている。親会社は変わっていない。昔お前がいた会社だ」

今度は露骨に舌を鳴らしたが、田中はそれを気にとめない。

「そしてエデンだ。あそこは広告収入、オンラインショップのテナント料、ユーザからの課金と、もろもろのコストを差し引いても、政府では無視できない収入源になっている。いまやこの国になくはないものとなっていると言っても過言ではない。と、誰もが思っていると政府は思っている」

「回りくどい言い方だ」

「う～ん、でもそれ、なんとなくわかります。私もいまエデンがなくなっちゃうと、困る部分もあるし、何より少し寂しいかも」

そこで彼女は再び計算されたような仕草、両手でカップを抱え込むようにしてコーヒーを飲む。同じタイミングでコーヒーを飲んでいた田中の目だけが彼女を追う。スケベな男である。こういう場合、横でそれを感じるのと正面から見るのと、一体どちらが幸せなことだろうか。と、くだらないことを考えたくなるくらい、私はこのあとの話を聞きたくない気分になっている。正直今の私は田中に悪態をつくことと、こういったくだらないことを考えること以外は上の空である。

「誰もががおりちゃんぐらの感覚でいてくれれば良いのだけどね。どうも最近、目に見えないくらい小さい芽だが、弊害という名の大樹の芽が育とうとしているらしいんだ」

「なんだそりゃ？」

「ここからが本題だ。西崎の嫌いな話が入ってくるだろうが、まあもう少しだから付き合ってくれ。」

さっき話した俺の今の上司だが、相対的に見てまだ若いがり手と評判の人間だ。だが若く有能が故に、彼を潰す機会を虎視眈々と狙っているやつは多い。そんな有能な上司が、このエデンというシステムはいずれ崩壊するので、ここら辺りで一度路線変更をすべきだと思っている。

と、いうのもだ。これは公には発表されていないことなのだが、重度の依存者というのが出現してきている。彼らはエデンからログオフすることが出来ず、一日中エデンの中で過ごす。仕事にも行かない。食事さえもまともにしない。まるでエデンがリアルで、リアルはバーチャルだとも思っているのか、彼らはエデンで働き、食事をし、眠る。実際の給与もない、食べた気になっているだけで、栄養は摂取されていない。唯一まともにも行っているのは、睡眠くらいだ。

こういう人間がこの先増えたらどうなるだろうな」

田中はここでやっと、新しい煙草に火をつけて一口吸い込んだ。大きなため息と共に煙を吐き出す。彼女が彼のカップを覗き見て、ポットを取りに立ち上がる。



「街から人は姿を消し、社会は最低限の人間のみになる。廃墟のような街にはやがてエデンの夢から醒めた失業者で溢れかえり、治安は悪化の一途を辿るだろう。そうなると、国際的な立場も危うくなる。この国の実質上の親会社が倒産するか、先に切り捨てられるかを競争する羽目になる」

「は、そんな話、二十一世紀初頭にまさに今の時代を描いた映画で見飽きたよ。お前は本当にそんなスクリーンの中の出来事が現実になると思っているのか？ シュワルツェネッガーも大喜びだ。

「そしてもう一つ。結局この話と私になんの関係がある？」

「古い俳優のジョークはあまり面白くないな。まあいい。そうだな……」

田中は手を合わせ、眉間に両親指をあてて下を向く。これは彼が悩むふりをして次のカードを探しているときの仕草だ。お前こそ古い俳優のように演技が変わっていない、と言おうと思ったがそれはやめた。代わりに私も少し本気で考える。本気の彼に適当に接すれば、最終的にうまく丸め込まれてしまうのがオチだからだ。

「こんなことを考えているのはもちろんごく一部の人間だ。だからこんな話を危機予測委員会とかなんとか、そんな名前の場所で話しても相手にされることはない。むしろ、エデンというシステムに依存している政府にとって、若くてキれる官僚を危険因子として処分する絶好のネタを提供するだけになる。

そこで、俺に話が回ってきた。内容は、エデンの現状についての調査だ。やっこさんたちも、今すぐにエデンをどうこうしようとするのは諦めたらしく、いざというときに自分たちにアドバンテージがあるように下地を固めておきたいらしい。

そこで、お前にその調査を頼みたい。どうだ、簡単な仕事だろう？ ただエデンについて調べるだけで、お前が普段受けている浮気調査だとか、失踪人探しだかの倍の報酬は入ってくる」

「簡単な仕事ならお前がやればいだろう。何故私が官僚の派閥争いに力を貸さなければならないのだ。私はそんな仕事より、浮気調査や失踪人探しの方が楽しいね」

彼女が何か言いたそうな雰囲気を出したが、私はそれを無言のプレッシャーで抑え付ける。ここが踏ん張りどころだ。

「もちろん俺がやれるならやっているさ。ところが俺の上司の依頼は、誰か俺以外の人間に調査を行わせることなんだ。

実はうちのライバル会社とも言える機関が俺の上司に目を光らせている。悲しきかな俺の存在は彼らにとって周知の事実だ。へたに動くと少し厄介なことになる。しかしお前なら別だ。会ったところで昔馴染みに会っている、くらいの感覚で、いくら元とは言え、こんな寂れたオフィス街の一角で探偵やってるやつに重要任務を依頼するとは相手も思っていないだろうよ」

瞬時に最悪のケースを想像した。窓の外を確認したいことをぐっと堪える。そんな感情が表情に表れたか、田中は僅かに笑った。勝ち誇ったような、嫌らしい笑い方だ。彼女はきっと、その笑いが何を意味するかわかっていないだろう。

「お前、まさかここに来るまでも尾行されていたのか？」

「ご名答だ。へたくソだったけどな。言っておくがな、お前、本当に足を洗えたと思っているのか？ うちの会社でさえ、ステータスはクリーンだがお前の存在は観察対象者リストに名前があるんだぜ？ 俺らみたいな商売を一度でもした人間は、一生この世界から縁が切れるってこと

はないのさ。

「だったら割り切って受けたほうが得策だと思わないか？ 別にお前に何か被害があるっていうわけでもない。問題となっているのはお前のプライドだけだろう」

「そうですよ所長。私もお手伝いしますから。ただ調べるだけで良いんだったら、私でも出来るはずですよ。所長の負担にはなりません」

田中はしゃあしゃあとと言うし、彼女は良くも悪くも優秀なので、事務所の経営について考えた結果からの発言であろう。まったく、まさに「まったく」、という言葉の頭の中で呟く。ここまできたら、あとは田中の言う、「私のプライド」というものをいかに残すかである。

「気に入らない。実に気に入らない。今までで最も気に入らない。だが、斉藤さんがそこまで言うのなら、引き受けよう。私は君を雇っている以上、給与を払う義務があるからね」

田中は案の定、勝ち誇ったように笑った。彼女と言え、横でほっとしたような、嬉しいようなそんな表情をしている。まあこんなところかと私は思い直すことにした。彼女のこういう表情が見れるなら、それはそれで、まあ良いかと思うのだ。

ここで一つ、賢明なる読者諸君に説明しておきたいのだが、私は決して彼女に恋心を抱いているわけではない。ただ彼女の笑顔にそういう魅力があるということ、私は伝えたいのだ。

そのあと田中はああだこうだと詳細を話し、前金で調査料の半分を置いて帰っていった。調査終了後には残り半分と別途経費を請求、という仕組みである。時刻は既に十二時近くとなり、本命の依頼人もあと一時間程で訪ねてくる。

「ああ、なんだかもう疲れちゃいましたね」

「うん、そうね。今日はもう店仕舞いしたいくらいだよ」

結局穏やかにコーヒーとケーキを楽しむことは出来なかった。私は煙草に火をつけて、その代わりにというように、深く吸い込んだ。この先の一抔の不安とニコチンが脳内で混ざり合うような感覚に陥る。

「あの、なんでそんなに田中さんからの依頼を受けたくないんですか？ 私は直接調査に関わったことはありませんが、その、それほど困難な依頼ではないと思うのですが」

「ん？ う～ん、まあ、ね。色々あるってことだよ」

そうやってお茶を濁した私を見て、彼女は瞳を時計回りにくるっと回した。これは彼女にとって、「ふ～ん」や、「そんなもんですか」等と同義の仕草である。最初はなんでわざわざこんな演出をするのだろうかと思ったが、どうやら癖であるらしく、今ではすっかり見慣れた光景である。

「でも私、実は田中さんって少し苦手なんですよね」

「へえ、客観的に見て、結構イケていると思うけどな。実際あいつはモテるようだし」

「あー、いえ。見た目の問題じゃなくて。なんていうか、言い回しとか。俺は頭いいよーみたいな」

「なるほど。その感は確かに否めないな。あ、っていうことは斉藤さん、もし付き合うとしたら田中より私が良いってこと？」

数秒の沈黙の後、彼女は満面の笑みを浮かべ、やがて自席に戻るとバッグを手にした。

「依頼人の方、もうすぐ来ちゃうので、所長の分も一緒にコンビニでお昼ご飯買ってきますね」

私は彼女のその笑顔を以前に見たことがあると思ひ、しばらく考えた後に思い出した。それはまだ子どものころ、妹と一緒に父親に連れられていったおもちゃ売り場の、女の子向けの人形の

顔にそっくりだった。

※

十三時を少し回ったところで、事務所のドアがノックされた。本日二度目の音である。今度は彼女が入口のドアを開けた。

「あの、本日十三時にお約束していた高清水ですけど」

「はい、お待ちしております。どうぞ中へ」

声だけのやり取りが聞こえる。そこで初めてドアが大きく開かれて、私は高清水という女性を観察することが出来た。

年齢は彼女と同じくらいということだったが、服装や化粧のせいでもういくつか上の印象を受ける。不安に満ちた表情で、見るものすべてが初めてというように事務所内を見渡している。探偵事務所というのは人生で何度も訪れる場所ではない。探偵という職業に誰もが僅かに抱いている危険なイメージが人を不安にし、それと同時に映画のように、「何か起こるのではないか」という期待感が依頼人をこのようにする。そして恐ろしいほど地味な面接がそれらを安堵と落胆に変化させるのだ。そんな光景を私は見慣れている。

「こんにちは、所長の西崎です。どうぞそちらのソファにおかけ下さい」

高清水は小さく頷きソファに座った。先程田中が座っていた場所だ。私もその向かいに座る。タイミング良く彼女が三人分のコーヒーと高清水分のケーキを用意し、私の横に座った。

「あらためまして、西崎です。よろしく申し上げます」

名刺を決められた動作でテーブルの上に置き、静かにスライドさせて高清水に近づける。

「彼女は私の助手で斉藤と言います。必要であれば彼女は席を外させますが、一緒にお話を聞かせてもらってもよろしいですか？」

「斉藤です」

彼女が軽く頭をさげた。高清水は私たちを瞳だけで交互に見る。不安気だった表情が僅かに好奇の表情に変化する。三十なにがしの男と、自分と同じくらいの年齢の女。この組み合わせが高清水の「期待感」の方にスパイスを加える。何より彼女はそういう想像が好きそうな顔をしている。それくらいは、こんな仕事をしているとなんとなくわかるものだ。

「はい、ええ、かまいません」

高清水の表情から今度は、好奇の色が消える。私はそれを見て、コーヒーを一口飲んだ。これは私から彼女への、「たいした依頼じゃない」の合図だった。もし本当に悩んでいれば、そんなに表情が変わるものではない。それに、人は本当の悩みを多くの人に聞かれるのを嫌うものだ。

「ありがとうございます。どうぞ、楽になさってください。不安もあるかと思いますが、別にとって食べようというわけではありません」

私渾身の営業スマイルに、高清水の瞳が再び泳ぐ。私だって別に、イケてないわけではない。「まずはこちらのヒアリングシートにご記入いただけますか？ お名前、年齢、職業等、簡単な高清水さん自身への質問にお答えいただく形となります」

そうして彼女が差し出したヒアリングシートを受け取る。彼女はそれを覗き込むような真似はしない。ただ黙って、手にしているノートに視線を落としている。

「高清水冴子さん、ですね。お住まいは、ここの近くなんですね」

「いつも、通勤時にこの前の道路を通りますので。それで、ここの事務所のことを覚えていて」

高清水はちらりと私の後ろにあるガラス窓に視線を移した。そこにはこの事務所の名前がプリントされている。それが目に入っていたのだろう。

「なるほど。光栄です。ええと、お勤め先は、ほお、これはなかなか大きな会社ですね」

職業欄には大手企業の名前と、企画営業課と記されている。オフィスレディというやつだ。外見や化粧の雰囲気からも納得である。

「失礼ですが、今日はお休みを取られたのですか？ 平日のこの時間はほとんどお仕事ですよね？ いえ、もしかしたらうちが土日休みなんじゃないかと心配されて、わざわざ平日にお越しいただいたのかなと思ひまして」

「そうですね。今日は休暇をとりました。その、ちょっと疲れていた、というのがありますので」

「なるほどです。不躰な質問をお許し下さい。では早速、依頼内容についてなのですが、お電話いただいた時には、婚約者様の素行調査とお聞きしておりますが、具体的にはどのような内容となりますか」

いくら「たいした依頼じゃない」という印象があっても、ここからはデリケートな話になる。私は少しだけ気を引き締めた。

「婚約者、と言っても正式に婚約しているわけではないんです。ただ、もう秒読み段階というか、実際彼との間でもそういう話が出ていましたし、私もそのつもりで準備を進めているのですが、最近、彼の様子が少しおかしくて」

横で彼女がメモをとる音が聞こえる。私は「ふむ」と大袈裟に相槌を打つ。

「様子がおかしい、例えば他の女性がいるような気配がする、とかそういうことですか？ 会う回数が突然減ったとか」

「実際、会社では毎日顔を会わせていますし、社内でそれらしい女の人はいないと思うのですが、最近、エデンでしか会ってくれなくなって。現実でデートらしいデートをすることがなくなりました」

エデン。今日初めて聞く言葉であるのに、もう既に二回目である。私は内心、舌打ちをした。自分がどこか置き去りにされている感覚。僅かに生じる焦り。

「エデンだったら、携帯端末さえあれば、いつでもどこにいてもログイン出来るじゃないですか。だからもしかしたら、エデンで私と会っている間に、実は他の女と会っているんじゃないかと思って」

他の女、という表現に、私は高清水の本質を見たような気がした。何かを隠すかのように外見を煌びやかに見せて、それなのに何にも興味がないように装う。けど実は、子供っぽく、独占欲や執着心が強い。いや、いけないな。これでは非常にいやな感じの女性になってしまう。こんな根拠に乏しい推測ははずれることを祈ろう。

「それで彼の素行調査、ですか。彼氏が普段どこで何をしているかを調べ、そこに別の女性の存在があるかどうかをご報告する、ということですね？」

「はい、そうです」

「なるほど、なるほど。う～ん、そうですね……。これは、この手のご依頼をいただく方皆さんにお聞きしていることなので、気を悪くしないでほしいのですが、男女間のことというのは、話し合えば解決する場合があります。私共に依頼する前に、一度二人で話し合ってみてはいかがでしょう。それとももうそのような話し合いは何度もした、というような状況でしょうか」

「……もう何度も言っているんです。一度ちゃんと話をしたいと。でも彼は、エデン以外では

くに口もきいてくれません。

まずは、理由を知りたいんです。どうして変わってしまったのか。そして可能であればちゃんと話し合っ、また前のように戻りたいんです」



その後、私は依頼を受ける旨を伝えた。私自身、高清水の"動機"を聞く理由はこれ以上ないと思ったし、そもそも動機などと言うものは後付けであるケースが多い。なんでもそうだ。突き詰めていけば、食べたいから食べる。眠りたいから眠る。何かを行うときに理由は必要ないのだ。

高清水からは、調査対象についての知りうる限りの情報を聞き出した。その部分について、いまは割愛させてもらう。私と彼女のこれからを見守ってくれるであろう読者諸君は、必然的にその情報にそって今後の展開を見ることになるためである。

※

客が帰った事務所では、彼女の洗うコーヒーカップがこすれ合う音と、水が流れる音に支配される。雨は既にやんでいた。高清水が来たとき、まだ雨は降っていただろうか。傘を持ってはいなかった。ならば既に雨はやんでいたのだろうか。折りたたみ傘で持っていたバッグの中にしまっていたという可能性もある。判断材料の一つではあるが、決定打ではない。

肩はどうだったか。傘から流れ落ちた滴で濡れている様子はなかった。そう、それに靴だ。ヒールの高い靴だ、と思ったが、その靴は濡れていなかった。雨はやんでいたのだ。

「難しい顔でデスクの上に足を投げ出して煙草を吸う。そんなハードボイルドな趣味、所長にありましたっけ？」

彼女はそう言いながら私のカップにコーヒーを注ぐ。いつの間にか洗い物は終わっていた。

「斉藤さん。お昼にお弁当を買ってきてくれたと思うけど、そのとき雨はやんでいた？」

あのとき、彼女は傘を持って行っていない。

「え？ 雨って、私がケーキを買ってきたときに濡れた、あの雨ですか？」

「そう」

彼女はまず、質問の意図がわからないという顔をして、次に少し慌てた表情になる。

「ちょっと所長、大丈夫ですか？ あの雨は通り雨で、田中さんが来たときにはもう晴れていたじゃないですか」

そうか、その時点から間違っていたのかと、私は自嘲的に笑った。

「どうもありがとう。で、今回の依頼、どう思う？」

「田中さんの方？ それとも高清水さんの方ですか？」

彼女のスイッチも瞬時に切り替わる。

「両方」

「そうですねえ……」

彼女は私のデスクに寄りかかるように立ちながら右手で軽くあごを押さえた。彼女にはあまり似合わない、どちらかというとな性的な仕草だ。私はデスクに足を乗せたまま新しい煙草に火をつける。

「高清水さんの依頼ですけど、私には理解出来ない行動ですね。彼女が求めている情報が何かはわかりませんが、行くべき場所は探偵事務所ではなく、占い師のところだと思います。情報がほしいと言うより、その情報で舗装された進むべき道が知りたい、という印象でした」

「上出来。私は結婚相談所に行くべきだと思ったけどね。しかし、田中も高清水もどちらもエデン絡みだ。なんだか嫌な感じだなあ」

くるりと瞳を回して彼女は言う。

「私からすれば、絡む、という言い方は少し違和感ありますね。エデンは既に、特定の条件下で存在するものというよりは、いま目の前にあるのが当たり前。という感覚ですし」

「見えてさえいればそれが現実になる。人類ってというのは、楽な生き物だよな」

「どういう意味ですか？」

煙草を消してデスクから足をおろす。窓越しに外を見ると、朝の老人たちがまた何かを話している。確かに雨はやんでいた。

「いま斉藤さんが見ている西崎という男は果たして本当に西崎だろうか。私はただのそっくりさんで、本物の西崎という男は既に死んでいるかもしれない。そんな風に考えたことはある？」

「ないですね。給料ちゃんともらえてますし、今の私にとって、所長が本物か偽物かという問題はさほど重要ではありません。でも、所長の言いたいことはわかります。だけどそのことと今回の依頼、何か関係があるんですか？」

「ないね」

私のあまりの即答に、彼女は呆気にとられた顔をしたが、やがて瞳をくるりと回しただけで何もいわなかった。

私は窓の外、街の中心である少し遠くのオフィス街を見た。かつては自分もあの高層ビル群の中に身を置いていた。当時に比べ、なんとのんびりしたことだろうかと思う。

「さてと……」

背伸びをして時計をみる。十五時だった。

「このあと、明日からの打ち合わせをしようと思うのだけど、それは早々に済ませてしまい、雇い主として、明日からの激務に耐えるべく、今夜は私が食事をご馳走しようと思うのだけど、この提案はいかがかな？」

「わお！ 素敵です！ お酒付きですか？」

「もちろん。場所は、いつもの居酒屋だけどね」

こうして私たちの短い二つの調査が始まった。

押山side

残業中のオフィスは往々にしてキータイプ音が支配しているものだ。それは過去においてペンを走らせる音であったり、現代においてキーボードを打つ音だったり、未来において何かしら新たな技術による作業音だったりするのかもしれない。だが本質はいつだって変わらない。

押山遥人の所属しているオフィスもそれは例外ではなく、ただひたすらキーボードを叩く音だけがオフィスを我が物顔で漂っていた。

オフィスを支配する音は単調な音だけを響かせる。しかしディスプレイの上はめまぐるしく変化する。

例えばキーを打ち続ける本人とは対照的に、同時進行でのんびりとエデンを探索していた彼のアバターが、何かに気づいたように動きを止める、といった具合にだ。

同時にアバターに連動させている携帯がバイブレーションする。ということは仕事のメールではなく、彼個人への私用メールだ。

早くメールを開けるとせつつ自分の分身に引きずられるように押山はメールをクリックする。画面いっぱいに現れたのは彼の彼女であり、同じ職場の同僚であり、そして彼より一足先に帰宅したはずの清水冴子、いや『マリリン』だった。

前世紀に名の知れたセクシー女優を模した、ありていに言ってしまうえば無駄に色気を振りまくようなそのアバターはハートマークを撒き散らしながらメール文面を展開する。

残念ながら仕事のため音声機能はオフにしているが、もし起動していれば流暢な合成音声の色気たっぷりにオフィスにばら撒かれることになる。

mail to ハルト

いつものところで待ってます

遅刻厳禁！

そのところよくよく、忘れないように！

by マリリン

「ちょっと、勘弁してよ」

時計は縦一直線を指している。今から仕事を切り上げて退社、そしてここから彼女の言う、いつものところまでタクシーで少なくとも三十分以上はかかる。

あくまで理想論だ。当然ながらまだ仕事は終わる気配がない。そして金曜の夜、この辺りでタクシーが捕まるのは奇跡に近い。周辺地図にタクシー会社のアバターを重ねてみるが、やはりというかなんと言うか、ほぼ全てに乗車マークが光っていた。

「面倒くさ……」

エデンなら一瞬なのに。押山は舌打ちをしそうになるのを寸前で留める。

どうせいつもの夜景でいつものコースでいつものワインだ。そのあとホテルへ行くかタクシーで送るか。その程度は差異ですらない。

料理やお酒の味にこだわらないなら、彼女が常々言う「一緒にすごすことが大事なのに」というのが本当だというのなら、今からエデンで『十五分で出来る世界一周旅行パックツアー』を何週だってしてあげるのに。舌打ちの代わりに、意識的にため息をつくことでやるせなさをどうにか出来ないかとしばし考える。

押山のキーボードを打つ手が止まる。方や社内でも優秀なキャリアウーマン、片や残業で呻いてばかりの一社員。果たしてどんな返事を返せばいいだろう。

「先輩、コーヒーでも入れますか？」

押山のブースからタイプ音が聞こえなくなったのを、仕事が詰まったと勘違いしたのか後輩の上田が声をかけてきた。

## 第2章 起 因 : 02

---

「うーん……カフェオレに出来るなら、お願いしたいかな」

「ミルク、ありましたっけ」

「高清水さんののがあったはず」

上田が立ち上がり冷蔵庫へ向かう。

「帰ったほうがよくないスカ？」

「え？」

冷蔵庫を開けて、牛乳の消費期限に顔を寄せながらの上田の言葉に、押山が聞き返す。

「ハルヒトマダカハルヒトマダカ」

「え？」

「俺に愚痴メールが来ました。のろけメールも嫌ですけど、愚痴メールも嫌ですよ俺。なんか今日七時から約束があるらしいじゃないですか。先輩を早く上がらせろってこのメール。これ上司命令ってやつなんスカね？」

「ああもう……。ごめん、後で言うておくよ」

さっき飲み込んだはずの舌打ちが、結局押山の口から飛び出してしまふ。

「ええ、マジお願いします。あー、この牛乳、ギリッスね。ギリアウト。カフェオレ無理なんで、どうスカ。諦めて帰るってのは」

「家に持ち帰るのは主義じゃないんだけどね」

「家で仕事できる時間までに帰ればいいですけどね」

「なに、いつものパターンなら今日中には家に帰してもらえるよ」

「うわあ、聞きたくねー。なんスカそのモテる男の余裕みたいなの」

そう言いながらも、押山はエデン経由で自宅のパソコンにデータを転送し始める。と、突然押山のディスプレイに『マリリン』が現れた。

押山が反応を返すより先に、『マリリン』の分厚い唇から飛び出たフキダシがどんどん肥大化していき、瞬く間にディスプレイの半分を埋め尽くす。

text to ハルト

「やっぱりまだ会社にいるし」「ログイン時間五時間以上!? 仕事よりエデンって感じよね最近」「ほらまた。どうせゆう悠ま真でしょ」「ほらやっぱり悠真のいるゾーンだし」「ああもう嫌になっちゃう。エデンなんて紹介しなければよかった」「小学生じゃないんだから何でもエデンエデンエデンとかやめてよ」「悠真悠真悠真。嫌になっちゃう」「あなたの彼女は悠真じゃなくてあたしなんですけどー」「仕事なんて上ちゃんに任せればいいじゃない」「タクシーそっち向かわせたから早く出てよね」「今日は絶対に皿皿で食べるんだからね」「外すごく寒いんだけど」「聞ってるの??？」

by マリリン

よく手のひらサイズのキーボードなのにこの速度でこの文字量を打ち込めるな、と、いつも押山は呆れると同時に感心する。口で言うよりも速いかもしれない。さすが会社でもトップクラスの実績を上げているだけのことはある。聞けば、彼女はエデンを利用して接待をした事すらあるそうだ。未だ初心者であり、エデンへログインする度にその素晴らしさに感動する押山とはワケ

が違う。

「今行くよ」

押山はそれだけ打ち込むと、パソコンの電源を落とす。

「嫌な顔してますよ先輩」

「エデンは楽しいけど、四六時中高清水さんといってるのは、考え物かもしれないね」

「実は二十四時間監視するためにエデン入りさせられたんじゃないッスか」

「その割に最近エデンに入り浸りすぎだあって怒られたりしてるんだけどね」

## 第2章 起 因：03

---

「最初はそんなもんッスよ。俺も始めた時は学校行かずに一日中やってたりなんかもしましたからねー」

「中毒か……僕もちょっと片足突っ込んでるかも。すごい人がいてさあ」

「すごい……ああ。先輩も『悠真』ですか？」

『悠真』とは、エデンを代表するアバターだ。一般ユーザーでありながら今やエデンの顔となっている彼女——すくなくともアバターの外見上『悠真』はかわいらしい女性だ——はまさにネットという海を自由に泳ぐ妖精、あるいはエデンを象徴する女神か。

「すごいよね、あの人」

「どうですかねー。ずっとログインしてるって話ッスからね。もしかしたら引きこもりのデブニートかもって話もありますし」

「そんなことないよ。リアルマネートレードっていうんだっけ？ 詳しくは僕も知らないけどなんかそういうのとかもやってるんでしょ。すごいじゃない。こうやって残業と彼女に板ばさみになってヒイヒイ言ってるのがバカらしくなるかも」

「お、ヤブヘビった。別に悠真の事バカにしてるわけじゃないですって。そういう噂があるってだけですから」

「噂は噂。悪い噂のほとんどなんて有名税ってやつでしょ結局は。とくにエデンなんて何時でもどこからでも誰かが自分を見てるようなものなんだから、僕と高清水さんみたいにね。悪いことをすれば噂じゃなくて事実が広まると思うけどな」

「うわあ、先輩。最近自虐に磨きがかかってきてますね」と屈託なく笑う上田が「でも、火のないところに煙は何とやられて言いますよ」と返す。

「なんだよ、今日はやけにつっかかるね」

「いえいえ、可愛い後輩に仕事押し付けてこれから彼女とデートしようって先輩に対してやっかみなんで、ほんの少しのかけらもごさいませんとも。ええごさいません」

「君とのプロジェクトのほうはだいたい終わったよ。今ウチに転送してるのは高清水さんとのプロジェクトだよ」

「げえ、今いったい何個同時進行なんですか」

「聞きたい？」

「いえ、聞いたら俺も帰りたくなっちゃいます」

「なんだよそれ」

おどける上田に、押山もつられて笑う。

「まあいいじゃない。明日牛乳と小豆金時アイス買ってくるから許してよ」

「お、マジッスか。ああいやいや、俺あそんな事で懐柔されたりなんてしやしませんよ。……でも二個なら手を打ちます」

指を二本突き出してブイサインを示した上田にうなずくと同時に、押山のモバイルが鳴動する。ディスプレイの中ではタクシーの姿をしたアバターに『ハルト』が乗り込んでいた。

「ごめん、タクシーが来たみたいだ」

「ああ、頑張ってください」

上田の含みのある笑顔に見送られるように、押山はオフィスを後にした。



### 高清水side

いつもの夕焼けだった。夕日を望むロマンチックな海岸沿い。あるいは、いつもの蛍。真っ暗闇の中蛍がそこいらじゅうを飛び回る幻想的な世界。恋人との時間を満喫するためのデートスポットとしては十分だと、冴子自身も思っている。ワイキキやらモルディブやらエアーズロックやらを独り占めするよりも、個人的には好ましいとすら思っている。

現にその二つはエデンでも有名なデートスポットだ。最初にハルトに連れられてきた時はとても感動した、と同時に人気スポットにもかかわらず、そこには自分とハルトしか存在しなかったことに冴子は驚きを隠せなかった。

ユーザーのモニターそれぞれに、同時にその場所を映し出すことで、同じ場所・同じ時刻でありながら、見ず知らずの他人に邪魔されることもなく恋人との二人きりの完全なプライベート空間を生み出すという利点は、仮想空間であるエデンだけに許された極上のシステムだ。

それまではネットショッピングで海の向こうのブランド品を手軽に買うとか、遠方の取引先との会議や接待という移動距離の節約といった実務的な面からしか見ていなかった冴子にとって、エデン初心者であるはずのハルトが誘ってくれたそこは、思い出に残るお気に入りの場所となった。

しかし、ある時そのスポットの情報を検索してみた冴子は、そこに『あの』悠真の笑顔が大々的に飾られていることを知った。「私の大好きな場所なんです！デートにも最適かも!？」なんて文字が踊っているのを見るに付け冴子の心中は穏やかではなくなってしまう。

何のことはない。ハルトは悠真の好きな場所だから連れて行ってただけだったのだ。事実今までのエデンでのデート場所はそのほとんどが、悠真が紹介したところのある場所ばかりだ。とはいっても、エデンのアイドルである悠真が足を運んでいない居場所なんてエデンにあるかどうか冴子には疑問だったが。

かといって、押山はエデン初心者。悠真というマニュアル本的存在に頼る気持ちはわからなくも無い。しかしそれがちょっと違うということにも、すぐに気が付いた。

ハルトは悠真にぞっこんといってもよかった。少なくとも冴子自身はそう見ている。もちろん冴子だって悠真くらいは知っている。エデンといえば悠真といってもいいくらい彼女は有名だ。だが、冴子からすればハルトとの二人きりの時間を悠真に邪魔されたように思っても仕方が無いといえる。誰だってデート中に他の女性の影など見たくは無いものだ。もし会うことがあれば辟みとわかっていても、私の感動を返せと言ってやりたいくらいだった。

冴子は他社に赴きプロジェクトの統合を取る。押山はそうして下ろされてきた企画をまとめて形にする。受け持つ仕事が違うため、なかなか休みの折り合いが付かずデートもままならない。そんな冴子の苦肉の策が、エデンを介したデートだった。冴子たちの働いている会社も遅まきながら福利厚生の一部として、休憩代わりにエデンを利用してよい時間を月単位で設けている。

たしかにアバターこそ持っていたものの、名前もそのまま、アバターの外見もシンプル極まりなかった押山は、仕事やメールチェック以外にエデンを利用していないという、今では珍しいタイプの人間だった。

そんな押山にとって、見るものすべてが新鮮なエデンの世界を、我が物顔で歩き回っている悠真は憧れを通り越して尊敬になっているのだろう。

しかしアバターの外見を着飾るためのデータを買い与えたり、エデンでのデート方法を教えたりと、エデンのルールを手取り足取り教えてあげたのは悠真ではなく自分だ。それに。

「エデンを紹介したのは私じゃないの……」

思わず小さくつぶやいた言葉も、高性能なマイクは拾ってしまう。

「エデンを紹介したのは私じゃないの……」

「え？ 何か言った？」

「ううんなんでも」

マリリンの声で再生されたつぶやきが、自分の耳にどこか遠く聞こえる。

エデンの中にも支店を持つレストラン『クラウンズ』。現実食べたことのある料理がとつもない画素数で精巧に再現されている。でもそれだけだ。味もしないし匂いだってない。

「やっぱりここはおいしいよね」

「そうね」

そんなわけないのに、バカみたい。冴子はこの一点だけは冷めている。この前だって喫茶店で——これも悠真が一度だけ、そう一度だけだ。一度だけ足を運んだことがあるという、その喫茶店を出されたイチゴタルトをハルトは絶賛していたくらいだ。

悠真悠真悠真。ハルトにとってのエデンは悠真なのかもしれない。最近になって冴子は時々そう思うようになった。ハルトにとってエデンは自分とのデートの場所ではなく、悠真という天使、あるいは女神のいる文字通りのエデン樂園なのではないだろうか。

ここ一ヶ月近く、冴子は仕事を押さえ目にしているということに押山は気づいているだろうか？ エデンではなく、現実世界でのデートを無理やりにでも増やそうとしていることに気づいているのだろうか？

先週のデートだってそうだ。残業を返上させてまで席を設けたにもかかわらず、現実のクラウンズで食事を取って、後はタクシーで送ってもらっただけだ。帰宅してからハルトの足取りを見てみると、こりずに「悠真の立ち寄ったスポットを巡るツアー」なんてものに参加していた。

彼氏が、恋人そっちのけでアイドル、それも本当に女かどうかすら怪しいネットアイドルを追いかけていることに不満を感じない女性なんていないわけがない。押山自身にはそんなつもりがないのはわかっている。彼にとって悠真は異性ではなく、触れることの出来ない至高の存在だ。しかし悠真だって元をただせば一般のエデンユーザのはず。いつどういった事情で知り合い親密になるかわかったものではない。

いや、すでに、もしかしたら。ハルトは悠真と出会っているかもしれない。それどころかもし現実世界で会っていたとしたら。

あまりにも不愉快な想像に冴子は顔をしかめる。しかしアバターであるマリリンにそれが出ることはない。彼女は、色気あふれる笑みを浮かべたまま、ハルトと楽しそうに食事をしている。ナイフで切られた鴨のテリーヌは現実と寸分たがわぬ断面を見せていた。

冴子は不安に駆られる。押山だって、こうしてハルトとして楽しげに食事ごっこをしているその裏で、押山遥人として悠真と一緒にいる事だって可能性としては存在しているのだ。

一度湧き上がった不安は、また新たな不安を呼び無尽蔵に膨れ上がる。もはや冴子はハルトが何を言っているのかほとんど聞いていない。ただ時々聞こえる「悠真」という名前が不安を更に増大させていくだけだ。

マリリンがハルトに笑顔を向けている一方で、冴子は別のウィンドウを開いて検索ボックスにある文字を打ち込み始める。「悠真 正体」「EDEN 悠真」。他にさまざまな言葉を当てはめてみるが、こうして改めて調べてみても、出てくるのは当たり障りのないことばかりで冴子は肩を落とす。

よくよく考えてみれば、エデンがユーザの個人情報をもっと簡単に漏洩するはずもない。もし簡単に漏洩してしまう危険なところならば、今日ここまで普及することもありえない。逆に言えば

、もし今エデンの全ユーザの個人情報が流出でもしてしまえば、エデンは崩壊するどころの騒ぎではない。政府の責任問題にも発展する大事件だ。いくらお役所気質の抜けない政府といっても、全国民の信頼を失うような愚行はしないように日々努力しているはずだ。

諦めかけた冴子だが、ふと入社時に通る道の途中に、探偵事務所があるのを思い出した。雑居ビルの窓に文字の切抜きがなされている、ドラマや漫画に出て来るような前時代的な探偵事務所だったため記憶に残っていたのだ。

冴子が会社に勤め始めた時からすでに存在していたように記憶している。この情報化の進んだ現代で生き残っている探偵事務所なのだから、少しは優秀ということなのだろうか。

先ごろも、法人化している大手の探偵会社が、実は裏で暴力団とつながりを持っていて個人情報筒抜けになっていた、といった事件があったばかりだ。逆にああいっただ時代に取り残された個人経営、よく言えば地域密着型のほうが、多角経営で実態の見えない大手よりは、よほど安心が出来るのでは無いだろうか。

ぼんやりと画面の中のハルトを眺めながら、いつのまにか探偵に依頼することを決めてしまっていることに、そして押山との貴重なデートの時間にもかかわらず、冴子の思考はすでにいかにして探偵に依頼するかシフトしていることにすら彼女自身は気づいていなかった。

悠真のことを調べてくれ、といって調べてくれるのだろうか。冴子は悠真がどこの誰なのかすら知らない。エデンの悠真ですとでも言えばわかってくれるかもしれないが、関係性が薄いといわれて断られる可能性だってある。

そもそも、あんな古めかしい探偵事務所がエデンという最先端のネット世界のことを調べられるのかすら疑問が浮かぶ。

探偵事務所といった存在とは今まで無縁の生活だった冴子にとって、どのように依頼するかは頭を悩ませた。

しかし、数分の試行錯誤の末に出した結論は、それこそドラマによくあるパターン。恋人の素行調査という一番無難なものになった。というよりも、そもそも問題なのは悠真ではなくハルトだ。押山が現実世界で自分以外の誰かとあっているかどうか問題なのだ。

これならばむしろ、どことなくあの探偵事務所への依頼として似つかわしいとすら思える。仮にもし、探偵に依頼したことが押山にバレたとしても、あの探偵事務所の前に連れて行き「本気で調べたわけじゃないのよ」といえばちょっと趣味の悪い冗談として通用しそうな気さえする。「興信所に頼んだほうがそれっぽかったかしら？」軽くウインクでもすれば、彼も笑って許してくれるはずだ。

冴子にとってはエデンも時代錯誤な探偵事務所も地に足の着いていない存在、現実離れした存在でしかなかった。

調べてみるとあんな探偵事務所でもネット環境は整備されているらしく、予約だけはすぐに入れることが出来た。都合のいい日時と依頼の概要をテキストボックスに書き込み送信すると、自動返信のメールがすぐさま返ってきた。詳しい依頼内容や報酬形態、調査期間については当日赴いてからということらしい。

ふとエデン内に意識を向けると、マリリンは未だその笑顔を崩すことないまま、悠真がいかにすばらしい存在なのかというハルトのいつもの演説を聴いていた。そんなハルトとマリリンを、冴子はどこか他人のような白けた表情で見ている自分に気が付くと、ため息をつきたくなった。「私はきっと、マリリン・モンローみたいに可愛くないわ」

珍しく自分からハルトとのデートを切り上げ早々にログアウトした冴子は、ヘッドマウントディスプレイを外すと、窓に映った自分に向けてそっとつぶやいた。

どこにでも、「草」はいるものである。草は自分の命に危険が及ばない限り、決して草であることを語らない。だから滅多に草が草だと知られることはない。だが、確実に草は存在する。それが高清水の勤めるような大手企業であれば、やはり大手の情報屋が複数の草をつけている可能性が高い。

調査業、一般的に探偵と呼ばれる職業を生業とする私は、幸い「元公務員」という肩書きもあり、この手の人間たちと接触するのは比較的容易なことである。

「あんたか……元エリートさんはお国からおこぼれ頂戴しているって話だけど、そのあたりどうなんだ？」

古い寂れた喫茶店のボックス席で新聞を読んでいた男は、私が向かいに座るなりそう言った。年齢は私より一回りほど上で、禿げ上がった頭を隠すためにいつも帽子をかぶっている。顔は浅黒く常に脂っぽい印象で、白目の部分は若干黄ばんでいる。

「たいしたことはない。エデンという仮想都市について簡単に調べるだけだ」

男の目が僅かに新聞からそれ、片目をあげるようにして私を見た。

「エデン関係の情報なら高く買うぞ。話によっては今回の依頼分もチャラでいい」

「やつらがエデンについて何かの情報を欲している、ぐらいで勘弁して欲しいな。こちらにも守秘義務ってもんがある」

「田中のぼっちゃんかい。相変わらずコソコソやっているらしいな。まあいいさ。不確定な情報は売らない主義だ。何か流せる状態になったら、よろしく頼むぜ。」

で、今日は何が欲しいんだ？」

エデンの話が終わると、男は再び新聞に目を戻した。まるで私の依頼自体にはさほど興味がないようだった。初対面の人間は彼のこういう態度に僅かな不快感を示すだろう。実際私もそうであった。だがこの世界に礼儀などというものはあってないようなものであって、そんなことにいちいち腹を立てていられなかった。

それに私は、この古風な男がそれほど嫌いではなくなっていた。今時流行らない、半世紀以上も前のスタイルを残し続ける喫茶店で、読めるのかよめないのかわからない英字新聞を持ちながら煙草を吸って客を待つ。私に負けない、見事な道楽ではないかと思う。こういう男には、長生きして欲しいものだ。

「草を一人探している。市電通りの端にある商社。欲しいのは、そこの企画営業部にいる押山遥人という社員の情報だ」

数秒の沈黙の後、男は煙草に火をつけた。私もそれに倣い煙草を吸う。

「.....あその前には市営の公園があったな。噴水の前のベンチに昼頃、座って待っている。立っていたら駄目だ。必ず座っている。そしたら、飯田という女がお前に接触するはずだ」

「了解。肝に銘じておくよ。報酬は、いつもの口座に」

そう言って私は店を出た。最後のような、ああいう古臭い文句を言うところも、私は個人的に気に入っている。こんなことを言うとまた彼女に、「そんなハードボイルドな趣味はありましたか？」と言われそうであるが、これは私の密かな趣味である。

喫茶店を出ると私は事務所に電話をした。三回目のコールで彼女が電話に出る。特に問題なし、の合図だ。

「はい、西崎探偵事務所です」

「西崎です。念のため、だけど特に変わったことはない？」

「特にかわったことってなんだろう、っていうぐらいです」

「了解」

電話を切った私は少しだけため息をついた。

田中が何物かに尾行されていて、私のところに来たこともそいつらは知っている。もしかすると盗聴をされているかもしれない、と思ったのだ。私自身も、今現在も誰かに尾行されている気配はない。私の心配など杞憂に終わると良いのだが、私より腕の立つ人間が私を尾行しているかもしれないので、用心に越したことはない。

時計を見ると十時半である。飯田という紹介された女性と会う市営公園は、お昼時になると弁当を広げる会社員で溢れかえりベンチを確保することが難しくなる。少し早めに行くほうが良いと思い、私は待ち合わせ場所の市営公園に足を向けた。

※

何も考えることなく一時間ほど市営公園のベンチに座っていると、煙草が消費され、携帯灰皿が重くなっていく。陽が南中高度に僅かに届かない高さでその存在を主張し始めたころ、私がいる噴水の周りも少しずつ賑やかになってきた。二人掛けのベンチに腰をかけている私であるが、何故か私の横には誰も座ろうとはしない。既にベンチは埋まっており、一人で来ている女性は噴水の端に腰を掛けて小さな弁当箱を広げている。周りを見ると、相席しているベンチもいくつかあるようで、あの噴水の端に座っている女性はそこが定位置なのかもしれないが、何故誰も私の横に座らないのか、というのは一種の謎である。

「西崎さんですか？」

そんなどうでも良いことを周囲の観察結果から導き出した命題とし、無限の思考を広げようとしていたところにちょうど声をかけられ、私は現実に戻された。そこには、どちらかという小柄な女性がどちらかというアクティブな印象を与える服装で立っている。

「はい、西崎です」

「こんにちは、飯田です。元締めから話は聞いています」

元締め、という言葉が世界で何番目かに似合わないであろう目の前の女性は、そう名乗った。

「歩きながらでも良いですか？」

「うん、構わないよ」

飯田はそのまま市営公園を一周出来る遊歩道の入り口に向かう。私たちはその途中にあるホットドッグスタンドでホットドッグと飲み物を買った。

「ええと、押山さんのこと？ あの人の何が知りたいんですか？」

ホットドッグを食べながら少し私の前を歩く飯田はくるりと振り返る。

「うん、まずは君の印象を聞きたい。彼はどういう人物？」

この時間はこの遊歩道を何周もするのが日課の老人たちはいない。まだ若い緑の木々と、少し離れたところから聞こえる鳥の鳴き声。太陽は先程よりさらに存在を主張する。飯田は、「そうですね」と言って再び前を向いて歩き始めた。

「仕事はまあまあ出来る、っていう感じですね。無能じゃありませんけど、ずば抜けて優秀というわけでもないです。それから他の人と話すときは時々芝居がかったような話し方をしたり、若干ナルシスト気味ですけど、根は暗そうですね。仕事中最もずっとエデンにログインしているみたいで、時折モニタを見てニヤニヤ笑ってますし」



それは私が写真で見た押山の印象とも一致する部分があった。写真の押山は恋人と楽しそうに笑っているのに、その目はどこか遠くを見ている印象的な表情だった。

「好きか嫌いかと言われたら？」

「嫌い」

飯田は即答する。

「あそう。じゃあ恋人はいない？」

「います。同じ会社の企画営業課にいる高清水さんという人」

周囲からはどうやら、二人は恋人同士と一応認知されているらしい。実を言えばこの関係は高清水の一方的な思い込みではないかとも考えていたが、その路線はなくなったようだ。

「その高清水という人はどんな人？」

「クール、を装っているって感じ。見栄っ張りですそれを隠すようにクールなふりしてる。何にも無関心なふりして、実は人一倍甘えたがり独占欲が強い。最後の部分は押山さんがぼやいているのを聞いたただけだけど、私の見解も一緒です」

「ふうん」

リズムを整えるために煙草に火をつける。「一本もらえますか？」と飯田が言うので私は煙草を差し出した。一口吸い込み、大きく息を吐き出す。何にも興味を示さない、いまこの瞬間すら、自分にとっては気怠い日常の一コマだと言わんばかりの表情だった。それは押山のそれと共通する部分がある。

「他の女の姿はある？ その高清水という女性以外に」

「少なくとも社内ではないです。プライベートに関しては私の管轄外ですけど、二股をかけられるような甲斐性はないと思います」

「なるほど。さっき、ずっとエデンにログインしていると言ってたけれど、エデンを通してならどうだろうか。その、私はあまり詳しくないのだが、あれは遠くの人と話したりすることが簡単に出来るのだろうか？」

そこで飯田はまた私を振り返り、初めて笑った。

「西崎さん、それ、もしかしてジョークのつもりだったりします？」

「いや、大真面目だよ。私は苦手なんだ、メカとかそういうものは」

飯田は片足に体重を乗せて、煙草を加えたまま両手を腰に当てた。上から下まで私を観察するように眺める。

そうか、と私は納得した。顔はもちろん、見た目のアクティブな印象は全く異なるが、飯田のこういった仕草や、ちょっとした話し方は、彼女に似ているのだ。

「変わってますね、西崎さんは。まあそうですね。遠くの人と簡単に話すことができます。つまり、仕事中に離れた別の場所にいる女性と話したりしている雰囲気はないか、ってことですか？」

「そうだね。あ、でも二股をかけるような甲斐性はなし、か。今の質問にあまり意味はなかったね」

自己完結をしてしまった私を見て、飯田はますますよくわからないという顔をする。もしかしたらジェネレーション・ギャップを感じているのかもしれない。このオッサンは良くわからないな、と。

「貴重なお昼休みをどうもありがとう。彼にはすぐに情報料を振り込んでおくよ。私からの個人的なお礼は、ホットドッグと煙草ということで、勘弁してもらいたいな」

「え？ もういいんですか？ てっきり今押山さんが携わっている仕事の情報とか必要かなと思ってたんですけど。あ……」

そこで飯田は煙草を投げ捨て、下から上目遣いで私を見た。

「もしかして、高清水さんですか。西崎さんのクライアントは。そうか、なるほどね。ははあ、あの人のやりそうなことだ」

飯田は得意そうに笑っている。そしてすぐに何かを計算しているような表情に変わる。悪い傾向だった。言うべきか、言わないべきか。飯田がどうなろうと私には関係ないことだ。しかし脳裏をふと彼女の顔が横切る。全く罪な女である。

「飯田さん。一つ教えてあげよう」

「はい？」と飯田は首を傾げる。

「草はね、情報という栄養を吸い上げて育つ。ただそれだけの存在だ。決して栽培者に栄養をねだってはいけないし、その栄養を他の草に分け与えることもしてはいけない。また草自身が栽培者になることもその土壌にいる限りは許されない。ただ大きく育って、虫が花粉を取りにきたときにそれを与えるのみの存在でなければならないんだ。じゃないと、雑草として引っこ抜かれるか除草剤で枯らされてしまう。気をつけることだ、君はまだ若い」

いつもより少しトーンを落として話す。これくらいの演技は必要だと思った。飯田は何も言えずにただ私の目を見ている。おそらく何を言われているのかわかっていないのかもしれない。少しの沈黙があって、私は小さくため息をついた。

「あらためて、今回はありがとう。また何かお願いすることがあるかもしれないけれど、そのときはよろしく」

飯田を残してその場をあとにする。遊歩道に戻り噴水の前に来ると、あまり時間は経っていないのかまだ多くの人で賑わっている。十二時半を少し回ったところだった。携帯電話を取り出し電話をかける。

「期待していた情報は得られなかったのか？」

開口一番、電話の向こう側で男が言う。

「そんなことはない。報酬もこのあと振り込む。ただ、あの草は危険だ。枯らされるぞ。あんたのところに飛び火しないとは限らないぞ」

「西崎探偵はお優しいことで」

小さな乾いた笑い声が聞こえる。私は露骨に舌打ちをして電話を切った。そのまま煙草に火をつける。本来であれば禁煙区域なので周りにいた何人かが嫌な顔をする。続いて私は事務所に電話をかける。いつもと変わらず彼女が電話にでた。

「あ、西崎です。その後、どう？」

「さっきの電話からまだちょっとしか時間経ってませんよ。寂しいんですか？」

彼女のあきれた顔が目浮かぶ。問題なし、ということだろう。

「そういうわけじゃないけどさ。一仕事終えたから。働くか、帰るか迷っている」

「しっかり稼いでくださいよ。私の生活がかかっているんですから」

「了解」

電話を切る。そのまま押山と高清水が勤める会社の前に来て、私はこのあとどうするかを考えた。高清水からの依頼には一週間という期限がある。しかし、何かの証拠を押さえろというわけではない。焦る必要はないだろう。それに今までの行動を見守ってくれていた読者諸君は、私のことを勤労意欲の塊のように思っているかもしれないが、いかんせん私は道楽で探偵をやっている男である。働くか帰るか迷っている、と言ったものの、気持ちは既に帰る方向にシフトしている。私の勤労意欲は猪突猛進タイプなので、一度そう思い始めるとやる気などというものは一気に減退していった。

事務所に戻った私はいつものようにデスクに足を乗せ、椅子に深く腰を掛けながら睡魔と戦っている。彼女と言えば、私が買ってきたホットドックを食べながらパソコンに向かったままだった。

私は背伸びをして大きな欠伸をした。彼女のキーボードを叩く音が止まり、回転椅子が嫌な音を立てて回る。

「あのですねえ、所長。社員が一生懸命働いているんですよ？なのにそんな大きな欠伸して。所長はあれですか？私の労働意欲を削ぎたいんですか？」

「あ、いや、すまない。決してそんなつもりはないんだけどね。斉藤さんが一生懸命やってくれないと、うちの事務所は潰れてしまうわけだし」

彼女はくるりと瞳を回してため息をついた。そのまま立ち上がり、ポットに入っているコーヒーをカップに注ぐ。

「で、盗聴されているとか、そういう気配はあったんですか？」

私の方を見ないで彼女はそう言った。先ほどの飯田といい、最近の若い女性の間では、人の方を見ないで話すのが流行っているのかもしれない。

「帰りに事務所周辺を見て回ったけれど、そういう気配はとりあえず無かった」

「そうですか。可能性がゼロと置いていたわけじゃなかったですけど、良かったですね」

そう言って静かに笑うと、彼女は再びパソコンに向き直る。私はデスクから足を下ろし立ち上がると、彼女の後ろに立った。

「で、斉藤さんの方は進捗どう？」

「パソコンの前では煙草を吸わないで下さい所長」

「あ、そう」

私がデスクに戻って煙草の火を消している間も、彼女はキーボードを叩き続けている。

「で、斉藤さんの方は進捗どう？」

「先ほどエデンにログインするためのダミーのIDを取得したところです。で、今は片っ端からナンパされています」

パソコンの画面を覗き込むと、どこか架空の町の大通りのような風景が表示されており、その右端には名前を表す記号と思われるものがたくさん表示されていた。

「ナンパされているって、どういうこと？」

「ええとですね、ちょっとこっちの作業をしながら説明しますね」

良く見ると、確かにナンパするような言葉の文字が次々と表示されてくる。彼女はそれ全てに対し、何か同じ作業を繰り返しているのだった。

「まずですね、エデンに入るにはIDが必要になります。そしてそのIDを取得した後に、エデンでのキャラクタを設定するんですよ。最初はジーンズにただTシャツ着ているだけみたいなダサい格好なんですけど、まあそういう服装だったり、なんとなく動き方の雰囲気だったり、あ、初心者だな。みたいなことって結構わかっちゃったりするんです。そしてプロフィール見て若い女の子だったりすると、こうしてあちらこちらから男の人が声をかけてくるわけなんです。露骨に“今夜リアルで会わない？”みたいな人もいれば、“何かわからないことあったら教えてあげるよ”と、その手法は様々ですが、根底にあるのは下心と言っても間違いではないと思います」

「じゃあいまここに出ているいろんな名前の方は、斉藤さんのプロフィールを見て話しかけてきているの？」

「そうです。二十一歳の女子大生という設定にしましたので、食いつきが良いです。

それで次に私はですね、彼らと少しだけお話します。内容はケース・バイ・ケースです。私の目的は、相手の人に“写真とかないの？”と言わせることなんです。そう言わせたら私の勝ちで、この写真を相手の人に送信します」

そう言って彼女が開いたのは、私が見たことのない女性の小さな写真だった。友人と思われる女性と一緒に、カメラに向かって控えめにピースをしており、二人の周りは蛍光ペンか何かのマーカで装飾されており、下には二人の名前が書いてある。

「これ、なに？ だれ？」

「この右側の女性が私という設定です。適当な顔と体のパーツをつぎはぎして作った架空の女性なので、実在はしません。携帯電話の写真加工機能を使って撮影した、と思わせるような内容にしています。どうです？ 可愛いでしょう？」

確かにそこに写っている女性は二人とも可愛いと言われる要素を十分に持っていた。彼女はつぎはぎしたと言ったが、継ぎ目のようなものも当然見えない。

「まあ確かに可愛いけれど、パーツをつぎはぎしたって……昔そんな映画があったような気がするけれど。少し気持ち悪いなあ。

で、これを送ってどうするの？ 実際に会う約束をして、どんな人が調べるってこと？」

「そんな危険且つ無駄なことはしません。実はこの写真にはですね、裏側にスパイウェアが仕込まれています。この写真を開くとそのスパイウェアが動き出して、その人がエデンの中でどんな動きをしているか追跡してくれます。その情報が随時私のデータベースに保存されていくので、ある一定量集まれば、ヘヴィ、ライトユーザのエデンの活用方法の統計が取れると思います」

「あ、そう。でもそれって、犯罪なんじゃないの？」

「犯罪？」と言って彼女は小さく笑った。

「怪しげな情報屋だかスパイだか知らない人たちと接触している所長からそんな言葉が出るとは思いませんでした。こちらの身元がわからないような最善の手は打ってありますが、どうしますか？ やめますか？」

彼女には全く悪びれた様子がない。実際私にはこれが悪いことなのかどうか良くわからないのだが、恐らく悪いことだろう。まあしかし、彼女が言うことも確かに一理あるのだ。今までそういう怪しげな領域に彼女を立ち入れさせなかつただけで、私は一般的に、「犯罪」と呼ばれるような行為もしてきている。

「いや、まあ、そうなんだけどね。まあ、いいか。もう少ししたらとりあえず休憩にしよう。コーヒーを淹れなおすよ」

それから十分後、彼女は背伸びをして立ち上がった。肩をぐるぐる回して、空いた手でその肩を揉んでいる。

「お疲れさま。結局何人にさっきの写真を送ったの？」

「う～ん、多分百五十人くらいですかね」

「その中から使える情報がどれくらいあるかっていうことか。しかし、本当に大丈夫なのか？ 一応相手は国家だからね。私は別にバレたところで問題ないのだけど、斉藤さんに何かあるとマズいな」

「大丈夫です！ 国のシステムって、意外に穴だらけなんですよね。どうにでもなりますよ、あんなもの」

彼女は普段かけないメガネの端を、片手で持ち上げる仕草をして笑う。

「でもまさか、斉藤さんがあんなこと出来たとはね。うちの事務所もホームページとか作って宣伝したらもう少し儲かるかな？」

「もうありますよ、ホームページなら。高清水さんだって、ホームページを見て、電話くれたんですから」

「え？ そうなの？」



当然です、と言わんばかりに彼女がずいっと胸をはる。あるのは別に良いことだが、事業主の私が知らなかったということは問題のような気がする。

「ふうん。まあ良いや。じゃあ今日は、あのマッドサイエンティストみたいな写真画像を作って、エデンに登録して、片っ端からナンパを受けて相手を罠にはめていた、っていう作業で間違いないよね？」

「一部不本意な言われ方がありましたけど、概ねそんな感じです。明日からは、集積したデータの解析と、エデン内での押山氏の行動を探ってみたいと思います」

「了解。じゃあ今日はもう自由にしてくれて良いよ。まだやりたいことがあるならやっていいし、帰りたいなら帰っても良い。明日なんだけど、私は朝一で押山の尾行調査を行うから事務所を空けることになる。鍵は内側から閉めて、電話が鳴っても出なくて良いから」

「わかりました。それと、いくつかお願いがあるんですけど、聞いてもらえますか？」

座ったまま僅かに前かがみになり、上目遣いで彼女は私を見る。それは絶対に計算された仕草であり、私は彼女を直視することが出来ずに目をそらして、煙草に火をつけた。

「聞いただけならね。可能かどうかは内容によるよ」

だが過去の実績からして、この勝負で私が買ったことはない。ほんの少し年下のこの女性に、私は翻弄され続けているのだ。戦略的には私が有利なはずであるが、彼女という戦術レベルに特化した存在に見るも無残に敗北を喫している。

「このエデンの調査をしていくにあたって、必要な機材がいくつか出てきそうなんです。それを経費で買ってかまいませんか？」

「必要ならばしょうがない。今回の件、エデンの調査については斉藤さんに任せているからね。それはしょうがない」

「ありがとうございます。領収書もらってきますね。」

それともう一つなんですけど、ほら、給料日前ですよ？ ちょーっとお財布の中が氷河期に突入してまして、夕食なんかをご一緒させてもらえると、非常に嬉しいかな、なんて」

本命はそっちか、と私はため息をついて時計を見た。十六時半。これから一仕事片付ければちょうど良い時間である。

「全く、二日連続とは。まあ別に良いけれどね。今日はお酒はなしだよ」

「はい、ただ、所長は飲むんですよね？ それを一口か二口かもらうかもしれませんが、それは許してくださいね」

彼女は首を横に倒してにこりと笑った。こんな子を採用してしまった自分が悪いのだ、と私は自分自身に言い聞かせることにした。

※

朝の喫茶店というのは、誰もが眠そうな顔をしている。マスターも、ウェイターも、新聞を読むサラリーマンも、そして、私も。

昨夜は結局、彼女と外で食事をした後に事務所で飲み直すことになった。気がつけば時計の針は九十度を作っていて、彼女は私のベッドで眠り、私はソファで眠るという、部屋の持ち主との関係があべこべになった夜を過ごしたわけである。そして彼女はまだ、眠っているだろう。

私はいま、押山の自宅から最寄り駅のすぐ近くにある喫茶店にいた。あまり美味しくないコーヒーを飲みながら、押山が歩いてくるであろう方向をただ黙って見つめている。座ってから一時間ほどであるが、既に灰皿は吸殻の山だった。私のような仕事に求められるのは、明晰な頭脳でも、ましてや重火器の知識や見知らぬ人の家のドアを無断で開ける方法などではなく、第一に忍耐力であると思っている。

視界の先に一人の男の姿を確認した。よれたスーツを着て、サングラスのようなものをかけている。私は席を立ち会計を済ませると、男が店の前を過ぎたときに合わせて店を出て、そのまま後を追う。距離は近いが時間帯的に通勤者が多い為、目立つことはない。まして相手は一般人である。普通に生活をしている限り、自分が誰かに尾行されるとは決して考えない。特に難しいことは何もなかった。既に用意しておいた地下鉄のチケットを使い、悠々と共に地下鉄に乗り込む。

サングラスをかけているせいか、押山の表情はよくわからない。しかし時折、口の端が僅かに持ち上がり、静かに笑っている。間違ってもお近づきにはなりたくないタイプだ。

だが周りを見ると、そういう人間が多いことに私は気がついた。デザインは違って、似たようなサングラスをかけている人間が多い。中には何かを呟いている人間もいるくらいだった。新興宗教か何かかもしれない。だとすると、押山もそれに関わっている可能性が考えられるが、そんな話は清水からは聞いていない。それともこれも、エデン関係の何かなのだろうか。

地下鉄を降りたあとは、真っ直ぐ目の前にある勤め先のビルへと入っていった。さすがに会社の中まで入り込む手段は用意していないし、そこまでの必然性も感じてはいない。何かあれば飯田から私に連絡するよう情報屋には話をつけてある。私はそのまま前を通り過ぎ、ビルの周りをぐるっと一周してみた。出入り口は正面と裏口の二箇所だが、実質社員が出入りするの正面だけと考えても問題なさそうだった。

さすがに一日中公園で過ごすというのは厳しいので、すぐ近くにある二十四時間営業のファミレスに入ることにした。必要なときに、必要な場所に、必要なものというのは必ずあるものである。最初に店長を呼んでもらい、ある調査のため、長居させてもらいたい、という旨を伝え僅かながらの金を払う。それはきっと彼個人のポケットマネーになるであろうから、喜んで承諾してくれた。

ビルの入口が見える席に座り、ノートや数取り器などを並べる。浮気調査だということがバレてしまうといづらくなったり、最悪ヘンな噂が広まってしまう可能性がある。こうしておけば、交通量の調査だとでも周りの人間は思うことだろう。

ここからは再び忍耐力の勝負になる。一時間おきにウェイタが灰皿を交換しに来てくれて、その度に私はお礼を言うはめになった。コーヒーはおかわり自由となっているが、いくら前金を渡してあるからと言って、好きなだけ飲むというのはいい大人としてどうかとも思う。

お昼近くになり、経過報告と暇つぶしを兼ねて、私は彼女をファミレスに呼んだ。登場した彼女は珍しく髪をアップにしている。少し太めのフレームのメガネをかけ、昨日と同じ服装だった。どうやら家には戻らず、そのまま仕事をしていたらしい。肩から少し大きめのショルダーバッグをぶら下げている。

「もう、わざわざこんなところまで呼び出して。私だってそれなりに忙しいんですよ？ ただパソコンの前に座って、ネットサーフィンしているわけじゃないんですから」

「あ、すまない。昼食をご馳走しようと思って。私も少し暇で、話し相手が欲しかったし」

「わーい、そういうことならもう、いつでもどこでも」

私は焼き魚定食を頼み、彼女はハンバーグとパンのセットを頼んだ。ふと外を見ると、やはり昼時なので往来にも人の姿が多くなる。

「そういえば斉藤さん、あのサングラスみたいなもの、何かわかる？ あそこの人とか、あ、

ほら、あの人もしている」

私が外を歩く人を指差しながら訊くと、彼女も飲みかけのメロンソーダを置いて外を見る。  
「ああ、ヘッドマウントディスプレイですね。わあ、みんなすごいな。最新式ばかりだ」

「ヘッド……なんだって？」

私は基本的に横文字が苦手である。私は相当ひどい顔をしていたのか、一瞬私をみた彼女は、口元で軽くグーを作ってクスリと笑った。

「ええとですね、ものすごく簡単に言うと、あのサングラスの裏側がパソコンの画面になっていると思ってください。外出しながらでも容易にインターネットが楽しめるようにと開発されたものです。まあ大半はエデンにログインしているんだと思いますけど」

「ふうん。外は見えるのかな。とても危ないように思えるけど」

「あの手のタイプはネットの画面を透過して外が見えるようになっているんです。外を歩きながらでも使用を許可されたモデルはいまのところあれだけです。私も自宅に持っていますけど、もっとごついゴーグルのようなもので、外出時の着用は法律で禁止されています」

「目、悪くなりそうだね」

「年寄りの発想ですよ、それ」

そこで料理が運ばれてきたので、会話は一時中断する。私は食事をしながら、朝の押山の表情を思い出していた。あの静かな笑いには僅かながらに狂気染みたものを感じなくもなかった。あの笑みの向こうに押山は、一体何を見ていたのだろうか。

「そっちの方はどう？ ほら、昨日の人の行動がどうか、なんとかって話」

「そうですねえ、まあ、ある程度予想していたことが浮き彫りになってきたってところでしょうかね」

彼女は話しながらも食べることをやめない。

「エデンには、すごく有名な、もう誰もが知っているくらいのアイドル的存在の人がいるんですが、予想以上にその人のところに人が集まっているってことですね。私が昨日スパイウェアを送った人は全員が、ユウマ、あ、そのアイドルの名前ですけど、ユウマがいるところに足を運んでいますね。私も何度かは見に行ったことがありますけど、まさかここまでとは思っていませんでした」

「ええと、それってよくわからないけれど、人気のある歌手みたいなもので、そのおっかけがたくさんいるってこと？ エデンを利用している人のほとんどがその人のおっかけをやっているような感覚？」

「もちろん全員ではないと思いますが、その傾向が強いのではないか、ということが推測されると思います」

私はただでさえアイドルのおっかけなんてことをやったことがないので、そうやって誰かを半ば崇拜するような気持ちというものは良くわからない。それが自分の知らないネット、エデンという世界での出来事であれば、なおさらだった。顎に手をあて窓の外を見てみるが、決してその疑問が解決することはない。ただ、いま目の前を歩きながらエデンにログインしている人間の中にも、そのユウマというアイドルをおっかけている人がいるということだろう。

「なるほどね、まあ、なんとなくわかった。じゃあ引き続き、斉藤さんは斉藤さんで調査をお願いしますよ。多分これから二日間くらい、事務所にはほとんど戻らないと思う。好きなようにしてくれて良いから」

それから少しだけ他愛もない話をしたあと、彼女は事務所に戻っていった。あとは夕方まで退屈な時間が繰り返される。そして二十時ごろ、飯田から押山が帰宅するというメールが入った。

私は店長にお礼を述べファミレスを出る。金曜日の夜ということもあり、周りは昼間以上の人で賑わっていた。周囲を注意深く見渡しながら押山が勤める会社の出入り口が見える辺りまで移動する。高清水には面が割れている。彼女には見つかりたくなかった。万が一このあと、押山と高清水が共に行動するとなると、きっと私の方を何度も確認するだろう。そのような状況だけは避けなければならなかった。

やがて押山が出てくる。通勤時と同じサングラスを着用していた。仕事が終わるとすぐにエデンにログインしているということなのだろう。私はつかず離れずの距離で押山の後を追う。心配は杞憂に終わったようで、真っ直ぐ帰宅するようだった。地下鉄に乗り、朝時間を潰した喫茶店の前を通り、押山は自宅に戻る。私は急いで最寄りのパーキングに止めておいたクルマを出して、押山のアパートが見える場所で止めた。二階建ての古いアパートで押山の部屋は角部屋。玄関と窓から漏れる光が確認出来る、私にとっては素晴らしい部屋だった。

やっと自分の居場所に戻ったような感覚になり、無意識のうちに大きなため息をつく。煙草に火をつけて、後部座席に置いておいたパンと缶コーヒーを取り出した。

ここからが長丁場だった。今更になって誰か一人バイトを雇えば良かったと思うが、とりあえず今日は一人で張り込みを続けるしかなかった。

※

土日も押山の監視は続いた。あまりの睡魔に立ち向かうことが出来ず、お昼頃彼女に来てもらい、私は仮眠を取る。夜に彼女は帰り、また私が夜通し監視する、という流れだった。だが彼女に特別手当を約束したことに値する見返りを得ることは出来なかった。押山はこの土日、一度も外出しなかったからだ。また、彼の家を訪ねたのも、土曜日の夜にピザのデリバリーが一度来ただけだった。もし浮気などをしていれば、この土日で物的証拠を押さえられるかもしれないと思っていた目録見は見事に外れ、月曜の朝、押山が出社するのを見届け、私は事務所に戻った。既に出社していた彼女に、昼頃に起こしてもらうように頼み、まずは睡眠をとる。そしてきっちり正午に起こされた私は、重く不鮮明な頭をクリアにするために、煙草に火をつけて深々と吸い込んだ。

「お疲れですね。ここ二、三日で五歳くらい老けたんじゃないですか？ 四捨五入して四十歳くらいに」

「失礼だね。そういう斉藤さんも、なんだか理系の女、という印象だ」

今日も彼女は髪をアップにして眼鏡をかけている。白衣が似合いそうな雰囲気だ。

「文系や理系っていうカテゴリーズってよくわかりませんが、一応理系の女ですからね。はい、これお昼ご飯です。からあげ弁当」

「睡眠不足で寝起きの老体にはいささかヘヴィだけど、いただく」

応接テーブルを挟み、向かい合って私たちは座った。金曜日の夜からコンビニの弁当ばかり食べているが、クルマの中で食べるのと、ちゃんとした椅子に座り誰かと食べるのでは全く味が違う。

「しかしだ、金曜日の夜から一步も外出せずだぞ。信じられないな」

「所長だって、ほとんど外出しないじゃないですか」

「彼と私とでは環境が違う。恋人のいる年頃の男が、だよ。普通は飲み会に行ったり、デートしたり、そういうことするんじゃないのかな」

「所長、はしたないですよ」

つい持っている箸で宙を指した私に彼女が、「メッ」というような表情をする。私も負けじと、ぐるりと瞳を動かして見せた。

「わ、真似された！」

「表現とは模倣から始まるのだよ。それよりさっきの話、どう思う？ もし斉藤さんに恋人がいたら、デートしたって思わない？」



「そうですね」と、彼女は箸を軽くくわえて宙を見る。「はしたないですよ」と言おうと思ったが、話の腰を折りたくないのでぐっところえた。もし言った場合の情景を思い浮かべて、小さな笑いがこみ上げてくるが、それもどうにかこらえる。

「恋人いたことないからわかりませんが、まあ一般的にはそうでしょうね。でも私が思うのは、押山は決して、”引きこもっている”というような感覚はないのでは、ということです」

食事を終えた私たちは、そこで話を中断し、食後のコーヒーを楽しむことにした。ちなみに、こんな暇そうな探偵事務所がそんな贅沢をする余裕があるのかと思われるかもしれないが、それはまた別の話。また別の機会に話すこともあるかもしれない。

「まずはこれを見ていただきたいのですけれど」

そう言って片付いたテーブルの上に彼女が並べたのは、地図やらグラフやらが印刷された数十枚のレポート用紙だった。アナログ人間な私としては、こういうものを見ただけで、「すごい」と思ってしまう。

「へえ、良くわからないけれど、なんかすごそうだね。この三日間で作ったの？」

「こういうときのために、所長は私を雇っているんじゃないんですか？ まさか夕食の相手に私を置いているわけじゃないですよ？」

「なにおう」

「冗談です。この報告は、金曜日の夜から日曜深夜までの、エデンでの押山の行動をまとめたものです。一枚目は活動範囲ですね。時間帯で点の色を分けてあります」

「ふむ」と一枚目の紙を見ると、世界地図のあちらこちらにカラフルな点が打たれている。アジア、ヨーロッパ、アメリカ、中南米。行き先は様々だった。特に土曜日の夜から深夜にかけての点の分布が広い。

「説明はあとでまとめてするとして、二枚目が押山の時間帯別発言数の推移状況と、その中にユウマという単語が含まれていた回数です」

二枚目は時間帯別に青とオレンジの縦棒グラフが並んでいる。さほど差はないが、青いグラフの方が数値が高いので、こちらが全ての発言数を表すグラフになっているのだろう。

「三枚目以降は、押山とその仲間の会話履歴となっています。これは今はとりあえず置いといてください。内容を踏まえて、あらためて一枚目に戻ってもらえますか？」

最後の会話履歴に関しては、十数枚に及ぶと思われるもので、確かにぱっとみて何かを判断できるというものではなかった。私は言われた通りに一枚目に再び目を通す。

「最初に言いましたが、これは押山の行動範囲を分布図で示したものです。エデンは日本ということになっているので、日本に点が集中しているのはそのためです。そして次にこれが、アイドルのユウマの行動範囲を、彼女の発言をもとに再現した分布図です」

そうしてさらにもう一枚の紙を渡されそれを見比べてみたが、行動範囲が非常に似ていることがわかる。地図の下にはおおよその時間もまとめられているが、ユウマがそこにいるとわかるとすぐに、押山もその後を追いかけているのは一目瞭然だった。

「これはこれは……押山はみんなが大好きなユウマの正真正銘のおっかけということか」

「そうです。それをさらに裏付けるのが、先日私のスパイウェアに感染した人たちの行動範囲の資料です」

次々と渡される資料。だが、ペーパーというアナログ媒体である以上、私が混乱することは

ない。私が苦手なのはあくまでデジタルであり、データではないからだ。

### 第3章 調査：12

---

仮にこの新たな資料の人々を、「普通の人々」と呼称した場合、彼らの行動範囲はほぼ日本国内に限られており、海外まで足を伸ばしているような人はいないようだ。

「時間と空間を圧縮してあちらこちらへ行けるのはエデンの魅力ですが、それでも全てが無料で利用できるわけではないんです。中にはエデンで買い物したり、僅かですが課金することによって獲得出来るポイントが必要な場所もあるんですけど、押山はそういうところも含めて、わかる限りでユウマのあとを追いかけています。

そして、押山の行動範囲ですが、土曜日の夜から深夜にかけて特に広がっています。このときにも有料スポットをいくつも訪れているのですが、この時間帯」

彼女は押山とユウマの行動範囲の資料を横に並べる。

「ユウマからの、“いまどこにいる”っていう発信が途切れた時間なんです」

「つまり……ユウマを探し回っているというわけか、資金を投入して」

「そうです。こういう時間帯をファンの間では、“お忍び旅行”と呼んでいるようなのですが、この間、ユウマを探し回る熱心なファンもいるようです」

「なるほど。なるほどなるほど。ふうん……ちょっと一服」

こういう時にこそ、煙草が必要になる。私は一口吸い込んで、煙草をくわえたままもう一度押山とユウマの資料を見比べた。

「しかしどう思う？ 私からすれば若干鳥肌物なんだけど、もしこういう人が彼氏だったら、斉藤さんはどう？」

「う～ん、正直なんとも言いがたいところですが、ここまで行くと俗に言う“オタク”の部類ですからね。人は誰もそういう要素を持っているとは思いますが、私もすんなり受け入れることは出来ませんね。かと言って、高清水さんの行動も理解は出来ませんけれど」

「まあそんなところだろうね」

次に最初に渡された資料のうちの二枚目を手にとって見る。

「これは発言数か……つまり発言している間はエデンにログインしていることになるってことかな」

「一概にそうとも言えませんけどね。眠っている間もログインしている人はいると思いますし。なので、どちらかという、発言している間はなんらかの活動をしている、ということになると思います」

「なるほど。そうなる……」

自分の手帳を取り出し、押山を監視中にとったメモと見比べてみる。

「金曜日の夜は朝の五時まで発言している。彼の部屋の電気が消えたのは五時半頃。土曜日も十七時頃から発言し始めて、三十分後にピザ屋が配達に来る。後は消灯時間と比べるしかないけれど、だいたい一致しているな」

「起きている間はほとんどエデンにいるってことですね。超ヘヴィユーザですよ、やっぱり」

残りの発言履歴については、今の時点で目を通す必要性を感じなかったので保留とした。最後に調査方法を聞いたところ、やはりスパイウェアというものを押山に仕込んだということだった。聞いたところで詳細はわからないが、その名の通り、今回のようなデータを集めるスパイのようなものなのであろう。

「今回の二つの案件ですけど、田中さんの依頼に対しても匿名にして押山のデータを提出しようと思いますがよろしいですか？」

「ん？ ああ、そうね。大丈夫だと思う」

しかしだ、と私は新しい煙草に火をつける。ソファに深く腰をかけ、自分が吐き出した煙を見つめながら考えた。

私はエデンについてほとんど知識も情報もない。何もわからない。わからないということは、正しく理解出来ないということだ。また、僅かとはいえ年齢の差もあるかもしれない。だがそれにしても今回の押山の行動は、私にとっては奇奇怪怪なものであることに違いはなかった。

恋人がいるのに会うこともなく、せっかくの休日に古いアパートに引きこもり、一日中パソコンに向かっている。夜遅く、もしくは早朝まで誰かと話し、日中は眠り、夕方に起きてまたパソコンに向かう。食事は宅配もので済ませる。

そういう人々が半世紀も前から増加傾向にあるのは知っている。だが、こうしてほぼ直接的に関わるのは初めてだった。

何が彼らをそこに縛り付けるのだろうか。現実が面倒くさいということだけだろうか。そもそも、田中が言っていたように、仮想が現実となり、現実が仮想となっているのだろうか。ゲームでモンスターを倒してお金を稼ぐように「仮想世界」で仕事をするにより、「現実世界」で動き回るためのお金を稼ぐ。そんな風に考えるようになるほどの魅力がエデンにはあるのだろうか。

模倣か。誰かがそれを見事に体現しているとしたら？ それが非常に魅力的であれば、人はそれを模倣しようとする。模倣を重ねるうちにその存在は少しずつ神格化され、崇拜し、全ての理由はその存在とイコールになる。「ユウマ」。まだ見ぬそのアイドルがまさに押山にとってのそれなのかもしれない。

ユウマはその役をなんのために演じているのか。自主的にか、それとも後ろに誰かプロデューサーがいるのか。そして結果として何を求めているのか。後者であれば、社会の潮流としては過去に良い例はない。田中が危惧している世界もさほど遠くない未来の可能性も出てくる。

「斉藤さん、そのユウマに会うことは出来るだろうか」

「はい？ 突然黙り込んだと思ったら、唐突になんですか？」

「いや、ね。うん、ちょっと会ってみたいなと思って」

手を口元に運び、無意識のうちに煙草を消していたことに気付く。新たに一本取り出し火をつけた。立て続けに吸っているせいか、確実に不味くなってきている。

「私なりに興味が湧いてきたということだよ。このエデンという世界がこの先どこに向かおうとしているのか。その重要なファクタの一つに、このユウマっていう存在がいるんじゃないかなあと、私は思うわけだ」

会ってみればもう少しわかることがあるはずだ。何せ今、私は何も知らないゼロの状態であるわけなのだから。

「う～ん、実際に会うのは難しいと思いますけどね。エデンの中でさえ特定の誰かと仲が良い、ということもないようですし。でも、連絡をとるだけなら簡単ですよ。ユウマのページには、コンタクト・フォームが設けられていますからね」

「よし、じゃあちょっと今後の方針についてももう少し考えてみよう」

何故自分でもこんなに会ってみたい、と思うかはわからない。だがもしある世界の神というものが存在するのであれば、私は会ってみたい、そう思う。

## 4, 交 差

読書は他人の人生の追体験であると高校時代の恩師は私に教えた。それ以来、私は本を読むときにそのことを意識して読むようになった。だが今の調査業、探偵という仕事を始めてからはその感覚もどこかにいってしまった。何故ならこの仕事もまた、他人の人生を追体験することに近い感覚のものだからであり、さらにそれを記録する。恩師の言うとおりであれば、私は毎日、本を読んでいるような生活を送っているわけである。日常を忘れ、非日常へと旅立ちたい場合に読書することが多いが、そこに日常を持ち込みたくはない、という思いがある。もっとも、本を読む、という行為すら最近は行っていない。

彼女と今後の方針について打ち合わせした日の夜から、私は再び押山の行動を監視した。何も変わらない。会社に行って仕事をして、家に帰って、また会社に行く。その繰り返し。調査期限の一週間が経ち、高清水に報告をすると、高清水は特別な結果が出ていないことに少し不満があるような声であったが、エデンでユウマと会う段取りが進められていたので、そのことは伏せ、無償でもう少し調査させて欲しい旨を伝えると僅かだが声のトーンが明るくなった。

ユウマと会って話をしたところで、押山の行動結果が変わるわけではない。ただ、報告をするにしても、もう少しエデン、ユウマについて知ってからの方が適切であると判断したための行動だった。押山の気持ちが高清水から離れかけているのは、他の女のせいなんかではない。高清水自身と、何よりエデンにその理由があると私は思っている。この場合のエデンというのは、ユウマとニア・イコールかもしれないが、押山は恐らく、ユウマを女としては見ていない。私はそこに、たった一滴の根拠が欲しいだけだった。

ユウマと会うという話は彼女がうまく進めてくれている。架空の出版社をでっちあげ、その雑誌の創刊号にインタビュー記事を掲載させて欲しい、という内容だ。出来れば直接会ってと話したがやはりそれは無理で、週末にエデン内で会うことになるのではないかと、というのが今現在の彼女の見解だった。

極度の機械音痴である私は、ユウマに会う予定である前の数日間、彼女からエデンについてのレクチャを受けることになった。

「所長、まずはアカウントを作らないといけません。最初の手続きは全て私が行いますけど、アバターくらいは自分で決めてくださいね。そして、少しでもインターネットやパソコンを使うことの楽しさを実感してください！」

彼女はやけに張り切っている。何か魂胆があるに違いないと思うが、そこには触れず、私は彼女に促されるままパソコンの前に座った。

「ほら、ここから自分のキャラクターのパーツを選んでいくんです。中には有料のパーツもありますが、そこは気にしないで、まずは好きなように作ってみてください」

画面には、「顔」や「目」と言った文字の横に、そのパーツが並べられている。

「ははあ、なるほど。福笑いみたいなものか」

「なんですか福笑って」

「ん？ あ、いや、知らなかったらいいんだ。大したものじゃないよ」

自分のキャラクターを作っていくと確かに面白い。別に自分に似せる必要はないということだったので、あれこれパーツを試してみる。結構時間がかかったが、彼女に聞くと、「最初はみんなこんな感じですよ」と苦笑いしていた。

「よし、出来た！ 斉藤さん、出来たよ」

ソファでコーヒーを飲みながら雑誌を読んでいた彼女が私の後ろに立つ。

「どう？ カッコいいでしょう？」

「ええと……ええと……、本当にこれで良いんですか？」

「え？ なに？ これじゃ駄目？」

振り返ると、笑いを堪えるような顔で彼女は私が作ったキャラクタを見ている。

「いえ、駄目じゃないですけど。トレンチコートにハットかぶって煙草って、一体いつの時代の探偵ですか？ ポーの作品に出てきそう」

「どっちかっていうとドイルだと思うけど。しかしハードボイルドだろう？ 渋い感じでさ。慣れないパソコン操作の割には、うまく出来たと思うんだけどな」

「まあ、選ぶだけですからね」

若干馬鹿にされている感があるが、彼女はニコニコと笑っている。普段からパソコンくらい使えるようになってくださいと私に言う彼女だが、まるで夢の一つがかなったとでも言うような顔をしている。その笑顔を見て、まあ、良いかと思うことにした。

そして次に彼女が取り出したのは、例のサングラスやマイクと言った類だった。

「エデンで動き回するには、パソコンで操作することも出来るのですが、このヘッドマウントディスプレイを使ったほうが楽なのでこちらを覚えてください」

私はそのヘッドマウントディスプレイを手にとって見る。横の部分にミニジャックのような接続口があり、またよく見るとマイクもつながっていた。

「うわ、これ、骨伝導マイクじゃないか。もしかして買ったの？ このために？」

「そうですね。所長、必要なものは買っていいって言ったじゃないですか」

ここまでのものが本当に必要だったのか、という質問をしようとして諦める。きっと説明されても私はわからないだろうし、うまく丸め込まれるのが関の山だろうからだ。

ディスプレイ一式をセットすると、彼女がパソコンから伸ばしてきたケーブルをディスプレイのジャックにつなぐ。

「ちょっとこれ、大丈夫なの？ なんか脳に影響とかあったりしないの？ 昔の映画でこうやって洗脳とかするの見たことあるんだけど」

「私たちがまだ生まれる前の映画ですよ、それ。大丈夫です。はい、これで準備オーケーです。あ、手元にこれ置いといてくださいね、使いますから」

そして最後に渡されたのが、A4ほどの液晶画面だった。ただし、ものすごく薄い。ノートほどしかなかった。

「じゃあまず、手元に置いた液晶の左側にあるスイッチを押してください」

まるで母親から新しい料理を教わる子どものように、私は従順に従う。スイッチを押すと液晶が光り、「Welcome to E・D・E・N」の文字が表示された。正確に言うと、私はそれをヘッドマウントディスプレイで見ている。なんだか不思議な感覚だった。昔海外で入った3Dシアタのように、目の前に大きな映像が映し出されている。

「私が見ているパソコンにも、所長が見ている映像が映し出されています。操作は基本的にはタッチパネルになっている下の液晶を使いますが、視点の上下左右だけはそのまま首を動かしてもらえばその通りに動きます」



そしてここから私の長い戦いが始まった。彼女が、「歩くときは液晶を前になぞってください」とか、「メニュー画面では指の位置とディスプレイが相対座標で連動します」とか言うたびに私の動作は止まり、その意味を質問する。一日目は基本的な機械の操作について、二日目はエデン内での操作についてを叩き込まれた。自分では造作もないことだろうと思っていたが、やってみると案外難しく、不慣れな私としてはなかなか覚えられなかった。彼女曰く、「覚えようとしていない」だそうで、最もショックだった一言は、「私のおばあちゃんでさえ、もっとうまく使えます」だった。もちろん、受講料として毎晩居酒屋に行くはめになったのは、ここまで読んでいただいた読者諸君であれば容易く想像出来るだろう。

しかし私の血の滲むような努力と投資のおかげで、土曜日にはどうにか一通りの作業は出来るようになった。彼女からも、「まあとりあえず大丈夫そうですね」のお墨付きをもらう。

「いやあ、斉藤さん本当にありがとう。今回ばかりは斉藤さんがいてくれなければどうなっていたかわからないなあ」

ソファに腰掛けた私は久々に美味しい煙草を味わった。彼女がコーヒーを持ってきて私の向かいに座る。

「今回ばかりって軽く失礼ですね。ほんとどうなるかと思いましたが、どうにか形になりましたね」

「そうね。明日は音声チャットの予定だよな？」

この数日間で私にもこういった語彙がインプットされた。

「はい、どうにかそこは取り付けました。苦労しましたよう、本当に」

「よし。さてさて、鬼が出るか蛇がでるか。楽しみだなあ」

子どものころ、旅行に行く前の日はなんとも表現できない高揚感があった。今の気持ちを表すとしたらそれに近い。何があるのだろう、何が起きるのだろう。もしかすると今夜は眠れないかもしれない。

「はい、じゃあ今夜も飲みに行きましょう！ 私、一度家に帰って着替えてきますから、一時間後にいつもの居酒屋で」

「え？ もしかして今夜も泊まっていくの？ 今日こそはベッドで眠れると思っていたのに」

「だって、朝早くに来るの面倒なんですもん。それに、食事は一人でするより誰かと一緒にした方が楽しいですよ」

そう言って彼女は「一時帰宅」する準備をしている。この数日間、居酒屋に行っただけで彼女はここに泊まり、私のベッドを占領し、主はソファに追いやられていた。今日こそはゆっくり眠れるかと思っていたが、今夜も眠れないかもしれない。

※

エデンのエントランスには練習の際にもう何度も足を運んでいて見慣れた風景になっている。一言で言うと、白い空間だ。それがどこまでも続いている。そういう錯覚に陥る場所。ここがユウマが指定してきた待ち合わせ場所だ。もっとも、それに特別な意味はなく、他に何人も待ち合わせをしている人たちがいる。そんな中私は、公開モードを「限定」にしてこの場所にいる。ユウマから以外、私がここにいることが見える人間はいない。そう考えると、見えていない人がま

だ他にもいるということで、いまこの瞬間、この場所には何千、何万という人がいるのかもしれない。コンサート会場でいうところの、超満員という状態だ。

「高橋さんですか？」

どこからともなく声が聞こえてくる。実際の声にも聞こえるが、どこか作られたような印象もある。もしかすると合成音声かもしれない。その後で目の前にイメージが構築されていく。完成されたアバターは、予備知識で仕入れたユウマ本人だ。エデン内のアバターは基本的に、実際の人間にかなり近くデフォルメされている。いま目の前にいるユウマは、自身の紹介ページに載っている写真などで見るよりはずっと可愛く見えた。

「そうです。ユウマさんですね、こんにちは。今日はお忙しいところありがとうございます」

「いえいえ」と言いながら、彼女の顔が上下にゆれて私を見ている。

「その～、渋い格好ですねえ。こういうアバターは初めて見ました」

どこか遠い場所で誰かが笑っている声が聞こえる。それは彼女の声だったが、まるで幻聴のようだった。それくらい、いまいる世界はこんな殺風景な場所でもリアリティがある。人と話すことによってその感覚は倍増した。

「実はエデン初心者です。このアバターも先日作ったのですが、手伝ってくれた助手の子にも同じように笑われてしまいました」

私はそこで素早く、「笑顔」にアバターをチェンジする。最初どうやっても時間がかかってしまった動作も今では慣れた。すぐにユウマも同じ表情に切り替えて、笑顔になる。

「じゃあ、お忙しいとも思うので、早速インタビューを始めたいのですがよろしいですか？」

「はい。ええと、”みんなが選ぶ、エデンのアイドル、ユウマに聞きました“でしたっけ？」

「そうです。主にエデンの中での、ユウマさんのお気に入りの場所などを紹介してもらえればと思います。後々編集は可能ですけれど、発言にはお気をつけくださいね」

冗談っぽくそう言って笑うと、ユウマも明るく笑った。

「こんなインタビュー、もうたくさん受けているかもしれませんが、どうかお付き合い下さい」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします。何回かこういう経験はありますが、やっぱりどこか、恥ずかしいです」

ユウマのアバターがペコリとお辞儀をする。さて、ここからが勝負の始まりである。スタートラインには立った。私は別に彼女の正体を暴きたいわけではない。ただこの、私の中でもやもやした世界を少しでもクリアにしてみたいと思うだけである。

「じゃあまず、自己紹介をお願いします」

「ミヤモトユウマです。性別は女の子で、年齢は内緒です。血液型はAB型。趣味は読書で、好きな男性のタイプは優しい人です」

ウィンクをして、ぱっと星が流れて消える。その仕草はまさしく本物のアイドルのようだった。今のところプロデューサの影は見えない。しばらく様子を見て、慎重に行動するのが吉だろう

。

「ありがとうございます。じゃあ今日は、悠真さんにエデンを案内してもらいたいと思います。お会いしたときにも言いましたけど、私はこのエデンという世界の初心者なものでして、よろしく願いいたします」

「よろしくお願いします。じゃあ早速行ってみましょうか。まずはメインストリート案内しますね」

風景がエントランスからメインストリートに、ドミノが倒れていくように変わる。ここも既に何度も訪れ見慣れた風景だった。

「ここがメインストリートで、一日の最初に訪れる場所ですね」

公開モードは相変わらず限定のままなので、誰も私たちに気付くことはない。私はいま、ユウマの行動に追従するように設定している。ユウマの方でこの周りの人々の表示を消すことも出来るが、それを消さないということは、エデンの雰囲気を感じ取って欲しいというユウマの気遣いなのもかもしれない。

「普段エデンでどんなことをしているんですか？」

「ショッピングしたり、映画を観たり、たまに海外旅行したりしています」

非の打ち所がない。模範解答のような印象も受けるが、それが事実であるかもしれないし、なんとも言えないところである。今一步突っ込んでみるところであると私は判断した。

「エデンにいと本当にいろんなことが出来ますよね。最近はどんなものを買ったんですか？」

「そうですね～、季節の変わり目っていうこともあって、春らしい服を買いましたよ。ジャケットとか、スカートとか。それこそこのブーツとか、昨日買ったんですよ」

回答自体にタイムラグはない。そして僅かな時間をあけて、画面にそのブーツのイメージ画像と、簡単な説明文が表示された。こういう情報は全て彼女が控えをとってくれている。

「なるほどなるほど。映画はどうですか？ やはり最近の流行ものですか？」

「ホラーは苦手なのであまり見ないですけど、試写会には良く呼んでいただけるので、割と何でも見る感じです」

試写会にユウマを呼ぶ。配給元の代理店も、「ユウマも見た」と謳えるということなのだろう。もしかするとユウマもレビューなどを書いているのかもしれない。ユウマを窓口として集客される人数を無視することは出来ない、ということなのだろうか。そこまでこの目の前の女性、というより女の子は社会の歯車の一つとして重要なのだろうか。

「お、さすがトップアイドルですね。私なんて試写会に呼ばれたことなんてないですよ。じゃあ最近行った海外はどこですか？」

「ヨーロッパの雰囲気が好きなので、最近はヨーロッパばかりです。フランスや、イタリアとかですね」

そうしてユウマは、具体的にどこを見てきたとか、先ほどのように撮影した写真を見せてくれたりした。その写真というのはもちろんエデン内での風景であって現実の風景を撮影したわけではない。しかし本物というわけにはいかないが、限りなくそれに近いものだった。

「ちなみにそれは、お一人で行かれたんですか？」

「そうですね。一人で行きました」

「そうですね。お友達や家族とは行かないんですか？」

「え？」

表情は変わらない。だが、声のトーンが一瞬だけ変わった。そんなにヘンなことを訊いたかなと自問自答する。もちろん一人で旅行するというのが好きな人も多いが、たまには友人や家族と羽目を外したいときだってあるのではないだろうか、と思つての質問だった。

「あーいえ、ただねなんとなく。誰かと一緒にいたりすることはあるのかなと思ひまして」

「本当はみんなで行きたいんですけど、中々都合が合わなくて」

「ああ、そうですね。ユウマさんもお忙しいわけですし、皆さん学校とか、仕事とかありますもんね」

「そうですね」

ユウマのトーンはまだ変わったままだ。一体何が原因なのだろうか。「回答例」がなかった、とも考えられるが困惑しているというよりはむしろ、悪いことをしているところを親に見られた子供のような、そんな印象だ。突っ込みすぎたか、と反省する。一度流れを変える必要があった。

「ありがとうございます。じゃあ次は悠真さんの一番お気に入りの場所に案内してください」

「はい、わかりました。こちらです」

ユウマもどうにかスイッチを切り替えたらしい。彼女が遠くで、「危なかったですね」と言ったので私も小さくうなずいた。そうしながらも画面は再びバラバラと変わっていく。そこはサンセットビーチだった。

「ここが良く来る夕日が見える海辺のお気に入りの場所です」

「へえ、すごいですね。こんなことも出来るんですね」

彼女に鍛えられたとはいえ、私が見てきたのはエデンの入り口の部分だけだった。そこには本当に美しい夕日があった。多くの恋人たちが浜辺に座り、肩を寄せ合って夕日を眺めている。声は聞こえてこない。音声だけは限定にしているのかもしれない。ならば私たちのように公開モードを限定すれば良いのでは、と思う。何故姿だけは人に見せるのか。その辺りの心理はもはや私の理解の範疇を超えているのだろう。もしくは価値観。

「高橋さん、公開モードを少しの間限定解除してもいいですか？」

「はい、構いませんが、まずくないですか？ ゴシップネタみたくならないでしょうか」

ユウマがクスクスと笑う。私もクエスチョンマークのアイコンを表示させた。

「大丈夫です。問題ありません。実はいま私、どこにいて何をしているか一切公開していないんです。そういうときって、応援してくれる皆さんが私を探してあちらこちらに行くらしいのですけれど、私はちょっとずつ、足跡を残していくことにしているんです」

それは何故ですか、と訊こうと思ってやめた。アイドルとして隠し事をしないという責務かもしれないし、何か特別な理由があるのかもしれない。尋ねたい気持ちはあるが、先ほどのようになるといささかまずいことになる。私はあらためて、構わない旨を伝えた。私の画面の端で、公開モードの設定が変更された旨が表示される。ファンが殺到するのではないかと思ったが、案外そんなことはなかった。

「ちょっと意外でした。もっとう、ファンの方がたくさん押し寄せるかと思っていたのですが」

「ここは、恋人たちが楽しむ場所ですからね。基本的に他の人たちには話しかけないということが暗黙のルールになっているんです。でも気付いている人はきづいてると思いますけどね」

暗黙のルール。それはケース・バイ・ケースで作り上げられるものだが、間違っただけのものも許容してしまうという悪しき性質も持ち合わせている。私は悪を否定し正義を行使するなんて考え方は嫌いだ、この暗黙のルールという言葉はあまり好きじゃない。都合の良いときにのみ使われる、都合の良い言葉だ。

だが、暗黙は所詮暗黙だ。それを破ったからといって、破った人間を非難することは出来ない。

「ユウマさんですよ？」

その男は突如、私の画面に現れユウマに話しかけた。

「はい、そうです」

ユウマは私に会ったときと同じようにウィンクをして星が流れる。私からすれば、突然人の会話に割り込んでくるこの不躰な男は何者だろうと思うがユウマにそのような気配はない。こういうこともエデンでは普通のこと、ということだろうか。

男は、「ハルト」と名乗った。

「ユウマさんこんにち。いつも見てます。すごいな、本物だ。まさかお会いできるとは」

「ありがとうございます」

ハルトはさらにユウマに話しかける。そのとき誰かが私の肩に手を乗せた。後ろを振り返るが誰もいない。「私です」とすぐそばで声が聞こえて、それが彼女の声だと認識する。私はヘッド

マウントディスプレイをずらし振り返った。ヘッドホンはそのままにして、マイクのみをミュートにする。



「どうしたの？」

彼女は俄かに信じられないというような顔をしている。

「この男性、押山です。見えますか？ 少し離れて立っている女性が高清水です」

「なんだって？」

私は再び画面に目を戻す。確かに向こう側に大昔のアメリカの女優のようなアバターが立っていた。それがデフォルトの設定なのだろうか。無表情というよりはどこか妖艶さを含んだ表情でそこに立っている。

「これはこれは……なんだかすごいことになってきたじゃないか。斉藤さんがなにか仕組んだの？」

「まさか、さすがにそこまでしていませんよ。私だってびっくりしているんです」

煙草に火をつけて私は目を細めた。

「いいぞ、よしよし。最高のシチュエーションが出来上がる。ピースが全部揃ったような感覚だ。よし、よし。斉藤さんは引き続きモニタしていて」

興奮している私がいた。一体何が押山をエデンに縛り付けているのか。それを知りたいと思ったのが今回のユウマへの接触の発端だ。それが思いがけもしない形でより詳しくわかろうとしている。目の前に幸運が転がり込んできたのだ。これを逃す手はない。

「ここ、悠真さんがお気に入りの場所ですよ。俺も良く彼女と来るんですよ」

押山は常に笑顔でユウマに話しかけている。

「ユウマさんのファンの方ですか？」

押山はその表情のまま、しかし声だけは若干不機嫌な感じで私を振り返る。

「もう大ファンですよ。ええと、すみません誰ですか？」

声は不機嫌から敵意に変わる。この見ず知らずの男は誰で、何故ユウマと一緒にいるのか、というあたりだろうか。とても飯田の話や通勤中の雰囲気からは見て取れない押山がそこにいた。

「失礼しました。私、出版社のもので、いまユウマさんに取材の一環でエデンを案内してもらっているところなんです」

「なるほど、そうなんですか。さすが悠真さん。取材なんて受けるんですね。すごいなあ」

アンティークなクラッカーが音をたてる。押山はすぐにユウマに向き直り、私などいないというような感じで手を叩いていた。ユウマは謙遜して手を振っているが、頬だけは赤らめている。

「よろしければハルトさんも一緒に回りませんか。ファンの方の声って言うのも聞きたいと思っていたので。ユウマさん、いいですか？」

「もちろんです。じゃあ公開モードを三人限定にしますね」

「え？ いいんですか？ ありがとうございます！」

押山はこれでもかというくらい喜びを表現している。ふと向こうを見ると、高清水のアバターは既にいなかった。

「じゃあ質問に戻ります。周りを見ての通り、海辺、夕日と行ったらデートの定番って感じですよ。ちょっと野暮な質問ですが、恋人とかいらっしゃるんですか？」

斜め上を見上げてクエスチョンマークがいくつか表示された。そのあとに手で口を押さえてクスクスとユウマは笑う。

「う〜ん、募集中です」

それに対し押山が、「彼氏が出来たらショックです」とかそのようなことを言っている。完全に浮かれモードだなと私は苦笑した。

「しかし……話は変わりますが、今って昼間ですよ。夕日が見れるってなんか不自然な感じがするなあ。いつ来てもこの夕日なんですか？」

「そうですよ。いつでもこの夕日が見れるんです」

ユウマは私の疑問は疑問ではないというように答える。しかし私にはどこか納得がいかなかった。

「でも天候ってそんな単純なものじゃなくて、二つとして同じ景色はないと思いませんか？ これじゃあまるで、写真を見ているようだ」

一瞬会話が止まり静寂が私たちを包む。

「何言ってるんですか。この景色だからいいんですよ。一番綺麗じゃないですか」

押山が不機嫌な声でそう答える。この男は一体何を言っているのだろうか、とも思うが調査もあるのでそこは耐える。私にはその気持ちがまったくわからない。だが、もしこの世界を現実として捉えているとしたら。

「一番、ですか。なるほど、そうですね。確かに綺麗だ」

この世界に汚いもの、自分にとって不都合なものはないということだろうか。楽しい場所があって、綺麗な風景があって、好きな人がいて。嫌いな人とは話す必要もない。自分の居心地が良いコミュニティを作り上げることができる。

「インタビューーさん、なんかトゲありませんか？」

「いやいや、これは失礼。お気を悪くしたらお詫びします。どうもすみませんでした」

「俺よりユウマさんに謝ってくださいよ」

怒りマーク、が表示されてまるで、「プンプン」と言わんばかりに煙のようなものが何度か表示される。

「いえいえ、私は何も気にしていませんから。せっかくの機会なんで、楽しくいきましょう。他にもいい場所があるので、次はそちらに案内しますね」

ユウマがにこりと笑って、押山がユウマに謝る。私も一応謝り、再び場所が変わる。次はどこかのカフェだった。照明は落とされていて、全体的にウッド調でまとめられている。私たちの他に客はいなかった。

「お気に入りのカフェなんですよ。ちょっと落ち着きたいときは、いつもここに来るんです。利用者が少なく、隠れ家的な場所です」

「ここがいつも言っているカフェなんですね。感動です！」

きっとユウマがいつもこのカフェのことを報告している。だけど場所まではわからない。そんなところだろう。

私は現実の押山といま目の前にいる押山という人間のギャップに正直驚いている。あの生気の抜けたような押山はどこにもいない。生きいきとして、楽しそうな声で話す押山がここにいる。押山にとってユウマという存在はやはりそれだけ大きいということなのだろう。

「コーヒーが好きなんですか？」

「はい、オススメなんで、皆さん是非飲んでみてください」

私が訪ねるとユウマがうなずき、人数分のコーヒーを注文した。すると私たちの前にアンティークなカップに入ったコーヒーの映像が構築される。黒と濃い茶色が僅かに混ざり合ったような色。立ち上る湯気。手で持つことも出来るカップ。持ったときの感触がないということ差し引けば、本物と見間違ってもおかしくないものだ。

ユウマと押山はコーヒーを口元に運ぶ。私も試しにそれを真似してみると、コーヒーが少しずつ減っていく。どんな仕組みか理解することは全くできないが、すごいことだということはわ

かる。だが次の押山の発言はいよいよ私に不信感を与えた。

「あー確かに。すごい美味しい。いつも飲んでいるやつとはレベルが違いますね。香りもいいし」

押山はこのコーヒーの香りが良いといい、美味しいといった。ユウマもそれに対してハートマークを表示させる。この二人は一体何を言っているのだろうと思う。この状況下でどうやって香りと味を感じることが出来るというのか。

「お二人は何か香りも感じられる道具を使っているんですか？」

「……」

まただ。私がエデンについての疑問を投げかけると決まってユウマは黙る。さっきの天候のときもそうだった。エデンのことではないが、友人や家族のことを聞いたときも黙っていた。何が彼女を黙らせるのか。私の質問が“いたいところ”をついているのか。そうなるとユウマはこの仮想の世界の矛盾に気付いているということか。仮想の世界の広告塔的な存在であるユウマがその矛盾に気付いていて、戸惑っている？ 何かしらコーヒーの香りがする道具があるのではないか、と思ったことは事実だ。だがそこで回答につまるということは、そんなものは存在しないということだろう。

「は？ 何言ってるんですか。そういうもんじゃないですか」

問題は目の前にいる男だった。どうも私が計算していたのと違う方向に物事が進んでいる。そしてまたここでも、“暗黙のルール”がその存在を主張している。調査のためと思い押山と接触することを選んだが、私は正直に言うところの男が嫌いになりつつある。そういう感情は極力抑えて観察しなければ客観的なデータには近づかない。だがここまできると嫌味の一つでも言いたくなくなる。

「ああ、なるほど。こういう時は実際にコーヒーを飲みながら楽しむんですね。そうしたら香りもするし、味もする」

「ちょっと、なんなんですか。さっきからちょっとおかしくないですか？ これってエデンでのインタビューなんですよ？なのに……」

押山も完全に怒りモードになっていた。丁寧に表情までそれを表している。それは、怒りを表す表情に切り替えた、ということだ。最初はユウマばかり見ていて私のことなど見向きもしなかったのに、いまはそれが逆になっている。

「重ねがさね申し訳ない。私はこのエデンにはどうも不慣れなものでして。悪気はないんです。ご容赦いただきたい」

「だとしても、エデンにはエデンなりのルールってものがあるんですから」

郷に入れば郷に従え。押山が言いたいのはそういうことか。いや、と私は思う。違う思惑が押山にはある。

それを考えるのはあとでも良かった。それより私は、今となってはこの茶番劇が潮時だと感じている。本来の目的からはだいぶそれてしまったような気もするが、それ以外の収穫もあった。それは十分すぎる結果になるだろう。

「そうですね。ちょっと勉強して出直してきます。ユウマさん、失礼があったようで、申し訳ありませんでした」

下を向いていたユウマがぱっと顔をあげる。

「そんな、全然気にしないでください。楽しかったですから」

焦ってオロオロするような仕草をするが、正直に言うとユウマも助かった、というようなあたりだろう。その原因を作ったのは私なので、そこは少し申し訳なく思う。

「いやあ、ユウマさんは優しいなあ」

押山が怒った表情のままユウマに愛想をふりまく。そうだ、まさにこういう部分なのだ、私を感じるこの世界の違和感は。

「じゃあ私はここで失礼させていただきます。ホント、エデン初心者の私に親切に有難うございました。ただやっぱり私はこの世界は少し苦手です。空を見てもいつも同じ空で、コーヒーを飲んでも味も匂いもしない。それにあなたたちの顔はいつも笑っていて、私の顔もいつも笑っていて。だけど私は思う。今この瞬間、誰も笑っていないのではないかと」

そう言った直後、私の画面がぶつりと切れた。

※

最後に押山の声で、「お」と聞こえたがその続きはなんだったのだろう。「おまえ」だったかもしれない。振り返りヘッドマウントディスプレイを外すと、彼女が電源ごと引っこ抜いているところだった。

「ケンカをしたいんですか？ 調査対象と」

頬を僅かに膨らませた彼女がそこには立っている。彼女は間違いなくここにいる。私の目の前で、怒った表情をして、間違いなく怒ってここにいる。私は小さく笑うと首をふり、煙草に火をつけた。帰ってきた、という感覚だ。

「すまない。冷静じゃなかったね。しかし、いきなり電源を落とすことはなかったんじゃない？ ユウマには悪いことをしたなあ」

そのままソファに座った私に彼女がコーヒーを持ってきて向かいに腰を下ろす。インスタントの安っぽい匂いがする。カップも安物だ。だが、私にとってはこちらの方がなんぼも魅力的だ。「同時に押山の行動もモニタしていたのですが、あの場で別の人に内密に話しかけ、所長の身元を調べられないかどうかを相談し始めたんです。面倒くさかったので、電源毎落としました」

「乱暴だなあ」

「乙女にむかって暴言ですね。で、どうでした、ユウマのインタビューは」

「う〜ん」と私は天井を見上げて煙を吐き出す。

「思っていたより幼かったな。あのアバターの通りで、まだ若いのかもしれないという印象。戸惑って、何を答えてよいかわからない、っていう場面が何回かあったでしょう？」

「はい。最初は順調だったんですけどね。所長がいじわるするから」

彼女が笑ったので私も笑う。そう、会話というのはこういうものだと思った。エデンにいる人がみんな、”暗黙のルール”に従っているわけではないだろう。だが、生きていく、人と関わっていくというのはこういうものだろう。

「斉藤さん、触っていい？」

「はっ!？」

彼女が後ろにのけぞる。

「冗談です。実際にこうして人と話すのって良いなと思っただけ。今日はコーヒーも格別美味しく感じるよ」

彼女はまだアブナイ人を見るような目で私を見ている。女性にこのような目で見られるのは男として非常に不本意であると思った。

「でも、あの押山くん。どう思った？ 私は約一週間、彼の行動を追いかけてきた。そこで見た彼は、あんなに話さず、あんなに笑うことはなかった。どちらかという無愛想な印象で、大人か子供かと言われれば、大人だった。でもさっきの彼はどうだろう。まるでお菓子を与えられた子供のようだった。このギャップはどこからくるのだろうと思っていた。

最初はそれがユウマだと思っていたんだ。ユウマという神がいて、彼はそこにすがっている。ユウマという存在が彼をエデンに縛り付けていると。だからユウマと話してみたくになったし、あの場で押山を誘った。だけどそれは違ったんだ」

「どう違ったんです？」

「うん。押山にとっての神はエデンそのものなんだ。あの世界が神であって、ユウマは教祖にすぎないんだと思う。彼は物事全てをエデンというフィルタがかかった状態で見始めている。残念だけど、リアルを求める高清水との復縁は絶望的だろうね」

「でも、ユウマはプロデューサーではないですね。普通は教祖が神をプロデュースしてペテンをやるものだと思いますけれど。」

私は押山については特に何も感じませんでした。溢れているわけではないですけど、ああいう人がいるのは知っていましたし。むしろ興味深かったのはユウマの方です。彼女は演じきれていませんでしたね、エデンのアイドルを。私もユウマにはプロデューサーがいるのではないかと思っていました。誰かが彼女で儲けているんじゃないかと。でもきっと違う。彼女は自分で始めたんですね、理由はわからないですけど。自分にとって都合の良い世界で好きな自分を演じていれば良かった。誰も傷つけない、傷つけられない。まさにエデンという名の通りの、楽園。だけどそれは現実じゃない。ユウマもそのことに気付いているのかもしれませんが。だから所長にそこを突っ込まれたとき、なんと答えて良いのかわからなかったのではないのでしょうか。それを認めると、自分の世界を否定することにもなりかねない。夕日が好きだからいつも夕日を見る。でも現実はそのじゃない。それはインチキだと言われたら。誰だって返答に窮すると思います」

「そうそう、まさにそんなところだと思うよ」

私は新しい煙草に火をつけた。彼女が換気扇のスイッチをつけに立ち上がる。私はその後姿を満足げに見つめた。これは別に嫌らしい意味ではない。こういう会話ができる彼女の存在を認め、尊重しているという意味である。

「もし教祖様がいなくなったら、押山はどうなると思う？」

「えー、どうでしょうね。高清水さんのところに戻るっていうのは考えにくいですけど。コーヒーおかわりいりますか？」

彼女がカーテンで仕切られた簡易キッチンからひょこりと顔だけを出す。うなずくとポットごと持ってきてそれぞれのカップに注いだ。

「かといって、自殺なんてするタマじゃないですね。あらやだ、私ったら下品な言葉遣いで」

「いやいや、的を射ていると思うよ。私はね、押山みたいな人間がプロデューサーになるのではないかと思う。漢時代の宦官だったり、摂関政治を行った藤原氏のように、傀儡政治みたいなことを楽しむ人間っていうのは世の中には案外多いからね。まあ、これは私の印象だし、実を言うとどうでも良いことでもある。それより次に考えなければならないのは、田中と高清水への報告をどうするか、ということなのだけだね」

「あー私、歴史の話はダメです。所長の言うとおりに、報告をどうするかっていうことの方が大事だと思います！ それについては今夜……」

「ダメ」と私は先手を打った。

「今夜は居酒屋はなし。斉藤さんも家に帰りなさい。どうか私をベッドで寝かせて欲しい」

彼女は口を尖らせて何か言いたそうだったが渋々と頷く。これが私の現実であると思う。さっきまでのエデンの出来事は、既に遠い昔の記憶のように感じる。とても長い時間体感したようにも思えるし、あっという間だったような気もする。それくらいもう実感はない。とりあえず今夜は普通に眠れることを幸せに思うことに私は決めた。



## 5, 出 逢

チュンチュンとすずめだろうか。鳥の鳴く声で今日も一日が始まる。窓からは明るい太陽の光が差し込み、部屋を明るく照らしている。少しのあいだ目を閉じ、母親が用意したトーストをかじりながら宮元悠真は家を出た。

特に目的があるわけじゃなく、すれ違う人たちに「おはよう」とだけ声をかけて、当ても無くふらふらしていた。今日は何をしようか、いっつも朝はそのことを考えている。映画を見に行こうか？ 公園にでも行こうか？ ショッピングモールで服を買っても良い。先週新作が発表されてたはずだ。それとも、久しぶりにゲームでもしようか。時間もあるしお金も十分ある。

「悠真ちゃん、今日も綺麗だね」

ふと、見知らぬ男に声をかけられた。いや、記憶に無いだけで以前に会ったことがあるかもしれない。一日中いろんなところを歩き回っているのだ。一日に出会う人間なんて山ほど居る。だから私は決まって笑顔で「こんにちは！」って応えてその場を立ち去る。たまにしつこくついて来る時もあるけど「ちょっと用事があるから」って家に帰ってしまえば問題ない。模様替えに必要な壁紙やカーテンは腐るほどあるから、部屋の中をいじって適当に時間を潰してからまた家を出れば良い。

「何してるんだろうなあ」

自分の口からぽつり出た言葉に誰でもなくあたしが驚いた。もう何年も同じ生活を続けてきたのに、漠然とした「何か」を疑問に思うなんてこと考えても見なかった。それは、やっぱり……

「あの人の、せいなのかな」

たぶん、そうなのだろう。でも、だからなんだというのだ。だからどうしろというのだ。迷路。それもゴールにけしてたどり着けない迷路に迷い込んだらこんな気持ちになるのだろうか。

ああ、太陽がまぶしい。肩を落として顔は下を向いてるはずなのに……ああ、太陽がまぶしい

。

「いいじゃん。一緒に遊びに行こうよ」

「近所なんでしょ？ ね？」

ぼんやりして歩いているとそんな声が聞こえてきた。

声のほうを見てみると「いかにも」って二人の男が女の子を囲んでいる。ナンパなんて日常茶飯事だし気にすることも無いんだけど、これは止めたほうが良いかな。

「ごめーん！ 待った？」

あたしは男の間に割って入ると女の子の手をつかんだ。蛍光色で包まれたその姿は、見るからに「あるものを着ました」という色合いで、一言で言えばセンスというよりも趣味が悪い。こんな女の子に声をかけるなんて、男のほうは性質が悪い。馴れてる奴らだ。

「さ、行こ！」

女の子に声をかけてその場を立ち去ろうとすると、男達はあたしの目の前に立ちふさがった。

「ちょっとちょっと」と笑顔で声をかけてくる。その声から想像できる表情は笑顔と言えども下卑た笑顔だろう。いちいち相手をするのも面倒くさい。あたしは「急いでるんで」とだけ話をし、女の子と一緒に家に帰った。

※

楽園都市EDEN 利用者の数がすでに人口の半分を超えているとも言われる超巨大仮想都市。ショッピングモール、アミューズメント施設、各種リゾート。おおよそ考えられる全てが詰まっているといっても過言じゃない。食料品や衣服を買うことも出来るし、二十四時間どこでも食事をデリバリーしてくれるサービスもある。目の前に広がる景色はまるで本物に遜色なく、国内や海外の観光名所に行くことも出来る。もちろんお土産の購入だって可能だ。

## 第5章 出 逢 : 02

まさに楽園。時間をかけずにやりたいことができる、行きたいところに行ける、欲しいものが手に入る。そんな場所があたし、宮元悠真の世界であり、本当のあたし、谷原莉桜の居場所だった。

中学生のときにエデンに始めてログインした。学校では「ごみ」「カス」「死ね」と罵られ続けてきたあたしが訪れたこの楽園は、その名を違える事無く楽園だった。誰も彼もがあたしに笑顔を向け、挨拶をし、暴力を振るわない。あたしが挨拶をしても、笑顔を返してくれる。

それを楽園といわずして何て言うんだろう。

それからあたしはそこで生活を始めた。推薦で合格していた高校には入学式すら行かなかった。どうせ行ってもあたしはごみでしかない。誰が好き好んでそんなところに行くだろうか。それよりもエデンだ。

そのころのあたしは一日の九割どころか全てをエデンで過ごし、既にヘヴィユーザーの仲間入りを果たしていた。それだけじゃない。私を姫と呼び、王子とよび、救世主と呼び、アイドルと呼び、とにかくあらゆる場所であたしを必要とする人たちが山ほど居た。

彼らにとってあたしは無くてはならない存在だったのだ

※

「ありがとうございました！」

蛍光色に身を包んだ女の子は家に着くなりそうだった。あたしは「気にしないで」とだけ言って椅子に座った。「天宮いくみちゃんか。ここは初めて？」

女の子の足元には名前が表示されている。もちろん、いくみから見れば私の足元にもちゃんと名前が表示されているはずだ。

「いえ、二日ほど前から少し」

「そっか。ああいった人たちはしつこいから、個人情報とかあんまり教えちゃだめだよ」

いくみはキャラクターの表情を泣き顔に変えて「はい。すみません」としきりに謝ってくる。あたしに謝っても仕方ないんだけどな。仕方なく落ち着くまでまじまじと彼女を見るけど、やっぱり蛍光色が目に痛い。

「ねえ、その服ってあなたが選んだの？」

「これですか？ 登録したときに貰ったんで、これにしたんですけど」

やっぱりだ。あたしはクローゼットから適当に服を取り出すといくみにプレゼントした。キャラクターの服なんていくらでも買えるし、なにより目に優しい。

いくみは満面の笑みとしつこいくらいのお礼を私に告げ、服を切り替えた。ベージュのコートと黒いパンツ姿になるとずいぶんと印象も変わって見えた。着替えた後も何度もお礼を言う。きっと癖なのだろう。

それからしばらくいくみと話をしていた。彼女が言うには高校生らしく、周りでみんなやっけるから始めたらしい。どこまで本当かわからないけど、あたしはいちいちリアクションをとりながら話を聞いたが、自分の話はしなかった。いくみは話し好きのようで、次から次へと話題が出てくるし、なにより自分と同じ年齢ということにどうしても抵抗を覚えてしまう。

ひとしきり話をしたあとで、思い立ったようにいくみに「良かったらエデン案内しようか？

」という「うなずき」のモーションと元気すぎるくらいの返事が返ってくる。思わずスピーカーの音量を低くしたが、嫌な感じはしない。どういう心境の変化か自分でもよくわからなかった。こんな素人まらだしのプレイヤーと行動をともにするなんて今までの悠真にはありえなかった。ただ、それゆえに新鮮でもあった。

悠真はクスリと少しだけ笑い、家を出た。うしろからいくみがついてくる。少しだけ歩くペースをゆるくして、いくみにならぶと「どこに行くんですか？」と聞いてくる。「同い年だから敬語は使わないで」質問に答えずに言うと驚いた声が返ってくる。

今日はいつもと違うことが多すぎる。それならとことん違うように動いてみたい。そういう思いが敬語を使わせなかったのだろう。これも普段なら絶対にありえないことだ。自分も他人も、なれなれしいのは好きじゃない。

悠真はいくみと会話をしながら、始まりの場所。メインストリートへと向った。

※

メインストリートは日曜日ということもあってキャラクターでごったがえしていた。夜になるとさらにキャラクターは増えてくる。

悠真はボイスチャットをいくみとだけ会話できるように設定した。いくみにも同様の設定をさせ、さらに自分といくみ以外のキャラクターを映像に出さないように設定をする。こうする事でいくみを見失わないし、ほかのプレイヤーからも見えなくなる。

設定が終わるとそれまでガヤガヤと聞こえていた誰かのボイスチャットはなくなり、メインストリートには悠真といくみだけ。一瞬にして閑散とした場所にかわった。

「こんなこと出来るんだあ」

いくみは物珍しそうにあたりを見渡す。

「言わなくてもわかると思うけど、ここがメインストリート。一番最初に来る場所だしわかるよね？ ここで誰かと会うときは今してる設定にするのが基本だよ」

「そうなんだ。悠真ちゃんていつもここで何してるの？」

「いつも、か。なんでもするよ。買い物もするし、映画もみるし、ゲームもするし、できる事はなんでも」

「海外旅行とかも？」

「行けるところは全部制覇したわ」

ニヤリとモーションを入れていくみを見る。「すごいなあ」「羨ましいなあ」と言われるのはやはり気持ち良い。

「あ、このブーツ可愛い！」

そう言ってショーケースの前に居るいくみはやはり女子高生、女の子だった。

悠真にとってはファッションはステイタスでしかなかった。エデンのアイドルとして、安っぽい格好で居る事は許されないと服を買い、オシャレをするが、どちらかと言えば欲望より義務感が先に来る。もちろん、可愛いだとか綺麗だとかっていう感情が無いわけじゃない。ただ、それが購入意欲にはつながらない。

「あげようか？」

悠真は言い終わるよりも早く、昨日買ったばかりのショーウィンドウのブーツをプレゼントした。いくみは驚きのあまり早口で何かを言ってるが耳には入らない。

「なんか、わらしべ長者みたい」

「わらしべ長者のわりにあたしは何も貰ってないけど」

なんて軽口を叩きながら悠真たちはメインストリートからリゾート地区の入り口までやってきた。受付で条件を設定する。場所・天候・時間帯などを設定してから移動すると、その条件どおりの場所へいける。悠真が指定した場所は「海・晴れ・夕方」の三つ。移動した先には水平線に沈み始める太陽があった。

「すごい綺麗！まるで写真みたい……」

うっとりとした声でいくみはつぶやき夕日に見入っていたが、悠真の心は目に見える海のようにすこしだけ、さざなみが立っていた。雲ひとつない空、海面が映し出す夕日。本当に写真のページを貼り付けたような綺麗な世界。それを疑うことなく見るいくみは何を思うのだろうか。ぼんやりそんなことを考えてしまう。

「いくみ！ 突撃します！」

突然そう叫び、悠真に敬礼するといくみは海へと走っていった。バシャバシャと音を立てて海に入ったと思えば潜って「すごい！ 海の中もちゃんと見える！」としきりに興奮している。あっけにとられている悠真に「悠真ちゃんもおいでよ！」と無邪気に呼ぶが、悠真にとっては海の中なんて何百回と見てるし、やれやれといった感じで近づくと、バシャッと水をかけられた。

「きゃっ！」

思わず叫び水をかけ返す。光景だけ見ると前時代的なカップルのようだ。しかし、いくみに水をかけ続けているあいだ、悠真の心の波は少しだけ大きくなっていった。

海を出ると服からは水が滴り落ちてくるが、それもわずかな間で、リゾート地区を出ると服はいつもどおりの状態に戻る。

悠真はいくみをつれて、いきつけのカフェに行った。利用者が無数に居るエデンでも殆ど人が来ない空間がある。エデンの飲食店は大きく二つに分かれ、一方は自宅やオフィスへのデリバリーを行い、もう一方は実際の飲食店のようにその場に料理が運ばれてくる。前者のほうは利用者も多いが、後者のほうは単価も高く、実際に食道を通るわけでもないので利用者は殆ど居ない。来るのはヘヴィユーザーか気取った金持ちぐらいなものだ。

悠真はいくみと奥の席に座りコーヒーを頼んだ。運ばれてきたコーヒーは軽く湯気がでて暖かそうに見える。

普段使うことの少ない「飲む」というモーションでコーヒーを飲むといくみもそれにならう。味も香りもまったくないコーヒーを以前は美味しいと思ったのだから、考えてみると笑いすらこみ上げてくる。

「ここだとコーヒーも飲めるなあ」

のんびりとした口調でいくみがコーヒーを飲んでいる。コーヒーは苦手だと来る前に言ったが、苦味も何もないければ苦手も何もないだろう。

「あたしの学校の近くに、米風館って喫茶店があるんだけど、コーヒー飲めないから一度も入ったことなくて」

そう言ったまま言葉は続かなかった。薄暗い店内には静かにジャズが流れている。こういう空気だといくみも自然と口数が減るから不思議だ。だけど、嫌な沈黙じゃない。しばらくの間、ポツリポツリと会話をしながら過ごした。

コーヒーもなくなり二人は店を出た。

「さて、簡単に案内してきたけどまだ時間ある？」

「え？ あるけど……どうしたの？」

「行きたい場所があるの」

※

大草原。見渡す限りの大草原。そこに大きな木が一本だけ立っている。そこが悠真の行きたい場所だった。海でもカフェでもどこでもなく、そこが本当に一番好きな場所。風が優しく吹いて、それにあわせて光の波が起こる。ただそれだけの場所。

「ここは、いつ来ても誰も居ないの」

木に背中を預けて遠くを見る。リゾート地区でもなく、何のために作られたかすらわからないココは、二十四時間を刻み、天気も自由には変えられない。自由な楽園の唯一とも言える不自由な空間。

「誰も居ない場所なんて簡単に作れるけど、最初から誰も居ない場所ってここしかないんだよね」

いくみは声をかけず、そっと隣に座り悠真を見つめる。悠真はそれから何も言わずにオレンジ色の波をただひたすら眺めていた。やがていくみもそれにならう。

いったいどれだけの間その景色を見て居ただろうか。不意に悠真がぽつりとつぶやいた。

「ねえ、いくみは今……」

「え？ わたしがどうかした？」

「……ううん。なんでもない」

そう言ってまた悠真は喋らずに光の波を見ていた。オレンジ色の闇はやがて薄暗い青い光に変っていった。



押山side

押山が不機嫌そうな顔でキーボードを叩き続けるのを、上田は驚きと呆れの混ざり合った表情で眺めていた。

普段から温和なイメージが強く、本気で怒ったり不機嫌さを隠そうとしない押山を今まで見たことがなかった、というのが驚きの理由。呆れの理由は、こちらは上田にとっては最近良く悩まされている深刻な問題だった。

どうやら昨日、押山は高清水と一悶着あったらしかった。当の本人から相談という名の愚痴を夜中じゅう聞かされ続けたのだから、らしかったというのはいささか間違った表現かもしれないが。

原因は押山にあると高清水は言っていた。高清水とのデート中に、なんとあの悠真が現れ、押山は彼女に誘われるまま着いていったというのだ。元々押山のデートコースは悠真のよく行く場所だということは、押山本人からもよく聞いている。そのため悠真がそこに現れるのも不思議ではない。ファンである押山が悠真についていくのもまた然りだ。問題なのはデートの最中だったことと、高清水を放り出して悠真に着いてしまったことだ。

それとなく押山に尋ねてみると、悠真とそのもう一人、雑誌の記者だとかいう人物に誘われたから断る理由も無い。ということは何とか聞き出せたが、それだけでも一苦労だった。

すでに時刻は十二時を過ぎ、昼食が消化されて眠たくなってくるような時間。機嫌の悪さが持

続するにはあまりにも長すぎるほどの時間が経っているはずだった。にもかかわらず、未だに洗った顔のままの押山に、さすがの上田も閉口してしまう。

上田には理解できない部分だった。いくらなんでもデート途中で相手を放り出して別の女性についていくなんて度が過ぎている。高清水の危惧していた通り、思っていた以上にエデンと、そしてなにより悠真に傾倒しているという証明に他ならなかった。

「それなのになんで不機嫌なんでしょね」

上田と同期で、高清水とも仲の良い飯田幸香が、上田にだけ聞こえるようにボソッと呟く。上田のように双方から板ばさみにされていない飯田からすると、押山の性格からすれば、高清水とケンカしたことよりも悠真に誘われたことで有頂天になっているはずだ、という見解らしかった。

「さすがに反省してたんじゃねーのかね。で、それなのに高清水さんに烈火のごとく怒られて逆ギレ？ 的な？」というフキダシを抱えたエッグが飯田のディスプレイに現れ、飯田のアバター『ハッピーフレイバー』の頭の上に浮かぶはてなマークを払い除ける。

ハッピーフレイバーが深々とついたため息に「子供だなあ二人とも」という文字が浮かびあがる。

「高清水さんを子供って言うのはハピちゃんくらいだよ。俺は恐ろしくて冗談でも言えねえや」  
大げさに肩を抱いて震えるエッグを見て、ハッピーフレイバーではなく飯田が小さな笑い声を上げてしまう。「あ」と両手を口元に当てるとすぐに取り繕うような咳払いをして、飯田は自分の隣でキーボードを叩く上田を軽く睨んだ。

「もう、やめてよね」

「ごめんごめん」

飯田のささやくような怒りの声に、上田も同じように小声で謝った。

心配する後輩達を尻目に、渦中の押山は二人の想像とはまったく違うことで憤りを感じていた。確かに飯田の想像通り、昨日悠真に出会えたばかりか、プライベートなインタビューにまで参加できたことに有頂天になっていたのは事実だが、インタビュアーの対応がその上機嫌を一気に不機嫌へと叩き落としていた。

あまりにもエデンについて無知、いやエデンに対して失礼なインタビュアーだったと、思い出すだけでもキーボードを叩く指に力が入ってしまう。

現時点ではエデンでの食事に味はない。食感も匂いも存在しない。いくら自分のアバターが食事をしようが、自分自身には何の影響もない。空腹や喉の渇きが満たされることはない。いわばごっこ遊びだ。エデンはそういうルールの上に成り立っているのだ。

技術的な問題点であると同時に、そこまで現実には近づける必要性をユーザー自身が感じていないという側面もある。空腹を満たしたければキッチンへ行くなりレストランへ行くなりすればいいのだ。エデンに支店を出している店のいくつかはエデン経由でデリバリー注文だって出来る。そういった割り切りは、エデンで円滑に生活するための常識や礼儀といってもいい。

しかしあのインタビュアーはそれを知ってか知らずか、インタビューの場を悠真お気に入りの喫茶店に移した際に「そちらは実際にコーヒーを飲みながらやっているんですか」という初心者極まりない質問を投げかけてきたのだ。

仮にもインタビュアーなら、下調べ位してくるのが常識というもの。少なくともエデンを知り尽くしている悠真に対してするような質問ではないのは確かだ。

現に悠真は機嫌を悪くしたらしく、インタビュー直後に「一人になりたい」とすぐにどこかへ行ってしまったし、インタビュアーはインタビュアーで、最後に捨て台詞とも取れる言葉を吐いて一方的にインタビューを打ち切ってログアウトしてしまった。

インタビュアーの無知さ加減に苛立ちを覚えていた押山だったが、だがそれと同時に自分もあのインタビュアーのように見られているのではないかという不安にも駆られていた。はっきり言って押山はまだエデン初心者だといってもいい。まだエデンについては知らない事だらけだ。知らず知らずのうちにエデンの流儀から逸脱した行動をしていてもおかしくはない。

悠真の前ではミスをしていない自負がある。だがエデンを熟知している悠真から見れば、まだまだつたない部分だらけなのは明白だ。

このままで良いわけがない。仕事と同じだ。きちんと細部まで確認しなければプロジェクトはまともに動かない。どこかに見落としがあればそれは後々大きな穴へと成長してプロジェクトを崩壊させることだってありえるのだ。

インタビュー後、冴子から来ていたメールを空けることもせず、押山が行ったことはエデンについてありとあらゆる事を検索することだった。軽く目を通しただけだった初心者用のガイドブックのサイトを一字一句読み直し、エデン内の先輩から意見をもらう。エデンにいる多くのユーザー、そして悠真の来た道をたどるように。

とにかく今の押山にとっては、あのインタビュアーはエデンに馴染めていたと自惚れていた自分を省みることの出来た良いチャンスだったともいえる。彼を許す気にはなれないが、自分をより悠真に近づけるための反面教師として見ればいいのだ。

「時間が足りない……」

会社において多くの仕事を抱える立場の押山が、その言葉を口にしたところで周りにとって不思議はなく、それが真に意味するところを理解できたものは誰もいなかった。

### 高清水side

異変を知らせたのは上田からのメールだった。「先輩……どうしちゃったんですか？」というたった一言を、上田のアバターはディスプレイの隅っこから、まるで叱られるのを恐れている子供のように顔だけ覗かせて、小さな小さなフキダシで伝えてきた。

「どうしちゃったって、どうしたの？」

「あれ？いや……あれ？」

「全然わからない。はっきり言ってくれない？」

「えーっと。いや、うーん。なんていえばいいんだろう。あの、先輩はどうしてます……かと？」

」

隠れるように顔を出したり引っ込めたりを繰り返しながら、エッグが言いよどむ。

「遥人？」

悠真に着いて行って以来、今日までデートに誘ってもそっけない返事ばかりを繰り返していた遥人ではあったが、「何か変化があったらすぐにご連絡しますよ」と言っていたあの探偵から特にこれといって連絡も来ていない。

「遥人がどうしたの？」

「あれ、やっぱり知らないんですか。マズいなあ。いや、今日先輩来てないんですよ」

「来てないって会社に？」

「はい、今日外回りの予定もないはずだし。高清水さんなら知ってるかなあって。ホラ、風邪とか、ホラ、ねえ？ 最近流行ってるって言うじゃないですか」

困った顔のままのエッグを無視して、冴子はハルトのIDを呼び出す。案の定エデンにはログインしているが、位置情報は押山の自宅を指していた。

「遥人？ どうしたの？」

「ああ、冴子か。どうしたってなにかあったの？」

ハルトに呼びかけるが、ハルトの位置情報がつかめない。どうやらエデン内をめぐりまわっている様子で、会社のハイスペックとは言い難いパソコンでは画像処理が追いつかないらしく、簡素な文字だけが冴子のディスプレイに浮かび上がる。それが冴子には不気味に見えた。

「会社じゃないの？」

「今日は休んだ。きちんと吉村さんには連絡してるよ」

悪びれることも無い押山の言葉に思わず体を強張らせる冴子。無味乾燥な文字だけというのが余計に苛立ちをあおった。もし普通の会話をしていたら声を荒げてしまっていることだろう。

「体調が悪いならどうして私に言ってくれないのよ。大丈夫なの？」

「風邪とかじゃないよ。ちょっとエデンでね、用事があって」

また、エデンだ。思わずぞっとしてしまう。一体何が彼を変えてしまったのだろう。自分がエデンの活用法を教えたから？ それとも悠真がエデンにいるから？

「用事って、会社を休んでまでの用事なの？ ここ最近本当におかしいわよなんなの？」

「なんなのって言われてもなあ。あ、ごめんちょっと忙しいんだよね。『リシュリユール』さんがね、なんかエデンのアングラとかそういう所に連れて行ってくれるらしくってね。もういいかな？」

「エデンエデンって！ そんなにエデンが大事なの！ 私や仕事より大切だって言うのおかしいわよ！ エデンなんてしょせん偽者じゃないの！ あなたが見てるもの全部単なる絵みたいなものじゃないの！」

若干すわりの悪いキーボードがカタカタと揺れるほどの勢いで冴子が文字を打ち込む。

「なんだよ、お前もあいつみたいなこと言うんだな」

その言葉と共に急にハルトが顔を出した。その顔はあの押山のアバターにもかかわらず、はっきりとした怒りの表情を浮かべていた。思わず冴子の手が止まる。

「あいつって誰よ」

「お前もエデンを馬鹿にするのか？」

「だからあいつって誰よ一体！ 何言ってるのよおかしいわよ」

「おかしいのはお前のほうだろ、偽者だって？ 偽者だって？ 馬鹿じゃないのか冴子」

「馬鹿なのはそっちじゃないの。だっておかしいじゃない、あなた本物のエアーズロックを見たことあるの？ ナイアガラの水しぶきは？ 一面の蛍は？ 本物のクジラに触ったことあるの？

全部見たこと無いじゃない！ あの夕日だって全部偽者じゃない全部嘘じゃない！ 料理だって味もしないし、何が美味しいねよ。美味しい訳ないじゃない！ あんなおままごとなんて、も

うんざりなのよ！」

その一言が、今の押山にとって一番の禁句だということなど冴子が知る由もない。

「おままごと？」

ハルトが姿を消し、黒い背景にポツンとその一言だけが残される。鏡のようになったディスプレイに写った自分の顔が引きつっているのを冴子は見た。

「それがエデンのルールじゃないか!!」

突然画面いっぱい文字が映し出され、冴子は驚きのあまり椅子ごと後ずさりしてしまう。床と椅子がこすれるその音は思ったよりも大きく、周りの視線が集中する。冴子は引きつった表情を戻すことも忘れて「ご、ごめんね。なんでもないから」とかすれた声を吐き出すのが精一杯だった。

冴子は、初めて押山のことを怖いと感じていた。常日頃から温和で、怒っている顔なんて一度だって見たことが無い。自分のわがままも笑って許容してくれていたあの彼が、今はまるで親の仇だとでも言うように自分に怒りをぶつけてきている。

まるで別人。冴子の知る押山はこんな理不尽なことで怒ったり、ましてやそれを他人にぶつけるような人間ではなかったはずだ。

「遥人、あなた本当に遥人なの？」

心なしか震えの来ている指でようやく打ち込んだその言葉も、すぐにハルトの文字がかき消していく。

「おままごと？ 僕からすれば君の好きなデートプランのほうがおままごとだよ。いつだってそうじゃないか。まるで教本を丸写ししたみたいに絵に描いたようなデートばかり。君にとってのデートは自分が『デートをしている』って感じたいだけじゃないか。高いワインに高い服、高いホテル。美術館や博物館には行くのに動物園や水族館、子供っぽくてイヤだって言ったよね？ 遊園地の観覧車でキスはせがむくせにメリーゴーラウンドには乗りたがらない。カラオケも、家で二人きりでのんびりするの嫌いだっただよね。着飾って気取った場所ばかり。映画みたいな浮ついたデートばかり、一体誰に見せてるのさ？ 別に僕だって苦痛じゃないよ苦痛じゃ無かったんだよ君の好きなことだからね。でもね本当は僕からしたら何の面白みも無い。君にとってデートは僕にとってのデートなんかじゃなかったんだよ」

押山の言葉がディスプレイを埋め尽くす。

「なによそれ。そんなこと思ったの？」

思い出したのは前回のエデンでのデートだ。冴子が押山に不信感を抱いたあの時だ。自分とデートをしていながら誰か別の人と会っている、別のことを考えているのではないかという不信感。その不信感と、それを抱くにいたった違和感。

その理由こそが、押山が自分とのデートに対して感じていた意識の違いなのだ。しかし今の冴子にそういった冷静な判断は難しかった。

男女平等が声高に叫ばれる現代においても、未だ日本は社会に出ている女性への風当たりが良いとはいえない。ましてや冴子が相手をしているのは重役や役員といった、自分よりも強い立場に立つ男性がほとんどである。セクハラまがいのことは日常茶飯事だった。

そんな中で冴子はことさら強い女性であろうという気持ちが強かった。隙を見せれば食われる社会でうまく立ち回ってきた、そんな自負もある。

高清水冴子という女性にとって、自分の生活の全てはパーフェクトで無ければならない。それが社会人としての自分の立ち姿だ。だが、自分がそれを完璧にこなせるような人間ではないこと

も自覚している。自分を律してきた彼女が唯一弱みを見せられる相手こそが押山遥人。多少のわがままも笑って受け止めてくれる人物。唯一の理解者にして最良のパートナー。冴子は少なくともそう思っていた。



しかし押山にはそれが理解できていなかったらしい。誰しもが持っているであろう弱い部分を認めてはくれず、逆にそこを背伸びしている子供だとでも言うように指摘されるのは冴子にとって苦痛だった。

まるで自分の心を見透かされたような気持ちと、なぜ自分の本当の気持ちを理解してくれないのかという苛立ち。それが押山の言葉と重なり、冴子の心をどす黒く染めていく。

ディスプレイの前の冴子は強い苛立ちの所為でうまくキーボードを打つことが出来ずにいた。アバターの表情を変えるということにすら気が回らない。その結果冴子のアバター『マリリン』はディスプレイに向かっていて彼女本人とは逆の表情、笑顔のまま押山に怒りをぶつけることとなった。

「あなたがそんな風に思っていたとは思わなかったわ」

「最初からってわけじゃないけど。この頃のデートはまるで君のためだけに用意されているみたいな気分だったよ。君の望むところへ、君の望むようになってね。エデンは久々に僕の意思が入り込む余地のあるデートだと思ってたんだけどね。どうやら君のお気には召さなかったらしい」

冴子は何故か、ディスプレイの先にいる押山が肩をすくめているような印象を受けた。

「君は僕のことをこれっぽっちもわかってくれないんだね」

「それはあなたのほうじゃないの。こうやって話しても埒が明かないわ。一旦会って話をしましょう」

「必要性を感じないね」

冴子の言葉をにべなく切り捨てた押山は、さらに続ける。

「直接会ったところで感情的になるだけさ。それに今こうしてエデンで話せているんだから会う必要なんて無いじゃないか」

「エデンで会ったつもりになってるだけなのよ、あなた」

「エデンで会おうって最初に言ったのは君じゃないか。じゃあ僕らはデートをしているつもりになっていただけなんだね、きっと」

「屁理屈よそんなの。あなたがエデンに依存するからじゃない。つもりって……そうね、こうして画面の上で話してるだけだものね。私には、もうそこにいるあなたが本物の遥人かどうかかわからないわ」

「そうかもしれないね、でも、きっと冴子にはわからないんだろうな。このシステム、エデンがどれだけすばらしいかってことがさ」

「どうせ、すばらしいのはエデンじゃなくて悠真なんですよ」

「そうだよ。そうさ。悠真は素晴らしい。僕の望むエデンそのものといってもいい」

何度聞いたかわからない押山の悠真賛美を眺めながら、いつのまにか心の一部が急速に冷めていっているのを冴子は感じた。怒りは徐々に治まり、代わりに冴子の心を占めていったのは押山への軽蔑だった。

「もういいかな。いいかげん僕には時間が無いんだ。これ以上あいつみたいな無知を晒すわけには僕はいかないんだよ。僕は彼女に見合う人間にならなくちゃいけないんだ。君には感謝してるよ、エデンを教えてくれたこととかね」

「あなたにエデンを教えたのはいいことだったのか、それとも悪いことだったのか、もう私にはわからないわ。でも、あなたにとっては会社や私よりも、エデンや悠真のような虚構のほうが大

切だって。そういうことなんでしょう？」

「君にとって偽物に見えても、それが誰かの真実だって事もありえるんだよ。さよならだ、冴子」

それだけ言い残すと、ハルトは会話を打ち切った。そして画面には無機質な文字で「あなたのIDはハルトさんから拒否されました。何か問題のある場合は運営までご相談ください」とだけ残された。

ディスプレイから顔を上げ、深いため息をついた冴子は、周りが自分に注目していることに気が付いて顔から火が出る思いになった。

今自分がいる場所はエデンではなく会社だという現実に戻された冴子は、ひとつメールを出し終わると、気分を切り替えるために席を立ち冷蔵庫から牛乳を取り出した。未開封のそれを開けるとコップになみなみと注ぐ。インスタントコーヒーを入れ忘れたことに気づいたのは電子レンジが鳴った後だった。

悠真が彼を変えたのか、それともエデンが彼を変えたのか。本当のところはわからなかった。だが今の押山は自分の望んでいた彼ではないのは紛れもない事実だった。

ハルトに送ったメールがID受信拒否によって戻ってきたのを、冴子は冷めた眼で見つめていた。

メインストリートを一人で歩いていると少なからず声をかけられることがある。そのほとんどがナンパであったり一般ユーザーでしかないあたしのファンだ。

長いことエデンに居たせいもあって、知名度はかなりのものだった。加えてよくわからない人たちがドンドンと悠真をPR材料として使っていくものだから、いつの間にかアイドルのような存在と化している。

別にそれを鬱陶しいと思う事は無かった。今までは。

いつの間にかあたしはあたしがわからなくなり、見ず知らずの人に声をかけられ、笑顔でその声に返すのがどうしようもなく滑稽に見えて仕方が無かった。

「悠真ちゃん！」

突然なれなれしく私を呼ぶ声が聞こえた。振り向くと見覚えのある女の子が走ってくる。基本的に一人で動くときは全てのユーザーから見えるように設定している。声をかけられる事はあるけども、しつこく付きまとわれる事はほとんど無い。どうやら、彼らにはそういったある程度のルールがあるらしいのだけど、流石に謎の女性の行動に驚いたのかざわめきたっている。

「い、いくみ？」

言い終わるのが先か、彼女はあたしにとびついてくる。リアルであれば私の腰はあらぬ方向に曲げられ、激痛が走っていただろう。モーションを見るだけで痛い。

「あのね、悠真ちゃん……」と何かを話そうとしたときに、今度は知らぬ三人の男女が駆け寄ってきた。「おい、いくみ何やって……」そう言った少年のキャラクターが固まる。駆け寄ってきた

た他のキャラクターも同様にしておかたまってた。

「い、いくみ、その人と知り合いなの？」

「うん」

「お前、その人が誰か知ってるのか？」

「悠真ちゃんでしょ？」

さも当然のように返したいくみに他の三人が口々に「そんなに簡単な人じゃないんだよ！」「この人エデンの天皇みたいな人なんだから」「もう、むしろ神だよ！ 神！」と言っている……。そこまで崇められたら流石に恥ずかしい。

そんな言葉を受けて、いくみは「そうなの？」とあたしに聞いてきた。流石に「そうだよ」なんていうのは冗談にしても恥ずかしい。「そんなことは無いよ」と返すのが精一杯だった。

突然の出来事に啞然としていると、ドンドンと他のプレイヤー達も集まり始めていた。中にはいくみたちに罵詈雑言を浴びせてるプレイヤーもいる。悠真は短く嘆息すると「ルーム」に戻りいくみ達を招待した。

エデンには「ルーム」と呼ばれる施設があり、そのルームの持ち主が設定を自由に変更でき、部屋をロックすることでプライベートな空間を作ることが出来る。

ロックした部屋に入れるのはパスワードを知っているプレイヤーと招待されたプレイヤーのみであり、他の施設は特定の場所からしか移動できないが、ルームには何処からでも移動することが出来る。

「おおお、ここが悠真さんのマイルームか」

招待した一人、カズマがぐるぐるとあたりを見回すと、他の二人。若とTERAもならって物珍しそうに見ている。カズマはカジュアルな服装で髪も短く刈り上げ、アウトドアタイプの見た目をしている。若は黒一色のロングTシャツとパンツでメガネがいかにもといった感じのインテリア具合だ。TERAと言う名前の女性はライダースーツのようなピシッとした服を着こなし、さながら女怪盗といったところだろうか。

「ふう、やっと落ち着いた」

そう言って悠真はソファに思いきり寝そべった。目の前のアイドルの行動にいくみ以外の三人は驚きが隠せないようだった。

おおよそ一般のアイドルと同じようにエデンの悠真もほとんどプライベートは秘密であった。ブログや、E-Hereで断片的に知る事はあっても、あくまで表向き。当たり障りの無い部分しかなく、そこから得られるのは「何が好き」「何が嫌い」「何処へ行った」といった程度のものしかわからない。目の前で寝そべっているこのアイドルを見たプレイヤーはいないだろう。

「ところで、いくみ達は何をしてたの？」

悠真は顔だけ向けて聞くと、いくみではなくカズマが答えた。舞い上がってるのか性格なのか、前にぐいぐいとでたいタイプらしい。

「あ、いくみがまだエデン慣れないって言うから、エデンの遊園地でも行こうかと思ってたんすよ」

「そうなんだ。でも今日ってたしかフラッターランドはメンテナンスのはずよ？」

「そうなんすか？ 若、どうする？」

「そうだな。じゃあユグドラシルでもどうだろう」

「エデンも初心者なのにMMORPGは辛いわよ？」

「ふむ。一理ありますねテラは……」

ふと言葉がとまったのでTERAのほうを見ると一切のモーションがなくその場に固まっている。普通、ボイスチャットをしている時は喋らなくても何らかのモーションをつけるのが常識だ。頷いたり驚いたり、初心者であればない話でもないのだが、会話を聞く限りではTERAは初心者という感じはしない。「テラ？」といくみが問いかけたところでやっと返事が返ってきた。しかし、モーションはやはり止まったままである。

「シンプルメールが物凄い数来てて……」

そう言ったきりまた動かなくなったと思ったら、少しの間をおいてTERAは消えた。ログアウトしたのだ。

「ねえ、悠真ちゃん。シンプルメールって何？」

「え、いくみシンプルメールも知らないの？」

あたしと同様に二人も驚いたらしく、カズマがやれやれといった様子で説明を始める。シンプルメールは相手のメールアドレスがわからなくても、簡単なメッセージを送れるシステムだ。

「でも、物凄い数って何したんだろうな」

カズマが笑いながら話す。いくみはもとより若も「見当もつかないな」と首をかしげている。ただ一人悠真だけはその理由に予想がついていた。

「あたしと居るってどっかに書いたんじゃない？」

「そのとおり」

イタズラっぽく悠真が言うのとほぼ同時にTERAが部屋に居た。どうやら再ログインしてきたらしい。

「E-Hereで「悠真ルームに居る」って入れただけで十分の間に一二〇〇件のメールが来たわ」

E-Hereは今自分がエデンの何処に居るのかを写真と一言文で掲載していくサイトで、エデン利用者の殆どがそのサイトを利用している。自分の行きたい場所の情報が瞬時に入手できるE-Hereは使い勝手がよく、悠真のようにファンがついているプレイヤーの情報を欲しがめる人は多い。

「とりあえずシンプルメールを受け付けない設定にはしたけど、あらためて悠真さんの人気を見たわ」

「ありがと」

悠真はニコリと笑い一言だけ返した。お世辞じゃないのは声の感じを聞けばわかるが、照れくさい。

「それじゃあ、迷惑かけちゃったお詫びにどこか連れてってあげようか？」

照れ隠しでしかなかったと思う。先日いくみと会ったときもそうだが、そもそも他人にあまり関わりたくは無い。一人で居たほうが気楽なのに、また誰かと行動している。もしかしたら……

そんな考えを消すように軽く頭を横に振ると早速何処に行くかを話し始めた。

日曜日ということもあって、エデン内も人であふれかえっている。リアルに行楽地と違って設定次第で自分達しか客が居ない状況も作れるが、それはあくまでも目に見えないだけであって、多くの人間が利用していればそれだけサーバーにかかる負担も大きい。結局、その施設を利用で

きる人数というのは決まっている。その中で悠真たちが訪れたのはパニックホールというアトラクション施設だった。

パニックホールはホラーアトラクションで、お化け屋敷に迷路とトレジャーハントの要素が加わったものだ。プレイヤーはお化けやらゾンビやらが湧き出てくる迷路を、攻略しながら進み、ところどころにある謎を解くことで賞金を手にすることが出来る。

しかし、エデンゆえのあまりのリアリティと謎の難しさに、今ではチャレンジするプレイヤーが激減しており、なおかつ始めても恐怖のあまりにリタイアするプレイヤーが続出している。そのため、せっかくの休日にこんな場所へ来る人も少なく、あっさりプレイすることが出来た。

入り口で手続きを済ますと五人の目の前には大きな洋館が立っており、あたりは塀で囲まれている。いかにもといった雰囲気とBGMが恐怖心をあおる。

「さて、ホラーが苦手な人は手一あげて！」

悠真の言葉に上がった手は四本。悠真以外全員がホラーは苦手と申告したのだが「よし！大丈夫だね！」とまるで何も見なかったかのように歩みを進めた。

「なあ若、悠真さんてあんなキャラなの？」

「僕に聞くな。いくみのほうが詳しいだろう」

「んー、あたしも前に一度あっただけだし」

「でも、あぁいうキャラも素敵ね」

悠真よりちょっと離れて四人が喋っている。結局のところボイスチャットだから悠真には聞こえているのだが、そこは聞こえない振りをするのがマナー。悠真は先陣をきって扉を開けた。

ぎいぎいと古い木のきしむ音とともに扉が開くと、薄暗いメインホールにいくつもの扉と階段がある。ときたまキーキーと鳴くコウモりに、いちいち驚いているいくみたちに「どこ入りたい？」と笑顔で問いかけてくる。

「俺、今は悠真さんが悪魔に見えるよ」

「同感だな」

そうつぶやきながらまずは若が扉を決めるが、間髪いれず「あ、そこハズレだよ」とあっけらかんと言いつつ。カズマが選んだ扉も、いくみが選らんだ扉も、TERAが選んだ扉も全部ハズレらしい。

「いったいどれが正解なんすか！」

半ば切れ気味にカズマが言うと、悠真は顔をぐいっと近づけて「そんなんじゃダメよ？」とまるで子どもをあやすかのように言った。

「ここは謎解きも含めてのアトラクション。つまり、扉を選ぶことからこの謎解きは始まっているよ」

そう言ってつかつかと歩いていくと、ある扉の前で止まった。「ここが正解」と悠真は言うが、どう見ても他の扉と変わったところが見られない。疑問符だらけの顔を見てくすくすと笑いながら悠真が説明する。

「ここだけ、コウモリの鳴き声がしないでしょ？」

「え？ あ……本当だ！」

「パニックホールは正しい選択を選ぶ限り、プレイヤーを驚かしたり、怖がらせる事は一切無いの。だから、最初はこの扉が正解ってわけ」

いくみ達は得意げに説明する悠真を、ただ羨望のまなざしで見ることしか出来なかった。実は、あまり多くには知られていないが、このパニックホールはクリアした人が一人しかおらず、その一人が何を隠そう悠真だった。

一部の知ってる人間により噂が広まり、それが悠真の知名度を上げる要因の一つとなった。だが、それ以外にも悠真関連の話題が次々と出たために、パニックホールをクリアした人物が次

第にだれか不明になっていた。もちろん、いくみたちも知っているわけじゃない。

「さて、こっからが難しいの。実はパニックホールって入るたびに中身が変わってくから、一度クリアしても次もクリアできるかはわからないのよね」

そうって扉に手をかける。いくみたちはただ黙って見ていた。というよりもリアクションが取れなかったのだ。あまりにも次元が違いすぎるプレイヤーを目の当たりにしている。いわば生きた伝説と一緒に行動しているのだから無理も無い。



扉を開けた先はなにやら洞窟のようだった。そこを軽やかな足取りで悠真がすすんでいく。そんな悠真の服をつかみながらいくみがひょいひょいと着いてくる。そのいくみの服をカズマが、カズマの服を若が、若の服をTERAがそれぞれ掴みついていく。

「悠真さんは、ここをクリアしたんですか？」

「ここだけじゃなくて、エデンの中の施設で行ける所は全部行ったし、こういうアトラクションは全部クリアしたかな」

なんとも無い風と言う悠真であったが、日本だけで見ても人口のおよそ八割が利用しているエデン。もちろん、アトラクション施設だけではないが、それだけでも相当な数が存在する。

「あ、それから、同い年だから「さん」付けやめてね」

「!？」

いくみを除く三人が一様に同じリアクションを取った。今頃彼らの頭の中は何を考えているのだろうと思うと、笑いがこみ上げてくるが、反面、ずっと隠し続けてきたものを吐露してしまった自分に驚き、少しだけ辛くもある。

いくみは最初こそ驚きもしたが、さして気にする様子も無く、今日もごく自然にあたしに話しかけてきた。それがきっと彼女の性格なんだろう。だが、他の三人はどうだろう。きっと彼らは「普通に」ごくごく想定しうる反応と態度を取っていくのだろう。

自嘲をこめた笑いをしたところで、やっと一つ目の謎に行き当たった。謎を見た瞬間に答えが分かるけど他の四人が完全につまるまではヒントを出さない。それがコンダクターとしてつれてきている自分のルールだ。

いくみ達が謎でうんうん唸っている横で、楽しそうに見ている悠真にカズマが話しかける。やはりというべきだろうか。先ほどまでと違い、どこか言葉を選んでいるように見える。

「あの、悠真さん、さっき言ったのって本当ですか？」

「さっき？ 年齢のこと？」

わざとすっとぼけて見せたあとに「本当だよ」と答える。あたかもそれが当たり前であるかのように振舞うのが逃げ道だった。負い目なんて感じてないと思わせれば相手もそれ以上言及できなくなる。だが、帰ってきたのは予想もしない言葉だった。

「いいえ！ エデンのアトラクション全クリって話ですよ！ いやあ、俺も長いことやってますが、やっぱり悠真さんて違うんですねえ」

そっちの話かと内心突っ込みつつ、少し安心もする。その安心が何処から来ているのかはわからなかった。年齢について聞かれることなんて何度もあった。そのたびに適当に返してきたのだから、今更不安に思うことなんて何も無いはずだ。

自分の感覚に疑問を抱いていると、その間を勘違いしたのかカズマが少しだけ落ち着いた口調で話を始める。

「俺は、高校上がる前くらいからこのエデンに居ました。だから、多少なりマナーとかルールってのは心得てるつもりです」

ぱっと悠真をまっすぐに見て、軽く笑うと「むやみにリアルを持ち込まない」とだけ言うと、くると背を向け、うんうんと唸っている友人達の輪に加わった。

——リアルを持ち込まない。それは今の時代ではとても稀有な事と言っても過言ではなかった。インターネットが普及し始めたのが半世紀ほど前の話になる。そのころであれば個人情報は

じめとしたリアルの情報を出さないのが常識であった。

しかし、今、それらは無理と言っても過言では無い。あまりにも生活の中にネットが、エデンが浸透してしまっている。「遊ぶ」という点だけでなく、生活や仕事においてエデンが必要不可欠になっている。この状況でエデンを使わない人が居るなら、相当にアナログな人間だろう。

じゃあ、なぜカズマはそんなことを言ったのだろうか。それはひとえに彼が優しいからなのだろう。いくみとはまた違った意味で彼も悠真を受け入れた。リアルを持ち込まないのではなく、リアルについて詮索しない。それを遠まわしに言ったのだろう。

そう考えたときに、なんとも言えずこそばゆい感じが悠真の中にあった。悠真のプライベートを知りたがる人は相当な人数になるだろう。いや、誰だって人の秘密は知りたがるものだ。その中で相手の気持ちを察して、一歩引いてくれる。そんな優しさを持つ人はどれだけいるのだろうか。エデンが普及し、ネットが深く生活に浸透したとはいえ、結局はモニター越しのコミュニケーションなのだから、一線はいとも簡単に越えられる。

その優しさは本来当たり前のものなのかもしれない。でも、リアルでの人をさげ、英雄になってしまった悠真にはその優しさははるか遠くにあったものだった。

「悠真ちゃん！ わかんない！」

「ああ、これはね？」

ヒントを少しずつ出しながら先へ進んでいく。足取りは軽く心はとても穏やかだった。人と居ることが、人と何かをすることが、これほど楽しいとは思わなかった。

ようやくたどり着いた、ひときわ大きな扉の前で、誰に言うでもなく聞かせるでもなく、悠真は「ありがとう」とつぶやき扉を開いた。まぶしい光と大きな花火の音がアトラクションのクリアを告げる。

それは、確かに何かが動き始めた瞬間だった。

ポンと耳に軽い音が届いた。エデンの中でのメール受信を告げる音だ。とどいたメールはいくみからで、高校で居残り授業のために遅くなるという内容だった。

もう学年で言えば二年を終わろうとしている時期だ。受験を控えてる高校生が忙しくなるのも無理は無い。それでも出会ってから約一週間、毎日顔を合わせていると、少し寂しい気持ちにもなる。

あたしは暇つぶしにショッピングモールへ移動した。流行の服や、ちょっとおかしな服、ファンタジーチックな服もあれば、学校の制服なんかも売っていた。売っているのは知っていた。でも気に留めることはなかった。今更目に入るのは、誰のせいなんだろうか。

なんとなく、ショッピングモールをでて移動先に学校を選択した。昼間は授業を行っているが、もう放課後の時間だ。生徒はまばらだし学生以外が入っても咎められることは無い。

あたしは校内をぐるぐると歩き回った。前だったら校舎を外から見るだけで吐き気がしたのに、今はなんでだろう。少し胸が痛む程度で済む。

いくみにメールで学校に居ることを告げるとそのまま教室の椅子にぼんやり座った。窓からはオレンジ色の夕日が差し込んできている。それはとても綺麗で、綺麗過ぎて……

「あ、ごめんお待たせ！」

窓の外を眺めているといくみが教室に入ってきた。「しつっこい先生に捕まっちゃって」と言いながら隣に座る。その瞬間「あれ？」といくみは声を出した。

「いくみ？ どうかしたの？」

「あ、ううん。見覚えの無いメールが来たからびっくりしちゃって。本文も何も書いてないし、間違いだと思う」

そう言うといくみは気にしない様子で、学校であったことを話してくる。

もしここがエデンじゃなかったら、きっと私たちは仲のいい同級生に見えるんだろうな。いくみと出会ってからそう考えることが多い。それに「高校生ってこういうものなのかな」と考えることも多かった。毎日のように顔を合わせて、たわいも無いおしゃべりをして、遊びに行っ、また明日って別れて……くだらない事なのにすごく楽しい。

「悠真ちゃん？」

ぼんやりしてた悠真にいくみが問いかける。

「ごめん。ちょっとぼんやりしてた」

苦笑いのモーションを出してあやまると、悠真は立ち上がり「ちょっと歩かない？」と言って教室を出た。

人気の無い夕暮れの学校はそれだけで何か切ない感じにさせてくれる。そもそも夕日だけでもセンチメンタルなイメージがあるのに、人が少ないとなおさらだ。

二人はフロアを一周して次の階へ上る。次のフロアでも同じように一周して階段へ。途中で職員室や図書室などがあり、職員室には先生と思われるキャラクターが複数いる。給料も支払われているのだから驚きだ。

二人は最終的に屋上にでた。すこし風があるらしく、お互いの服がなびいているのが分かる。

きつと「リアルだったら気持ちいいんだろうなあ」

同じ事を悠真も言おうとした。その偶然に驚きいくみのほうを見るが、特に意に介した様子は無い。

「リアルで屋上行った事ないの？」

「うん。あたしの学校は立ち入り禁止だから……ほとんどそうなんじゃないかな？ だから屋上って結構あこがれてたんだよね。」

「あたしの学校もそうだったよ」

もともと、悠真の言う「学校」は中学校であり、通うはずだった高校がどうなってるかはわからない。

「小学校も中学校も屋上は入れなかったし、友達とお昼ご飯を屋上で食べるとか憧れてたのになあ」

「彼氏とは？」

「それも、あるかなあ」

恥ずかしそうに言ういくみを見て思わず笑ってしまう。それにつられていくみも笑う。いくみと出会ってから心のそこから笑えることが多くなった。愛想笑いじゃなくて、本当に楽しいから笑うって言うのをしばらく忘れていた気がする。いや、忘れていた。

本当に楽しかったことなんて、どれほどあつただろう。本当にあつただろうか。ずっとずっと、初めてログインしてきたときから自分は自分をごまかしていた。自分を優しく扱ってくれる世界と、そこに甘えていた自分。誰とも本音で話さない、宮元悠真という作られた存在。

自分だと思っていた。宮元悠真は自分だと。

忘れていた。宮元悠真は作られた存在だと。

「なんで、気付いちゃったかな」

思わずぼつりとつぶやいていた。無意識の言葉。それは果たして悠真の言葉なのか、それとも莉桜の言葉なのか。分からなかったけど、どっちでもよかった。あたしはその場にぺたんと座ると、ふうと息を吐き出した。キャラクターの笑顔には合わない嘆息にいくみは困惑を隠せないでいるようだった。

「だ、大丈夫？ 何かあったの？」

自分が笑えなかった理由、自分が本当に笑えた理由。その理由が分かってしまった。でも、思った以上に気持ちは軽かった。それはモニターの向こうでも心配そうな表情をしているであろう、この友達のおかげだった。

そのことを話したらいくみはどんな顔をするだろう。ふとそう思ったのをすぐにかき消す。そもそも言う必要もないだろうし、きっと「そうだったんだ」で彼女は受け止めてくれるだろう。そう信じられるだけで良い。信じられる人が居てくれただけで良い。

「あたしさ、スパゲティが好きなんだよね。それも、お母さんがつくったカルボナーラが絶品なの」

あたしの突然の言葉を驚くでも、疑問に思うでもなく、ただ相槌を打っていくみは聞いていた。話した事は別にたいした事じゃなく、単純に母親のカルボナーラが好きだってことと、もうしばらく食べた記憶が無いって言うこと。いや、本当は食べてるのかもしれない。

「エデンで食べたものは覚えているのに、リアルで食べたものが全く記憶に無いなんて変だよね。あたしにとっての食事はエデンで楽しむものだったの。リアルで食べるものは単なる燃料の補給。口に入って栄養があればそれで良かったの」

一呼吸おいて「おかしいよね？」と自嘲気味に話す。あたしのアバターは笑顔だけでも、いくみのアバターは今にも泣きそうな表情をしている。だが、そんな事はお構いなしにあたしの口は動き続けた。自分でも何を言っているのか、どこに行き着くのかわからなかった。それでも言葉は次から次へとあふれてくる。

「いくみと出会う前の日にね、あたし雑誌のインタビューを受けてたんだ。その人『みんな笑ってるけど、本当は笑ってないんじゃないか』って言われちゃった」

「そんなこと……」

「そんなことない！ って言えればよかったんだけど、あたしは笑ってなかった。ううん。もっと前からあたしは笑えなくなってたの。エデンっていう作り物の世界で、悠真っていう存在も作り物で、その中で楽しいと思ったってそれも作り物でしょ？」

でも、あたしにはエデンが必要だった。エデンはあたしを生かしてくれた。いじめられて、ひきこもりのあたしに生きる世界をくれた。だから、どうしても離れられなくて、適当に歩いてたらいくみに会ったわ。いくみに会って、カズマ、若、TERAに会って……あたしはいつの間にか笑ってた」

そう言いながらあたしは泣いていた。自分でも気付かないうちに目からは涙がこぼれ、嗚咽が入り混じる。なんでこんなことを話したんだろう。話す必要なんてないはずなのに。

笑顔のまま悠真は泣いていた。もう言葉は無い。ただ、ずっと身体の中にたまっていた何かが涙となって外に出て行くのがわかる。

そんなあたしをいくみは強く抱きしめた。肌に触れる感覚は一切無い。そんな事はわかっているけど、その行為が、なによりも暖かかった。

「悠真ちゃん、辞めちゃっても良いんだよ？」

静かに、穏やかな口調で、まるで母親が子どもに言い聞かせるようにいくみは話す。

「わたしは、悠真ちゃんに会えて本当に良かった。ほんの少し前に会ったばかりなのに、もうずっと前から一緒に居るみたいだったよ。だから、悠真ちゃんがエデンを辞めても、あたし、悠真ちゃん探すから」

一呼吸置いて、悠真の顔をしっかりと見つめる。

「リアルでも、あたしは悠真ちゃんの友達だから！」

「あり、がと。や、約束だからね。あたし達って、ホントは結構近くに居るんだから」

最後は嗚咽で伝わらなかったかもしれない。あたしだけが知っていた事実は、いくみに聞こえていたのだろうか。

※

気付いたらあたしはマイルームに居た。あれからどうやってここに来たか覚えてないし、いくみも傍には居なかった。酷く、頭だけが痛い。どうやら外を見るともう夕方らしい。

ふと、メールの着信を知らせるアイコンが視界の左で光っていた。毎日のことだから驚く事は無いが、今日だけはその様子が違っていた。

いつも朝来る、いくみからのおはようメール。メールマガジンが十二通。ダイレクトメールがおよそ四十通。その他、ちょっとした仕事のメールがパラパラと。多くても七十通程度のものであったから、悠真はわが目を疑った。一〇八七通の新着メールの着信。流石に夕方といっても一日にそれほど多くのメールは来ない。

そして、その新着メールの数はどんどんとその件数を増やしている。悠真のメーラーは許可しているアドレス以外からのアドレスは基本的に受け付けない設定になっている。なのに新着メールの数が膨大なのは、許可しているアドレスから大量に送られているか、メーラーの設定を無視して送れるメールかのどちらかだ。

少し戸惑いながらも開いてみると、運営からの広告メールばかりで、その多くが「あなただけに！」や「悠真様のために！」といったあおりで、限定アイテムのプレゼントなどをうたっている。あたしは多くのメールの中からいくみのメールを探そうとしたが、次から次へと届くダイレクトメールがそれを邪魔してく。

仕方なしにメールをさがすのを諦め、一端街へと出ることにした。メールの着信を『知らせない』に設定し街に出る。とにかく一人になって落ち着いたかったが、部屋の中はどうにも居心地が悪かった。

自分の姿をいくみ以外に見せない設定にしたあとに、ベンチに腰をかける。メインストリートにいればいくみがログインすればわかるはずだ。

ふうと軽く息を吐く。だが、落ち着いたのもつかの間、本来聞こえないはずの誰かの声が聞こえてくる。

「おい、あれ、悠真じゃねえか!？」

「ほ、ほんとだ」

声の方向を振り向くと若い男性が二人こっちに向かって走ってきている。若い二人だけではない。気付けばあちこちから悠真の元にプレイヤーが走ってくる。

すかさず設定を確認するが、やはり自分の姿をみることはいくみだけに設定されているし、自分も他のプレイヤーの姿は見えない設定になっている。じゃあどうして……その答えが出る前にメインストリートは人でごったがえしていた。気付けば元からストリートに居た人も徐々にその姿が見えてくる。

何がおきているのか理解できず、とりあえずマイルームに戻ろうとするが、視界に現れたのは見慣れた部屋ではなく『その行動は実行できません』という文字。

ゾワッと背中に悪寒が走った。なんてことは無いエラーメッセージのはずなのに、なにか異様な『意思』のようなものを感じてしまう。いくみを取り囲んでいるほかのユーザーのせいもあるかもしれない。



## 第8章 解放：04

---

とりあえず、現状を把握しようと周りのユーザーのボイスチャットに集中すると、口々に「エデンやめるって本当ですか?」「やめないでください!」「エデンを裏切るのか!」と、疑問、懇願、怒り。様々な感情が入り混じった言葉であふれていた。しかし、何よりも疑問は悠真がやめるという噂の出所である。

自分が言った覚えはまるでないし、いくみが誰かに言うとも思えない。それに昨日の今日でそれほど噂は広まるものだろうか。とくに、いくみはあたしとカズマ達しかエデンでの知り合いは居ないはず。

「ゆ、うま、ちゃん!」

必死に考えていると、人の波をかきわけていくみが近くまで来た。しかし、悠真が何かを言う前に大量の罵声のボイスチャットが言葉をさえぎる。

「こいつ、いくみだ!」「こいつのせいで悠真が辞めるのか」「消えろ! 疫病神!」次々と聞こえる言葉が悠真に一つの仮説を立てさせた。

「いくみ! ログアウトして! リアルで、べいふ……」

力いっぱい叫んだ声は届いただろうか。それともその場に留まる苦痛が彼女には耐えられなかったのだろうか。いくみは悠真の視界から消えていった。

ふうっと息を吐いてから改めて周りのプレイヤーを見る。その人数は数えるレベルを超えていた。メインストリートのはるか彼方まで人の波が出来上がっている。この状態でいくみが来れたことすら奇跡だろう。恐らく、悠真のところにとどり着くまでも罵詈雑言を浴びせられたに違いない。それも、自分が全く意図しないことでだ。

悠真は昨日のことを思い出した。いくみは確か「見覚えの無いメールが来た」と言っていたはず。もしそこにウィルスが紛れ込んでいたら……会話のログを他のプレイヤーに送ってしまうようなウィルスが。

いや、ウィルスなんて必要じゃないのかもしれない。悠真は少なからず自身を与える影響について理解しているつもりだ。自分が買った商品が次の日にはランキングの一位になっていることや、訪れた観光地が観光客で一杯になることを知っている。それであれば、悠真を辞めさせようとするいくみは管理者にとっては邪魔な存在だ。だから、何らかの手段を使っていくみを悪者にしたてあげた。

管理者が何かをしたと仮定すれば、システムを逸脱した状況も納得がいく。悠真をやめさせないように、魅力のあるアイテムを出し、多くのファンを悠真に認識させることによって、悠真をやめさせない算段なのだろう。

悠真が推測しているあいだもファンの声はやむ事は無かった。だが、さっきまで恐怖を感じていたその光景はもはや滑稽なものでしかなかった。自分の推測が正しいかどうかはわからないが、自分はそれで納得した。

「あはははははははははははは!」

突然の悠真の笑いにまわりのざわめきがピタッと止まった。遠くのほうでは、他のユーザーが喋らないことを疑問に思っているだろう。だが、もうどうでもいい。

「みなさん、今日はあつまってくれてありがとう! 今日はみなさんにサプライズを届けようと思ってこのイベントを企画したんです」

嘘。それは間違いないがそれを知るプレイヤーは残念ながら存在しない。みな、悠真のことは

をじっくりと聴いている。誰も話さないおかげでメインストリートに居る人全てに声が伝わる。

「悠真は、今日でエデンを辞めます！」

そう言ってウィンクのモーションを出す。星がキラッと現れた後に悠真はログアウトを選択した。しかし、目の前に現れたのは予想通りの『その行動は実行できません』の文字。

「だろうね」とつぶやいて、悠真、いや、莉桜はヘッドマウントディスプレイを取ると全てのコードを引き抜いた。ブツンと電気が突然通わなくなった音を立てた後は、静寂さがあたりを支配していた。ぽつんと突っ立っていると、あまりにも静か過ぎるので自分の耳がおかしくなったんじゃないかと疑い、手を叩いてみる。音は聞こえているらしい。

自分がさっきまで座っていた椅子に再び腰をかけると、ぼんやり窓の外を見た。画素数が落ちた夕日がどうしようもなく綺麗だった。

押山side

ディスプレイを走るその文字を、最初押山は文字として認識できなかった。何か直線と曲線の複合体が入り混じったものが並んでいる。それが言葉であることすら、理解に時間がかかった。

「悠真がエデンをやめるらしいぞ」

エデンはその話で染まっていた。広場にたむろする有象無象、誰も彼も、老若男女がそろってその話題ひとつについて囁きあっていた。

その衝撃から立ち直る暇もなく、広場で棒立ちになっていたハルトの周りに、見知った顔が姿を見せる。

「ハルトさんチース。祭りだー！」

「はろはろー。なんかすごいことになってるねー。約一名俺の隣の人とか俺の隣の人とか俺の隣の人とか」

どこかワクワクしたようなジンに対してロキは醒めた表情を返す。

「ちょ、ロキさんひでえよ」

「ジン君はいつでも頭の中お花畑だもんねー。ジン君と一緒にエデンもおしまいかもねー」

「悠真や俺がいなくなったってエデンは変わらないって。アレだ。まだだ、まだいける。ってやつだよ」

その輪に、悠真というアイドルを通じて知り合ったクワバラが加わる。

「噂は噂でしょう。またどっかのアンチの仕業だと思いますけど」

「あ、クワさんだー。明日はお仕事お休み？」

「クワさんも悠真で仕事どころじゃないって？」

「お休みですねー。私よりジン君ちゃんと寝てるんですか？」

「学校で少々」

ジンの言葉にその場にいた全員が苦笑いの表情を浮かべる。

「運営側でもないし、一身上の都合って事らしいし、今回はマジ話じゃないの。何せそこらじゅうでその話ばかりなんだもん」

「でもわざわざやめる理由ってなによ？ あ、みんなこんばんはでーす」

クワバラに誘われたのか、十六夜とミレニウムがログインしてくる。偶然にも、これでいつも集まっているメンバーが全員顔をそろえたことになる。このメンバーが揃えば出る話題は悠真以外無いのが通例だが、今はそれに輪をかけて悠真の引退説がメンバーの話題の中心になるのは必至だった。

「わたし普通の女の子に戻ります！ ってね。で、ヘッドセットを床に置くの。ね？ 知らない？ 知らない、そう。今の若い子は知らないんだ。嗚呼昭和は遠くになりなけり、ってね」

「昭和って。っていうかジンさんってリアルは私より年下じゃん」

十六夜のその言葉にジンが怒りのマークを表す。が、すぐさまその顔ははてなマークの浮かんだ顔に変わる。

「リアルの話はするな！ 悠真ちゃんもリアルが忙しくなったってことなのかしら？」

「受験生ってこの時期忙しいって言うよね。で、君はそろそろ落ちなくて良いの？」

「落ちるって言うな！ いや俺は良いんですよ俺は。今は悠真のほうが重要でしょう」

「ジン君の人生捨てっぷりはいつみても惚れ惚れするね」

「俺に惚れると怪我するぜ」

「あ、それは俺も聞いたことあるかも」

ロキと十六夜がジンの相手をしているすぐ隣で、クワバラとミレニウムが悠真についての会話を続ける。エデンではいたって普通の光景だ。

「でも実際誰も「やめる」って聞いたわけじゃないんでしょう？ だとしたらやっぱりデマだと私は思いますけどね」

「そもそも一億総エデン状態の今、エデンから出て行く意味なんて無いでしょ。生活できなくなっちゃうよ？」

「ハイハイ廃人は黙っててもらえますか。って、そうか、悠真も廃人なんだよね」

そんなミレニアムのつぶやきにまたジンが過剰に反応する。

「悠真を馬鹿にする奴は俺が出て行ってうんぬんかんぬん」

「ごめん、やっぱジン君って十代には思えないわ。本当は平成生まれなんでしょ」

「ばーれーたーかー。しかし俺を倒しても第二第三のジンが……」

「ジンふたりもいらねーし！」

「うわーんロキがいじめるよう」

「ロキさん、老い先短いオジサンをいじめちゃダメですよ」

「うわーん十六夜さんがいじめるよう」

「あれこの流れ俺もいじめておくべき？」

「許可します」

ミレニアムの問いかけにクワバラが決断を下す。それを聞いたジンは、頭の上に「ガーン」というエフェクトを自ら落とした。

「クワさんまで……ちくしょー受験失敗したら呪ってやる！ 祝ってやる！ 嗚呼俺の味方はハルトさんだけだよ」

次々と交わされる会話に混ざることもしないハルトの様子にクワバラが気づいた。

「ハルト君は僕らの中でも一番悠真さんのファンだもんねえ。やっぱりショック？ 私もショックだけども、でもさっきもミレニアムさんが言ってたけど噂の域を出ないからそこまで心配することはないと思うよ……ハルト君？ あれ？ おーいおいてばハルトくーん？ ああ、ダメだ、ハルト君の魂が抜けちゃってるよコリヤ」

クワバラの問いかけに答えることもせず、押山はただディスプレイを眺め続けていた。

押山には理解できなかった。エデンイコール悠真という構図は、押山だけの勝手なイメージではないだろう。運営側も悠真に対してはかなりの優遇をしている。アイドルである悠真の行動そのものが、エデンにとっては広告と同じなのだ。悠真の行動こそがエデンなのだといっても過言ではない。

その悠真がエデンをやめるなんてことは考えられないことだった。やめてどうするというのか？ 今やエデンは実生活と密接に関わりを持っている。特に悠真は一日の大部分をエデンで過ごしていたはずだ。

エデンの無い生活など、今の押山には想像もつかなかった。

「噂は噂さ」

「噂は噂さ」

押山は、自分でつぶやいたはずのその言葉を、ハルトがどこかうそくさい口調で繰り返すのを耳にして、不安を拭い去ることが出来なかった。

※

数日後、悠真のIDが消えた。

エデン内のニュース速報を知らせるアラームで目を覚ました押山は、すぐさま再ログインして事実を確かめようとする。悠真のブログにアクセスしてみるが、すでに悠真がエデンをやめたあの瞬間から更新はなされていない。今までなら毎日頻繁に更新されていたというのに。

ニュースサイトはこぞって悠真消滅の記事を書きたてているが、そのどこにも「なぜ悠真がエデンを去ったのか」という事実を突き止めているものはいなかった。

現実世界にいる悠真のユーザーを見つけよう、と意気込む有志の姿を横目にメインストリートに戻ったハルトは、しかしやるべきことを見つけることが出来ずに、ただ呆然と立ち尽くして

いた。

「どうすればいいんだろう」

押山の口の中だけでつぶやかれたその言葉は、つい先日買ったばかりの最新式のヘッドマウントディスプレイですら拾うことは出来なかった。

高清水side

押山が退職してすでに数日が立とうとしていた。押山のいた机はすでに片付けられており、今は無造作に書類の山が置かれているだけだった。

押山が退職届を出したという話よりも、それを聞いて、さして衝撃を受けてない自分自身に冴子は驚いていた。沸いてきた感情は怒りと苛立ち。どちらも仕事を放り出した部下に対して抱くような感情だった。

「なるべくしてなった、って感じですか？」

一気に増えた仕事量への不満をぶつけてくるように、しかしどこかからかいを含んでいるかのような飯田のアバターを横目に、冴子は押山の抜けた穴を埋めるべくさまざまな部署へ働きかけをしている最中だった。

ここ数日、自宅でも会社でもひたすらディスプレイに向かっているような気がする。それは役割の再配分などであったり企画書に目を通す作業だったり、仕事にエデンをフル活用するという冴子の元々のスタイルだったが、どこか違和感を覚えずにはいられなかった。それがハルトとエデンで過ごしたデートという余暇が存在しない落差だということに冴子本人は意識的に気が付かないふりをしていた。

「やめたってしか聞いてないですけど、もう別れたんですよね？ さすがに。まさか高清水さんが押山先輩を養うってのは……あー結構リアルかも」

「バカ言っていないで仕事したら？ WCQさん所との合同プロジェクト、まだ草案ももらっていないわよ」

「押山さんが途中で投げ出すからですよそれ。突然ハイコレお願いねって言われても相手の顔も知らないんですから私。もうしっちゃんかめっちゃんですよ。元彼女なら責任とってくださいよ 責任ー横暴だー訴えてやるーストライキだーアイス食べたいーお休み欲しいーお家帰るー」

「ハイハイ怒られないうちに帰りましょうねー。じゃあ俺はこれから桑原建設さん所へ見積もりとネクススさん所に発注具合の確認行きます」

大仰にわめくポーズをとる飯田のアバターを、上田のアバターが連れてディスプレイの外へと消えていく。

「わざとらしい女」

有能だが、気を許すことが出来そうも無い性悪猫というのが飯田への印象だ。常に余力を残しているような態度は、特に今の冴子には鼻についた。しかし、ああいったタイプの方がきっと男が寄って来るのだろう。それが彼女の計算のうちだとも知らずに。

ため息も多くなった気がする。愚痴もそうだ。今では周りの誰も冴子のため息を気にしなくなった。

押山がいなくなったからといって仕事が立ち行かなくなるほど会社は押山に依存してない。しかし冴子の抱えるプロジェクトの多くには押山が参加しており、なおかつ彼はプロジェクトの基盤となる部分に存在していた。

いくつかの企画は押山の下に着いていた上田や、自分自身が引継ぎをすることで滞りなく進んでいるが、結果としてひとつふたつの企画は大幅な見直しを余儀なくされた。

社会的常識や責任の欠如をどうこう言っても変わらない。事実として押山は会社に来ておらず

、やりかけのデータだけが目の前に積み重なっている。それを裁ききらないことには身動きが取れない。このまま行けば自分の立場だって危ない。押山にかまっている暇など、今の冴子には少しもなかった。

今は仕事に没頭している冴子だが、もし仕事も無く身軽だったとしても、押山の家に行くことはもう無いと時自分自身心のどこかで思っていた。

自分のメールが押山に届くことは無い。あの日以来IDは拒否されたままだ。退職届が出されると聞いた直後は、一度だけ自宅のドアを叩いてみたが出てくる気配は感じられなかった。インターフォンのカメラ越しに交わした言葉はひとつだけ。

「説明して欲しい」。しかしそれすらろくな返答ももらえずじまいだった。時折思い出したかのように来る探偵からの報告では「デリバリーサービスの店員は見かけるようになったが、外出している様子もあまり見られないし、訪ねてきた女性といえはあなた一人だけです」などという冴子本人ですらわかっているような内容にとどまっていた。

自分が依頼したにもかかわらず、探偵の報告を聞き流している理由は忙しさだけではなかった。冴子が押山に対しての興味を失っていることの証明であることは明白だった。



高清水side

悠真がエデンをやめたということは冴子にとっても意外だった。しかし冴子には別の世界のことと同じだった。元々冴子はエデンで生活するのではなく、仕事を円滑に進めるためのガジェットのひとつとしてしか見ていない。悠真が消えてからの数日間はエデンのサーバーがつながり難くなった程度で、それも冴子の活動時間外の出来事だった。

未だエデンでは悠真の影響力は根強いものらしく、一部の熱狂的なファンによる悠真の痕跡を残すといった運動はよく見られていた。

しかし情報過密のネット世界は流行り廃りのサイクルも速いらしく、すでにエデンでは「第二の悠真を発掘」といったイベントが政府主体のものから個人主催のものまで、数え切れないほど開催されているようだった。だが冴子の聞く限りでは、現在に至るまで第二の悠真が産まれたという話はなかった。

エデンへログインし、そうした悠真の影を見るたび、冴子はふと押山のことを思い出す。彼は今もエデンにいるのだろうか？ 悠真のいなくなったエデンに。

あえて探そうとは思わない。冴子にとって押山はすでに過去の人物の中の一人でしかなかった。会社でも、もう誰も押山のことを口にしない。押山のかかわっていたプロジェクトのほぼ全てが完了したという理由と、押山のいた位置には上田や他の社員が繰上げされ、今のところ問題なく業務がなされているから、というのが理由だった。

今の冴子は目下、上田の教育に力を注いでいる。業務中は言うに及ばず、プロジェクトが終わった後のしばらくは、慰労をかねた夕食を幾度も重ね上田の労をねぎらった。その席には何故かちゃっかり飯田が付随してくるのは何か納得のいかないものもあったが、今回の騒動で会社外へ向けてさまざまな働きかけのフォローをして、冴子の役に立ったのは意外にもこの飯田だったので無碍にするわけにも行かなかった。そして飯田本人は「友達が多いですから」といい、次いで「プロジェクトの立ち上げとかは全然わかりませんよ。でも接待とかなら任せてください。あ、勿論味のしないエデンじゃなくて現実で、ですよ？」と茶化するのだった。

そうした、押山のいない生活にも慣れた頃、一本の電話が冴子の元にかかってきた。見知らぬ番号に首をひねりながら受話器を取った冴子は、聞きなれない探偵事務所という単語にさらに首をひねったが相手の「押山」という言葉に、ようやくその趣旨を思い出した。

それは、押山に対する調査期間完了を告げる電話だった。

探偵に依頼をしていたことすら忘れていた冴子は、それをおくびにも出さずに、探偵の言葉をさえぎった。

「すいません、その件なんですけど。それ、もういいんです。依頼も打ち切ってもらおうと思っていたところなんです」

冴子の端的な言葉に、さすがの探偵も困惑の色を隠さない口調で返事を返す。

「は？ ああはい。そうですか」

「ええ、わざわざすいません」

「いえ、依頼者の意思を尊重するのも我々探偵の仕事ですから。それで、調査した内容のご報告に関してですが、後日書面でお送りいたしますが、近いうちにこちらに来ていただければ詳細な報告を……」

「それなんですけど」

アバターが、約束の時間が迫っていることを告げる。もうタクシーもマンションの近くまで来ている頃だろう。今日は飯田は何か用事で来れないらしく、久々に上田と二人きりでの食事になる予定だった。

「報告は結構です。何かこちらの手違いだったらしくって。ご面倒をかけてすいませんけど、そちらで処分しておいていただけないでしょうか。勿論お金は支払いますので」

「処分、ですか？ 依頼料さえいただければこちらとしては一向に構いませんが……」

「ええ、すいませんがお願いします。では、すいませんがこの後用事がありますので……」

受話器を置くと同時にアバターがタクシーの到着を告げる。

パソコンの電源を落としながら、冴子は思った。もう一度くらいはあの夕日を見に行ってもいいかな、と。

押山side

エデンにログインした押山が最初にすることは、大量に着ているメールの選別だった。会社を辞めた押山はその有り余る時間の全てをエデンに費やしていた。もっと正確に言うなら、エデンのアイドルへと費やしていた。

悠真のいなくなったエデンは、まるで作られた偽物のようだった。精巧に再現された風景も、目の前を通り過ぎるアバターも、その全てが触れることの出来ない虚像だということに、押山は気づいていた。

しかしそれを認める気分にはなれなかった。せっかく見つけた楽園がまるで砂漠の蜃気楼だったと思いたくないのは誰だって同じのはずだ。

色あせたエデンを眺めながら押山は、悠真のことを考える。今でもその記憶だけは色あせることがなく色鮮やかに蘇る。エデン内に残されていた悠真の映像データを眺めるのは押山の日課だった。

「こいつはダメだな。アバターに品がない」

メールをチェックしながら押山がつぶやく。今行っているのは、エデン内でかなりの人気を誇る政府主体の企画「セカンドエンジェル」。いわば第二の悠真を育てる企画だった。

最初は個人主催のそれに追従する形で始まった小さな企画だったが、押山がファンとして意見を送っているうちに運営の目に留まったらしく、今押山はセカンドエンジェル運営の一翼を担うほどになっていた。

特に審査員となったハルトの選定眼は厳しいと評判らしく、三次合格まで行ける者は数が少なかった。その代わりに、合格ラインに達したアバターのエデン内での優遇は約束されたようなもので、応募者は後を絶たなかった。

「エルさん、どう思うこいつ？ 僕的には無しなんだけど、でも今回他にいいのがないんだよね」

「おお、あのハルトさんもとうとう日和りましたか？ でもまあ、前回今回とかなり不作ですよ、ホント」

「セカエン以外でも悠真企画はあちこちでやってますからね。ハルトさん以上に厳しい人もいないけど」

「まだ悠真に遠く及びませんよ、こいつらじゃ」

「まったく。そこらの悠真企画で出てくる偽アイドルの酷いこと酷いこと。こっちだったら一次で即ハルトさんにバツサリ。って子が多すぎるんですよ」

「別に僕が特別厳しいつもりはないんですけどね。でも、悠真を選ぶわけですから。審査員のレベルが低すぎなんですよ、特にJrTEENとかあそこら辺のティーンズファッション系ですか？ そこらで拾ってきたような有象無象のアバターに低俗な書き込み。全然ダメでしょう」

「厳しい、手厳しいなあハルト君は。」

「あ、でもこの子なんて結構いいんじゃないですか。えーと、わ。まだエデン初めて三日ですって。アバターは友達からもらったアイテムを組み合わせたって言うけど、これ友達のセンスがいいんですかね？」

「おーすごいッスねこれは。最近見ないタイプじゃないの？」

「確かに。でもこれ最初期の悠真のデザインと似てますよ。でもパクリじゃないな、オリジナルでこれが出るなら……拾い物かも知れませんね」

「じゃあ、ハルトのお墨付きも出たって事で、今回はこいつでいいですか？」

「ちょっと、ホントやめてくださいよ。僕なんてまだ一審査員でしかないんだから。ホントにもう」

「何言ってるんですか。ハルト君以外の審査員なんて、みんな誰も名前知らないって。あ、ねえ君誰？」

「えー。そちらこそ誰ッスかー」

「ハルトはわかるんだけどー、あれ、俺って誰だっけ？」

「それはない」

「それはない」

「皆さん実は僕のことバカにしてるでしょ？」

「それはない」

「それはない」

「それはない」

「やっぱり馬鹿にしてるじゃないですか……」

「だってねえ、ハルト君ほど悠真に精通してる子は周りにいないからさあ」

「そうそう、どうしてもハルト頼みになっちゃうんだよねー」

「もう、やめてくださいよ。別に、そんなことはないですよ……」

密閉式のヘッドマウントディスプレイをして、笑みを浮かべている押山の部屋に、デリバリーのピザの到着をつげるインターホンが鳴り続けていた。

ずっと居た場所を懐かしいと思うのはおかしいのだろうけども、そう思わずには居られなかった。谷原莉桜の部屋にあたしは居た。散らかった部屋にホコリのかぶったタンス。ハンガーには一度も登校していない高校の制服がかかっている。

イスから立ち上がり身体をひねると、バキバキと骨の鳴る音がする。当たり前だけどエデンには無かった動きと音。それがなんだか新鮮すぎて笑いすら漏れてくる。

莉桜はドアを開けると階段を下りた。この行為は幾度と無くしているが、ヘッドマウントディスプレイをつけた状態でというのが先に付く。ディスプレイをはさまずに自分の目でしっかりと見た階段は、思ったよりも急で怖かった。

一段ずつ階段を下りて居間の前に行く。扉越しに夕日が差し込み、ほのかに莉桜の身体を温める。今日が何曜日だったかは覚えてないが、お母さんは専業主婦だったはずだから居間には居るだろう。

莉桜は軽く深呼吸をした後、意を決して居間のドアを開けた。お母さんはソファでうたた寝をしていたようで、最初はお父さんが帰ってきたと思ったんだろう。「おかえりなさい」と言い掛けてその言葉はとまった。同時に目を大きく開いたかと思うとその目からは次々に涙が零れ落ちていった。

「り、りお？」

半分は嗚咽で聞こえなかったが、確かにあたしの名前を言って母親は駆け寄ってきた。苦しいくらいにあたしを抱きしめてきた。久しぶりに感じるお母さんの声と体温はすごく安心する。

あたしはいろいろ言いたいことがあった。でも、何を言えばいいのか分からない。ただいま？  
久しぶり？ ごめんなさい？

「ねえ、お母さん」

「ん？ なに？」

「カルボナーラ食べたい」

※

親と一緒に風呂に入るなんてずいぶんと久しぶりだった。エデン云々の前からあたしは一人でお風呂に入っていたし、エデンを始めてからは親が寝てからシャワーを浴びていた。お母さんはあたしの髪を洗いながら「思ったより綺麗にしてたのね」とつぶやいていた。あたしは「うん」とだけ返して黙っていた。ゆっくりと何年かぶりの湯船につかると、身体の芯からあったまる。シャワーじゃ味わえない感覚に思わず息が漏れるとお母さんは笑っていた。

お風呂から上がるとお母さんはご飯の準備を始めた。私も手伝おうかとは思ったけども「簡単だから」と言って私を台所から追い出すとジュースとお菓子を出してくれた。物を味わうというのがずいぶんと久しぶりな私の舌には、とても甘く感じられた。

六時を回ったところで居間の扉が開いた。意気揚々と居間に入ってきたお父さんは私の顔を見るなり、手に持っていた紙袋をぼとんと落とした。

「り、りお？」

「それ、お母さんと一緒にリアクションだよ」

と言うとお母さんは横でケラケラ笑っている。お父さんはどうにも状況が理解できていないようだったけど、お母さんに釣られて笑っている。きっとコレが普通なんだろうな。あっけない。といえばあっけないだろうか。両親は何事も無くあたしを受け入れた。それは、久しぶりに会った親子ではなく、普通どおりの、普段どおりの親子の姿だったと思う。

ご飯を食べてひと段落つけると、私は無性に外に出たくなった。ヘッドマウントディスプレイをつけない家の中がこれほど新鮮なら外はどれだけの驚きに満ち溢れているだろう。さすがに夜の一人歩きは両親が許さなかった。それに、落ち着いてみると身体は少しだるい。それまでずっと運動していなかったせいだろうか。疲労感がある。

その日は母親と同じ布団で眠ることにした。部屋に行けば寝床はあるが、派手に散らかったコードを見る気にはなれなかった。

次の日、母親はすでに起きているようで隣には居なかった。ゆっくりと居間に行くと母親が食事の用意をして待っていた。焼き立てとは程遠いトーストを食べていると、母親が高校の制服を持ってきた。結構な間部屋に閉じこもっていたせいもあって、まともなものは制服しかないらしい。

「まだ寒いから」とお母さんがスプリングコートを貸してくれた。エデンでつい先日発売されたものと同じデザインだった。お母さんが着るために買ったとは思えない。恐らくは、あたしのために買っていたのだろう。春も、夏も、秋も、冬も、いつか着るであろう娘のために買っていてくれたのだろう。すこしきつめのローファーを履くと莉桜は外の世界へ飛び出した

外に出る前に曜日を確認する。日曜日、休日に朝から制服を着てるなんておかしいだろうか。確かに、散歩に行くのに制服を着る人は少ないかもしれない。それでも、久しぶりの世界と、初めて制服の新鮮さがなんともいえない気分させる。

十一時を過ぎると太陽もかなり高くなっている。久しぶりの直射日光は気持ちいいけど暑くてたまらない。今からこの調子では、夏には倒れて動けないかもしれない。

そんな下らない事を考えている自分にあきれて笑ってしまうと同時に、驚きもする。すごく自然にあたしはこの世界に溶け込んでいた。数年前まで過ごしてたのだから当たり前かもしれないけども、自分が莉桜として自然に過ごしていることが、どうも不思議で仕方が無い。

その理由を考える前に目的地へ着いた。どうせ時間はあるのだからゆっくり考えることにし、莉桜は目の前の喫茶店へ入っていった。

いわゆるカフェテリアなんかとは違って、少し薄暗い店内にジャズの曲がかかっている。骨董品のレコードプレイヤーの音はどこかノスタルジックな気持ちにさせる。

莉桜は入り口から少し離れた場所に座るとケーキセットを頼んだ。近くの本棚から日焼けした表紙の小説を適当に取る。流通しているほとんどが電子書籍だから、しっかりした本を手取ることは相当に久しぶりだ。学校の授業でも、お父さんたちの時代は「教科書」があったらしいけども、あたし達はパソコンのデータを見ながら授業を受けていた。

ものめずらしげに本を眺めていると、ケーキとコーヒーが運ばれてきた。ウェイターの胸には「犬飼」という名札がつけられている。短い黒髪をオールバック気味に立たせた店員は、見た感じあたしとそれほど変わらない歳に見える。

ケーキとコーヒーの味と香りを堪能していると、カランコロンと入り口のベルが鳴った。乾いた音は甲高いわけでもなく、耳に心地いい。

入ってきたのはあまり場所に似つかわしくない二人組の男たちだった。片方はこんがりと焼かれた肌に金色の長い髪。もう一人は髪の色がオレンジというだけで、それ以外に二人を分けるさしたる特徴は無い。

「RPGの雑魚キャラみたい」

聞こえたのか、カウンターで店員は背中を見せて肩を震わせている。

目の前の男たちはまるで意に介さない様子で、あたしのほうに近寄ってきた。声が聞こえてなかったか、自分たちのことじゃ無いと思っているか。どちらにせよ、あまり関わりたくない人物が目の前に居ることは事実だった。二人ともあたしに許可を取ることなく、向かい合う形で席に座りニヤニヤしている。

「ねえ、俺たちと遊びに行かない？」

瞬間、頭には「やっぱり」という言葉が浮かんできた。十二分に予想されることだったし、別に驚くことも無い。だから返答するのも簡単だった。

「すみません。人を待ってるんです」

「えー彼氏？」

「さあ？ どうでしょうね」

「お友達もいれて一緒に遊びに行こうよ」

場所は違えどナンパはどこも同じようなものである。お決まりの誘い文句にセールスのようなしつこさ。さすがに辟易し、一度くらい怒鳴ってやろうかと思ったときに、またドアのベルが乾いた音を鳴らした。



勢い良く店に入ってきた女の子は、莉桜に向かって「ごめん！ 待った？」と言いながら駆け寄ってきた。

「お・そ・い・ぞ！ いくみ」

さも当然のように言い放った莉桜にいくみが驚いたような顔を見せる。

「なにキョトンとしてるのさ。いくみだってあたしに気付いたんでしょ？ あたしだって、気付くってば」

軽く笑う莉桜にいくみが抱きついてくる。その光景を呆然と見ていたナンパ達だったが、莉桜の待っていた人間が女だとわかると、「じゃあ、どこ遊びに行く？」ともうナンパが成功したとでも言うように誘ってきたが、それを止めたのは店員だった。

「お客さん、うちはナンパをする場所じゃないんだ。そんなくだらねえこと、他所でやってくれるかな」

営業スマイルもなく、手には包丁が握られていると、さすがに相手に与える威圧感というのは相当なものらしく、舌打ちをしながら男たちは居なくなった。

「ありがとうございました」と言うつもりだったのが、途中でいくみの「カズマちゃん。あたしオレンジジュースとサンドイッチ」という言葉に消されてしまった。

.....かずま？

まさかと思って店員のほうを振り向くと「いくみにはすぐ気付いたのにな」と若干すねた言葉が返ってきた。

——米風館。それが莉桜といくみを繋ぐキーワードだった。エデンで初めていくみと出会ったときに訪れた喫茶店。その雰囲気によく似ているのが米風館だった。チェーン展開しているわけもないそのお店が、学校の帰り道にあると聞いて、莉桜はいくみが同じ高校だとすぐに分かった。だからエデンを辞めるときも、いくみには米風館で会おうと言ったのだ。もっとも、全て言う前にいくみは居なくなっていたし、これほど早く会えるとは思わなかった。だが、それ以上に「カズマが仕事してるとは思わなかったわ」

目の前で自分でつくったクラブハウスサンドをかじるカズマにポツリとつぶやく。

「ここ叔父さんの店なんですけど、学校から近いんで、居候させてもらう代わりに、店番やるんですよ」

「もう悠真じゃないし、同じ歳だから敬語は使わないで」

「確かに、こうして会うと同年って実感するな」

少し複雑そうな顔をしたけど納得したようで、カズマから敬語は消えた。それから少し話しをしていたつもりが、気付けばもう夕方を過ぎようとしている。

「たった一日しか会ってないのに、こんなに話すことがあるなんてビックリだよな」

いくみのその言葉がとても印象的だった。

「時間も時間だし店閉めちゃうわ」

その言葉で解散が決まりみんなで一緒にお店を出る。それぞれの岐路につく前に、いくみが明日からどうするのかを聞いてきた。

普通であれば月曜日なのだから学校へ行くのが当たり前だが、まったく行っていない場所に平然と顔を出すのも勇気が必要だ。それに、どうしてもやりたいことがある。

「明日、人を探しに行こうと思うの。すぐに見つかるとは思ってないけど、あたしがここに居れ

るのはその人のおかげだと思うし、もしかしたら、これから何をすべきなのかも見つかるかもしれないから」

そういった莉桜の瞳をカズマといくみはじっと見つめていたが、やがてお互いに顔を見合わせると、

「あたしも、莉桜ちゃんの人探し手伝うよ！」

「俺も手伝うさ。一度や二度サボっても問題無いだろ」

と手伝いを申し出てくれた。常識的に考えて、断るべきなんだとは思うけども、友達と一緒に居れる事が嬉しくて断りきれなかった。

「ありがとう」

ハッキリとした口調で言ったその言葉は、あたらしいスタートを告げるものだった。

その日は実に春らしい晴れだった。気温は日に日に高くなってきている。彼女は、いつコートからジャケットにかえようか、なんて心配をしていた。私はといえば、春のこの陽気の中で仕事をしなくて良い幸せをかみ締めている。晴れている日に仕事をするほど馬鹿らしいことはない。美人の助手がいて、安い味のコーヒーがあって、煙草があって、時々ケーキなんかも食べられる。夜はその美人と酒を飲むことも多い。その日暮らして時折焦ることもあるが、私は今の生活に満足している。

田中には彼女が調べたことと私が体験したことをまとめて報告した。結論としては、お前が心配しているようなことはこの先しばらく起こらない。とした。人々がエデンという神を頼り、教祖に信奉するには、あの神はまだ未熟であると判断したからだ。人は必ず気付く。触れられないこと、味わえないこと、正しいものが見えないこと。都合の悪いことから目をそらして生きられないということ。それはその場凌ぎの解決策であって、根本的な解決にはつながらないということ。

田中が私の報告に満足したかどうかはわからない。ただあいつは、良いだけ職場の愚痴をもらし、コーヒーをおかわりして、残りの報酬を置いて、拳句の果てに、「また来る」と言って帰っていった。

高清水に関してはわからなかった。報告をしようと連絡をしたのだが、「もういいんです」とまるで押山への興味がなくなっているようだった。その判断は尊重すべきものであると思うので、私は何も突っ込まず、一週間分の調査料を必要経費を込めた分で請求した。翌日にはその金額

が振り込まれていたもので、ここで依頼は完全にクローズとなった。

私と彼女はいつものようにソファに向かい合って座っていた。

「所長、次の仕事、何か宛はあるんですか？」

「ん？ まあ今はないけれど、大丈夫。私たちが生活していくくらいならどうにかなるから」

「なんですかそれ。私たち別に、運命共同体じゃないんですからねー。お給料もらえなかったら私は辞めますからね」

そんな話をしていると事務所のドアがノックされる。私たちは話をやめて顔を見合わせた。彼女があわてて私たちのカップをキッチンにさげに行く。ノックの音からして田中ではない。仕事は極力したくないが、どうにかなるとは言ったものの、仕事はあるに越したことはない。私は手でさっと髪を撫で付けると、小さく咳払いをしてドアを開けた。

「はい、西崎探偵事務所」

ドアを開けたとき、普段であれば目の前に映る相手の顔。だがそれはいつもより少し下にあった。戸惑い、好奇心、その表情はいつもの依頼人と変わらない。だが私は一瞬、不思議な顔をしてしまったかもしれない。調査業、探偵という仕事を始めてから今日の前にいるようなお客を迎えることは恐らく初めてだろう。

そこには一人の女子高校生が立っていた。

了